岩波文庫
32-066-4

インド古典説話集

カター・サリット・サーガラ

（四）

岩本　裕訳

岩波書店

目次

ムリガーンカダッタ王子の物語

ムリガーンカダッタ王子の物語

一

三界にその名も高いアヨーディヤー*という都城があります。むかし、その都城にアマラダッタという王がいました。この雄々しく気高い王の妃スラタ・プラバーは、まこと祭火の輝きを増す供物のように、王にいつも深い愛情を捧げていました。この王妃にムリガーンカダッタという王子が生れましたが、王子は数えきれぬほどに多くの徳を具えていました。

この王子に十人の侍臣がいました。プラチャンダ・シャクティ、ストゥーラ・バーフ、ヴィクラマ・ケーシャリン、ドリダ・ムシュティ、メーガ・バラ、ビーマ・パラークラマ、ヴィマラ・ブッディ、ヴィヤーグラ・セーナ、グナーカラ、そして十番目はヴィチトラ・カタといい、みな良家の生れで、若く、勇気があり、賢明で、主人のことに専心していました。ムリガーンカダッタは父の家でこれらの人々と一緒に楽しく暮していましたが、王子に相応わしい妃がまだありませんでした。

あるとき、侍臣の一人ビーマ・パラークラマが王子に密かに言いました。

「王子さま、昨夜の出来事を聴いてください。わたくしは王宮の露台に寝ていましたが、夜中に突然に眼が覚めまして、ヴァジラ*のように鋭い爪をもった獅子がとびかかってくるのを見ました。わたくしが剣を手にして立上りますと、獅子は逃げ出しましたので、わたくしは一生懸命に

追いかけました。獅子は河を渡りますと、わたくしに向って長い舌を出しましたので、わたくしは剣でその長い舌を切りおとしました。その舌は橋のように長うございましたので、舌を橋がわりにして、わたくしが河を渡りますと、獅子はその途端に異形の巨人になりました。

『お前は誰だ。』

と、わたくしが尋ねますと、その巨人が言いました。

『わしはヴェーターラ*だ。本当に勇敢な奴だ。わしはお前の勇気に感心したぞ。』

という言葉を聴きまして、わたくしはこの男に

『本当にそうなら、わたしの主人ムリガーンカダッタ王子のお妃になられるのは、どなたなんだ。』

と尋ねました。すると、わたくしの言葉を聴きまして、そのときヴェーターラが申しました。

『ウッジャイニー*にカルマ・セーナという有名な王がいる。この王に、美しさの点ではアプサラス（天女）にも勝る王女がある。この王女はシャシャーンカヴァティーといい、プラジャーパティ（造物主）が創造した美の容器かと思われるほどだ。この王女がムリガーンカダッタ王子の妃となるであろう。そして、お前の主人はこの美しい姫を妃として全世界の王者となるであろう。』

と言いまして、かのヴェーターラは姿を消しました。それで、わたくしも家に帰りましたのですが、これが昨夜の出来事であります。」

ムリガーンカダッタ王子はビーマ・パラークラマからこの話を聴きますと、自分の侍臣をみな

召集しまして、この話を聴かせました。そして、彼等に言いました。

「わたくしが夢の中で見たことを聴いてもらいたい。われわれ一同がある大きな森の中に這入っていったように思う。そこで喉がはげしく乾いたが、漸くのことで水のあるところに辿りつき、水を飲もうとした。すると、武装した五人の男が突然に現われでて、われわれが水を飲もうとするのを妨げた。物凄い喉のかわきに苦しんでいたわれわれが五人の男を殺して、さて水を飲もうとすると、五人の男も水も消えてなくなった。こうして、われわれが困りはてていると、突然に前額部に月輪を輝かされたシヴァ神*が牡牛に乗って現われられた。われわれはシヴァ神に祈りを捧げた。神はひれ伏しているわれわれに右の眼から涙のしずくを地上に墜された。すると、それは忽ちに海になった。その海から素晴らしい真珠の頸飾りを得て、それを頸につけた。そして、血の滴る髑髏*で海水を飲んだ。その瞬間に、わたしは眼が覚めたのだ。すると、夜が終ったのである。」

と、このようにムリガーンカダッタが不思議な夢を話しました。他の侍臣たちが喜こんでいると、ヴィマラ・ブッディが王子に言いました。

「王子さま、シヴァ神があなたさまにこのように恩寵を垂れられたのですから、あなたは幸福です。あなたは夢の中で頸飾りを得て、大海を飲みほされたのですから、かならずやシャシャーンカヴァティー姫を妃とされ、全世界を統治されるでありましょう。しかし、他のことは少しばかり不運を意味するでありましょう。」

そこで、ムリガーンカダッタは侍臣たちに再び言いました。

「夢の中でえたわたしの果報といい、ビーマ・パラークラマがヴェーターラから聴いたことといい、その通りに実現するであろうが、カルマセーナ王が軍勢と要塞で守っている王女シャシャーンカヴァティーを、わたしは智慧の力でなんとしても得なければならない。智慧の力はあらゆる仕事に於いて最上の道具である。まあ、聴いてもらいたい。この点について物語を話そう。

〔バドラ・バーフ王と賢相の物語〕

マガダ国*に、バドラ・バーフという王があった。この王にマントラグプタという賢人の中でも賢明な大臣がいた。あるとき、王は自分からこの大臣に言った。

「ヴァーラーナシー*の王ダルマ・ゴーパの王女アナンガ・リーラーは三界の美女といわれている。わたしはこの王女に求婚したけれども、かの王はわたしに対する敵意から承諾しない。かの王は猛象バドラ・ダンタを所有していて、打負かすことは困難だ。と言って、わたしはかの王女なしでは生きてゆくに耐えない。わたしには、最早手段はない。どうしたらよいか、言ってほしい。」

と、王から言われた大臣は、王に語った。

「陛下、何故にあなたは武勇だけが成功をもたらし、智慧が成功をもたらさないと仰せられる

のですか。くよくよすることは御無用に願います。陛下のために、わたくしは自分の智慧で成功してごらんにいれましょう。」

と言って、大臣は苦行者に変装し、六、七人の従者をつれて、ヴァーラーナシーに赴いた。その地で大臣は、彼の弟子に変装した従者たちは、

「この方は神通力をもっていられる。」

と、彼の功徳にあずかろうとして集ってきた人々に宣伝させた。

ある夜、目的を成就する手段を見出そうと役者をつれて歩きまわっていたとき、象の番人の妻が三、四人の武装した人に連れられて、家から何処かに人目を避けて足早に出てゆくのを見ました。

「たしかにあの女は出奔するのだ。何処に行くか、見てやろう。」

と考えて、従者と一緒にその女のあとをつけた。そして、その女が這入った家を遠くから見とどけて、その夜は彼は自分の宿に帰った。

その翌朝、財産を持って出奔した妻を探してうろつき廻っている象の番人のところへ、策略を用いて従者たちを遣りました。象の番人は妻を探しだせないので、丁度毒を飲んだところだったので、従者たちは同情したふりを装うて、智慧をしぼって解毒剤を飲ませた。

「われわれの先生のところへ行こう。先生は聖人で、御存知でないことはないんだ。」

と言って、この男を大臣のところへ連れてきた。象の番人は大臣を見て、戒行を修めた功徳に輝

く尊師と思い、足許に平伏して自分の妻のことを尋ねた。大臣は瞑想するふりをして、夜中に見知らぬ人々に彼の妻が連れてゆかれた家の目標を教えた。象の番人は大臣を拝んで立去り、都城の警吏たちとその場処を取囲んだ。そして、妻を連れ去った悪人どもを殺し、妻をとりかえすとともに自分の財産と妻の装飾品も取りかえしました。

そして、その次の朝、象の番人は大臣のところに来て、恭々しく拝礼をして礼の言葉を述べ、この似而非聖人を食事に招待した。大臣が他人の家に這入ることを望まず、また夜分に食事することを望んだので、象の番人は夜間に象舎で食事を接待した。かの大臣は呪文の力で蛇を竹の中に這入らせて、内密にそれを持ちこみ、従者たちと一緒に接待を受けた。そこで、象の番人が座をはずしたとき、他の者たちが睡っている隙をねらい、蛇を睡っているバドラ・ダンタ象の耳の中に竹筒から這入らせた。彼等はその夜をそこで過し、その翌朝自分の国マガダに帰ったが、象はそのために死んだ。

ダルマ・ゴーパ王の誇りともいうべき象を殺して、かの賢明な大臣が帰還すると、バドラ・バーフ王は狂喜した。そこで、王女アナンガ・リーラーに求婚の使節をヴァーラーナシーに派遣した。象のいなくなって弱くなったダルマ・ゴーパ王は王女をバドラ・バーフ王に与えた。時機を知る王者は風になびく葦に似た帰服を享受するものだ。

こうして、大臣マントラグプタの智慧によって、バドラ・バーフ王は美姫アナンガ・リーラー

を得た。されば、わたしもまた智慧によって妻を得たいものだ。」
と、ムリガーンカダッタが言いましたので、侍臣のヴィチトラ・カタが王子に言いました。
「夢の中で約束されたシヴァ神の恩寵により、あなたは一切のことを成就されましょう。神の恩寵は必ず遂げられるもので、成就しないことがありましょうか。この点について、それを明らかにする一つの物語をお話しましょう。お聴きください。

〔プシュカラークシャ王とヴィナヤヴァティーの物語〕

タクシャシラー*の都に、バドラークシャという王がありました。彼は息子の生れることを願って、剣に百と八本の白蓮を載せて、毎日ラクシュミー女神*を祀っていました。あるとき、王が沈黙をまもったまま女神に祈っていましたとき、心の中で白蓮を数えてみますと、たまたま一本不足でありました。王は自分の心臓の蓮華を切りとり、女神に捧げましたので、女神は満足され、全世界を支配する息子を与えるという恩寵を授けられました。そして、女神は王の傷を癒して、姿を消しました。すると、皇后に息子が生れましたので、王は
「心臓の蓮華(プシュカラ)からこの子は生れた。」
とて、吉相を具えた息子にプシュカラークシャという名をつけました。歳月を経て、王子が青年になりますと、バドラークシャ王はこの徳を具えた王子を王位につけて、自分は森林に隠退しました。

プシュカラークシャは王位に即きますと、毎日シヴァ神を礼拝していましたが、ある日、礼拝の終った後にシヴァ神に妻を懇請しました。
「倅よ、汝は汝の望むがままに目的をすべて達成するであろう。」
という声が天から聞こえてきました。こうして、希望が生じて満足しました王が、あるとき狩猟を娯しむために野獣の棲む森林に行きました。王は其処でつるみ合った二疋の蛇を食べようとしている駱駝を見つけて殺しましたが、なにか心が重く晴々としませんでした。駱駝は殺された途端に姿を変えてヴィディヤーダラ*となり、喜んで、プシュカラークシャに言いました。
「あなたはわたくしを援けて下さいました。わたくしの申上げることを聴いて下さい。
ランク・マーリンという勝れたヴィディヤーダラ王がいました。ターラーヴァリーというヴィディヤーダラ族の娘が彼を見まして、美男子を夫に望んでいましたこの娘は彼に惚れて、若々しい彼を夫に選びました。ターラーヴァリーの父は両人が親の許諾もなしに結婚したことを怒り、両人が暫くの間別れて暮すようにと呪詛しました。
こうして、ターラーヴァリーとランク・マーリンの夫婦は募りたかぶる欲情に駆りたてられて、自分の領土のあちらこちらで遊び戯れていました。あるとき、ターラーヴァリーの父親の呪詛のために、両人は森の中で離れてしまい、互いに姿を見失いました。そこで、ターラーヴァリーは夫を探して歩きまわり、遂に西海の向岸にある森林に着きましたが、その森には神通力を持つ一

人の聖仙が住んでいました。其処には花の満開したジャンブ*の大樹があり、花に集まる蜜蜂の甘い唸り声で彼女を慰めるかのようでありました。彼女は蜜蜂の姿となって、その樹の花の中に這入って休息し、蜜を飲みました。その途端に、運命のしからしめるところ、夫が其処にやって来るのを遠くから見まして、彼女は喜びのために溢れる涙で花を湿らせました。彼女は蜜蜂の姿を直ちに捨てて、彼女を探して其処まで来ました夫のランク・マーリンのところに行き、両人は目出度く再会しました。あたかも月光が月輪と結合するさまさながらでありました。

こうして、ターラーヴァリーは夫と一緒に自分の家に帰ってゆきましたが、彼女の涙で湿らされたジャンブ樹の花から実が生じました。そして、その実の中に、程なく、女が生じましたが、天上の人間の涙は決して無駄になることはないからです。

あるとき、ヴィジタースという聖仙が木の根と実を探して其処に来ましたとき、その実が熟して、ジャンブ樹から落ちました。樹から落ちて実が割れますと、その中から神々しい乙女が現われでて、掟通りに聖仙の両足に拝礼をしました。天眼をもつ聖仙はこの乙女を見まして事の次第を知り、驚いて自分の隠棲処に連れ帰り、ヴィナヤヴァティーという名をつけました。聖仙の隠棲処で歳月を送りましたヴィナヤヴァティーが大人になりましたとき、たまたま空中を旅行していましたわたくしが彼女を見ました。そこで、自分の容姿に自惚れていましたわたくしは、恋に盲目となり、彼女に近づき、嫌がる彼女を無理に連れ去ろうとしました。その瞬間に、彼女の叫び声を聞きましたヴィジタース仙が来まして、怒ってわたくしに呪詛しました。

『自分の容姿に自惚れた愚か者よ、汝は醜い姿の駱駝となれ。汝がプシュカラークシャ王に殺されるとき、呪詛から解放されるであろう。かの王こそ、ヴィナヤヴァティーの夫となるであろう。』

と、聖仙から呪詛されましたわたくしは、地上に駱駝となって生れました。そして、今、わたくしにかけられた呪詛は終りました。ですから、あなたは西海の向岸にあるスラビマールタという、かの森林に行きなさい。そして、美の女神の誇りをさえ奪うという天上の女性を妻となさるがよい。」

と、ヴィディヤーダラはプシュカラークシャに言いまして、天に昇ってゆきました。

プシュカラークシャ王は自分の都城に帰り、王国を大臣たちに委ねた後、馬に乗って夜間にひとりで出かけました。そして、遂に西海の岸に着きましたが、

「如何なる手段を用いて、大海を渡ろうか。」

と、其処で考えました。其処に誰も居ないドゥルガー女神*の祠堂を見つけましたので、彼はその中に這入り、水浴をして身を清めた後、女神を祀りました。誰かが其処に遺していったヴィーナー*を手にして、王は自分の作った歌で恭々しく女神を讃嘆しました。王がヴィーナーを弾じて讃嘆しましたのを喜ばれた女神は、従者の鬼霊たちに命じて、睡っている王を夜の間に海の向岸まで連れてゆかせました。

こうして、その翌朝、海岸で眼を覚ましましたプシュカラークシャ王は、自分がドゥルガー女神の

祠堂の中にいないで、森の中にいるのに気づきました。王は驚いて立上り、あたりを歩き廻っていますと、聖仙の隠棲処が見えました。樹木は果実の重さにたわんで、王を歓迎してお辞儀をするかのようでしたし、小鳥たちの囀る声は王に「ようこそ、いらっしゃいました」と言っているようでありました。王は其処に這入って、弟子たちに囲まれた聖仙を見ました。王は聖仙に近づいて、聖仙の足許にひれ伏しますと、智慧深い聖仙は王を叮重に迎えて言いました。

「プシュカラークシャよ、そなたが探しているヴィナヤヴァティーは薪などをとるために今丁度出かけている。暫く待たれよ。前生に於いて妻であったあの娘と、王よ、今日結婚するがよい。」

と、聖仙から言われましたプシュカラークシャ王はそのとき考えました。

「よかった、この聖仙こそヴィジタース仙だし、この森こそかのヴィディヤーダラの言った森だ。とすれば、ドゥルガー女神が海を渡らせて、わたしを此処に連れてきてくれたに相違ない。ヴィナヤヴァティーがわたしの前生の妻だと聖仙は言ったが、不思議なことだ。」

と思い、王は喜こびながらも聖仙に尋ねました。

「尊者よ、どうしてヴィナヤヴァティーがわたくしの前生の妻であったのでしょうか。お話しください。」

と尋ねますと、聖仙が言いました。

「不思議に思うならば、わたしの話を聴きなさい。

むかし、タームラリプティー*に、ダルマセーナという商人がいました。この商人にヴィデュル・レーカーという美しい妻がありました。この商人がたまたま強盗に襲われて兇器で傷を受けましたので、火に身を投じて死のうと思い、妻と一緒に家から出ました。そのとき、はからずも、この夫婦は空を飛ぶ美しい番(つがい)の白鳥を見ました。そこで、夫婦は白鳥に心を奪われたまま火に這入って死にましたので、両人は番の大白鳥となって再び生れました。

あるとき、雨期に彼等が棗椰子の樹上の巣の中にいますと、夜中に暴風雨が起り、風が樹を倒し、彼等をはなればなれにしました。その翌朝、暴風雨が静まりますと、雄鳥は池や諸方角を飛びまわって雌鳥を探しましたが、見つけることができませんでした。恋しさに心を悩ませていました雄鳥は、雨期に白鳥の集まるマーナサ湖*のことを、途中で出会った雌の白鳥から聴き、心をはずませて其処へ行きました。雄鳥は其処で妻の雌鳥を見つけ、雨期をそこで過したのち、妻と戯れ遊ぶために、ある山の頂に行きましたが、其処で雌鳥は猟師に射殺されました。それを見て、雄鳥は恐怖と悲しみに打ちひしがれて其処から逃げました。

猟師は射殺した雌の白鳥を携えて帰る途中で、武装した多勢の人々がやって来るのを遠くから見まして、

『奴等はこれを奪いとるだろう。』

と思い、急いで鎌で草を刈り取り、鳥を草で地上に覆いかくしました。多勢の人々が通り過ぎますと、猟師は鳥を取りに立戻りました。ところが、猟師が刈り取った草の中に死者を蘇生させる

棄草があり、この棄草の汁液で蘇生しました雌の白鳥は草をはね飛ばして、猟師の眼の前で空中に飛び立ちました。

話かわって、雄の白鳥はある池の岸に飛んでゆき、その池に戯れている白鳥の群の中に妻の雌鳥の姿を見たように思い、夢中になって群の中に飛び下りました。そのとき、ひとりの漁夫が網を投げて、白鳥をすべて捕えてから、食事をはじめました。そのとき、雌鳥が夫を探して其処に飛んできましたが、夫が網に捕えられているのを見て悲しみながら四方を見まわしました。すると、その池で水浴している人が宝玉の頸飾を岸にぬいだ衣服の上に置いているのを見つけました。雌鳥は飛んでいって、その人が気づかない間に頸飾をとり、漁夫に見せびらかせながら空中をゆっくり飛びました。漁夫は嘴に頸飾をくわえた白鳥を見ますと、鳥を捕えた網を放りすてて、手に棒を持って雌鳥のあとを追いかけました。雌の白鳥はその頸飾を遠くの岩の頂に置きましたので漁夫はそれを手にいれようとして岩に攀じ登りはじめました。それを見ますと、雌の白鳥は急いで引返し、捕えられている夫の近くにある樹の上で寝こんでいる猿の眼をつつきました。眼をつつかれた猿が怖れた拍子に樹上から網の上に落ちました。そのため網が破れて、白鳥はみな逃げました。こうして、夫婦の白鳥は再び会うことができましたので、お互いに自分の冒険を語りあい、喜びあって思いのままに遊び戯れました。漁夫は頸飾を手に入れて、網で捕えた白鳥を持ち帰ろうと引返しますと、頸飾を盗られた男がそれを探しているのに出会いました。漁夫が怖れているのを見まして、その男は漁夫が頸飾を盗ったと思い、それを奪いかえして、漁夫の右手を

刀で切り落しました。雌雄の白鳥は一本の蓮華を相合傘にさして、日中に池から飛びたち、空中を飛びまわりました。

そして、間もなく、シヴァ神の礼拝に専念している聖仙が住居を構えた、ある河岸に着きました。そのとき、空を飛んでいる雌雄の白鳥は、猟師の放った一本の矢で射貫かれ、地上に落ちました。すると、白鳥たちが傘にさしていました蓮華は聖仙が礼拝しているシヴァ神の男根*の頂に落ちました。そこで、猟師はそれを見まして、雄鳥を自分のものとし、雌鳥を聖仙に贈りましたので、聖仙はそれをシヴァ神に供えました。

さて、プシュカラークシャ王よ、あなたはこの雄の白鳥で、シヴァ神の男根の頂に落ちた蓮華の威力により、今日王家に生れたのです。そして、かの雌の白鳥がヴィナヤヴァティーで、彼女の肉でシヴァ神は特別に祀られた功徳により、ヴィディヤーダラ族の家に生れたのです。従って、ヴィナヤヴァティーはあなたの前生の妻なのです。」

と、ヴィジタース仙はプシュカラークシャ王に語りました後、王を水浴に行かせて、自分は昼の勤行（ごんぎょう）をつとめました。

さて、プシュカラークシャ王が森の中を流れる川の岸に行きますと、花を摘んでいるヴィナヤヴァティーの姿が見えました。彼女の姿は、あたかも今まで森の繁みを見たことのない太陽の光線が好奇心を起して森に来たかのように、あたりを輝かしていました。王が奇異の念にうたれて

「あの女（ひと）は一体誰なのだろうか。」

と考えていますと、ヴィナヤヴァティーが草に腰を下ろして、侍女と内緒話をしていました。

「ねえ、むかし、わたしを攫おうとしたヴィディヤーダラが呪詛から解放されて、今日来ましたのよ。そして、わたしの夫の来ることを告げてくれましたのよ。」

この言葉を聴きまして、侍女が聖仙の娘に答えました。

「そうなんです。今朝、わたくしが聴いていますところで、ヴィジタース仙がご自分の弟子のムンジャ・ケーシャに

『急いで行って、ターラーヴァリーとランク・マーリンを連れてこい。まこと、今日、彼等の娘ヴィナヤヴァティーとプシュカラークシャ王の結婚式が行われよう。』

と、このように申されました。ムンジャ・ケーシャは

『承知いたしました。』

と答えて、出かけました。ですから、わたくしたちも聖仙の庵室へ急いで帰りましょう。」

このように侍女から言われましたヴィナヤヴァティーは其処を立去りました。プシュカラークシャ王は覚られずに遠くから二人の話を聴きました。王は燃えさかる恋の焔を鎮めるかのように水中に飛びこんで水浴をしました後、ヴィジタース仙の隠棲処に引返しました。其処にはターラーヴァリーとランク・マーリン王が到着していまして、二人の前にひれ伏すプシュカラークシャ王に敬意を表しました。そして、苦行者たちがその周囲に集まりました。こうして、第二の聖火の権化ともいうべき大仙ヴィジタースの苦行によって光り輝く祭壇の上で、ランク・マーリンは

プシュカラークシャ王にヴィナヤヴァティー姫を与え、また天上を駆る神々しい車を贈りました。

「四海に囲まれたる大地を、この妃とともに統治せよ。」

と、大仙ヴィジタースは王に祝福の言葉を与えました。

かくて、聖仙の許しを得て、プシュカラークシャ王は花嫁をともない、天上を駆る神々しい車に乗り、大海を渡り、自分の都城に帰りましたが、王の臣下の者たちの眼には王の姿はまこと月輪の昇る姿さながらでありました。

プシュカラークシャ王は世界を征服し、車の威力により覇王の位を得ました。そして、ヴィナヤヴァティーとともに長く幸福を享受しました。

「このように、たとい仕事がどのように困難でありましょうとも、神々が恩恵を垂れられますかぎり、この世に於いて成就しないものはありません。ですから、夢の中にシヴァ神が現われられて恩寵を約束されたのでありますゆえ、王子さま、あなたのご希望は間もなく成就いたしましょう。」

ムリガーンカダッタ王子はこの不思議な物語を聴きましたとき、シャシャーンカヴァティー姫を得たいと切望しまして、侍臣たちを連れてウッジャイニーへ行く決心をしました。

二

このようにして、ムリガーンカダッタはヴェーターラから聴きましたカルマ・セーナ王の王女シャシャーンカヴァティーを得たいと熱望し、苦行者に変装して秘かに都城から抜け出しウッジャイニーに赴こうと、侍臣たちと相談しました。王子は自分から侍臣のビーマ・パラークラマに棒や骸骨などを集めるよう命令しました。ところが、王子が自分の館にこのような物を集めていることを、ムリガーンカダッタの父王の大臣首席が密偵によって知りました。またそのとき、たまたまムリガーンカダッタが王宮の露台を散歩していまして、蒟醤（きんま）を噛んだ唾をはきました。ところが、運悪く、丁度そのとき露台の下を通りかかり、王子には姿の見えなかった父王の大臣の頭上に、唾が落ちました。その唾はムリガーンカダッタが吐いたことを知り、沐浴をして身を浄めましたが、大臣はこの侮辱に対してムリガーンカダッタに怨を抱きました。

たまたま、その翌日、ムリガーンカダッタの父アマラダッタ王が病気に罹りました。こうして、好機を摑んだ大臣は、秘密を王に告げても王が怒ってわが身に危険を与えることのないように王に懇願した後に、急病に苦んでいる王に秘かに言いました。

「陛下、ビーマ・パラークラマの家でムリガーンカダッタが陛下に対し呪法を始めました。そのために、陛下は病気に罹られたのです。わたくしは密偵によってこのことを知りましたのです

が、このことは明々白々の事実であります。ですから、陛下の御息子とはいえ、お身体から病気を追払うように、王子を国外に追放なされませ。」

と、大臣から聴きまして、王は迷いながらもビーマ・パラークラマの家に自身の将軍を派遣して調べさせました。将軍は毛髪や骸骨などを見つけて直ちに持ち帰り、王に見せました。

「王位を望んで、王子は余に対し陰謀をたくらんでいる。侍臣たちと一緒に、王子をこの都城より遅滞なく追放せよ。」

と、王は怒って将軍に命令しました。病気に罹った王者で、自分の大臣たちの詭計を見破りうる人がいましょうか。そこで、将軍はムリガーンカダッタのところに行き、王の命令を伝え、侍臣たちと一緒に王子を城外に追放しました。王子は突然に目的を達成したことを喜こび、ガネーシャ神*を祀った後、心の中で両親に別れの挨拶をしまして出発しました。

アヨーディヤーから遥かに離れたとき、王子はプラチャンダ・シャクティをはじめとする十人の随行者に言いました。

「シャクティ・ラクシタというキラータ族*の偉大な王がいる。この王は諸学芸に通じ、梵行を堅く守っている人だが、わたしの幼な友達である。嘗て、この王の父が戦争で捕虜となったとき、彼は父王の釈放のために、人質となって此処にとどめ置かれた。かの王の父が死去したとき、親族の者たちが彼に反旗を翻したが、わたしが頼んだので、わたしの父が軍隊を派遣して彼を父祖伝来の王位に即けたのだ。とにかく、われわれはこの王のところへ行き、それからシャシャーン

カヴァティーを迎えるためにウッジャイニーへ行こう。」

と、ムリガーンカダッタが言いますと、侍臣たちが同意しましたので、一行は其処を出発し、夕方にある大きな荒野に着きました。其処には樹木も水もありませんでしたが、漸くのことで池を見つけました。その岸には枯れた樹が一本立っていました。ムリガーンカダッタは其処で夕方の祭祀を行い、水を飲み、侍臣たちと一緒に、枯れた樹の下に疲れた身体を横たえて睡りました。月光に照らされた夜中に、彼が目を覚ましますと、枯れた樹が次第に葉を繁らし、花を咲かせ、果実をみのらすのが見えました。果実が熟して落ちはじめましたので、彼は直ちに侍臣たちを起して、この奇蹟を見せました。彼等は驚きましたが、空腹でしたので一緒に美味の果実を食べました。彼等が食べおわりますと、彼等の見ている前で、枯れた樹木は突然に若い婆羅門になりました。驚いたムリガーンカダッタが尋ねますと、この若者が語りました。

「アヨーディヤーに、ダマディという勝れた婆羅門がいました。わたくしはその息子でシュルタ・ディといいます。饑饉のとき、母が死にましたので、父はわたくしを連れて諸方を放浪し、此処に来ました。此処である人から五箇の果実を貰いましたが、父は飢のために弱りはてていましたが、三箇をわたくしに呉れまして、二箇を自分のためにのこしておきました。こうして、父が水浴をしに池に行きました間に、わたくしは父が自分のためにのこしておいた果実も食べてしまい、狸寝を装うていました。父は水浴を終えて帰ってきまして、わたくしが狸寝を装うて丸太のように寝ころがっているのを見まして、呪詛しました。

『お前は枯れた樹となって、この池の岸に立っておれ。月が照る晩には、お前に花が咲き、実がなるであろう。いつか、お前が果実で客人たちを満足させたとき、お前は呪詛から解放されよう。』

と、父から呪詛されましたわたくしは忽ちに枯れた樹となりました。今、あなたがたが果実を食べられましたので、わたくしは長い呪詛から解き放たれました。」

と、自分の身の上を物語りました後、ムリガーンカダッタに尋ねましたので、彼も自分の身の上を話しました。こうして、策略に通暁した婆羅門シュルタ・ディは身内がありませんでしたので、ムリガーンカダッタに懇願して彼に随行することになりました。

ムリガーンカダッタはその夜を其処で過し、翌朝シュルタ・ディと一緒に侍臣たちを随えて出発しました。そして、途中、素晴らしい風景を眺めながら、漸くにしてキラータ族の土地に到着しました。そして、シュルタ・ディを友人のキラータ王シャクティ・ラクシタの許に派遣して、自分の来たことを知らせました。キラータ王はムリガーンカダッタの来たことを知ると、出迎えて、侍臣たちも一緒に、自分の都に案内しました。ムリガーンカダッタは自分の来た訳をキラータ王に話し、歓待されて数日を其処で過しました。そして、時機が来ればシャクティ・ラクシタが自分の仕事を援けるように相談をまとめて、ムリガーンカダッタはシャシャーンカヴァティーに心惹かれて、十一人の随行者を連れて、縁起のよい日に出発しました。

その途中、人里離れた森に到着しますと、樹の下に灰を身体に塗り頭髪を束ねた苦行者がいま

した。従者をつれてムリガーンカダッタはこの苦行者に近づき、
「何故にこのような隠棲処のない森に、ひとりでいられるのですか。」
と尋ねました。すると、苦行者が言いました。
「わたくしは偉大な学匠のシュッダ・キールティという方の弟子で、数々の呪文に通暁しております。わたくしは、あるとき、吉祥の相をもつクシャトリヤ*の少年を得まして、一生懸命にこの少年に霊鬼が憑くように努力しました。この少年に霊鬼が憑きますと、わたくしの質問に応じて、効力著しい霊薬や霊液のある土地を教えてくれました。
『このヴィンディヤ山*の森林の北部に、一本の孤立したシンシャパー樹があり、その下に蛇王の大宮殿があります。其処の水は日中には濃い塵埃に被われて隠れていますが、雌雄の白鳥が幾組も水鳥たちと遊び戯れているので判ります。其処にパーラーヴァタという名の竜族の長が住んでいまして、神と悪魔の戦の際にヴァイドゥールヤ・カーンティという、この世にならぶもののない名剣を得て所持しています。この剣を得た人はシッダ族*の王となり、誰からも征服されることはありません。この剣は勇者の援助をえて、はじめて手に入れることができます。』
と、霊鬼の憑いた少年が教えてくれましたので、わたくしはこの少年を解放しました。そこで、わたくしはこの名剣を手に入れたいと思い、他のものに目もくれず諸方を歩きまわりましたが、手助けしてくれる人を見つけることができませんので、失望のはて死のうと思い、此処にやって来ましたのです。」

ムリガーンカダッタは苦行者からこの言葉を聴きまして、
「わたしと従者たちが君を援助しよう。」
と、苦行者に言いました。苦行者はこの申出を喜こび、従者をつれたムリガーンカダッタと一緒に、足に塗った膏薬の力で、竜王の館に赴きました。竜王の館の位置を示す徴候を認めますと、苦行者は四方に呪文を結びつけた後、夜になりますとムリガーンカダッタたちを待たせておいて、魔法をかけた胡麻の実を撒き散らして水を清め、竜蛇を調伏する呪文を唱えて祭式をはじめました。そして、呪文の威力により、湧き起る雲などの障碍を征服しました。
すると、シンシャパー樹から神々しい女性が出てきました。この女性の身に帯びた宝石の装飾品の振れあう音はあたかも魅惑の呪文を唱えているかのように響き、苦行者に近づくやいなや恋のながし眼で彼の心を貫きました。この女性は豊かな乳房もあらわに、優美さをも振り捨てて苦行者に抱きつきましたので、自制心を失い呪文を唱えるのも忘れた苦行者の手から祭式の道具が落ちました。その途端に、好機を摑んだ竜王パーラーヴァタが自分の宮殿から、あたかもこの世の終りに立のぼる黒雲のように現われました。すると、神々しい女性の姿はかき消え、苦行者は眼を爛々と輝かし物凄く咆吼する怖ろしい竜を見て、心臓を破裂させて死んでしまいました。
苦行者が死にますと、竜は怖ろしい姿をやめて、苦行者に味方をしたムリガーンカダッタたちを呪詛しました。
「お前たちはこの男と一緒になって無駄なことをしたゆえに、その罰として、暫くの間はなれ

ばなれになれ。」

と言って、竜が姿を消しますと、その途端にムリガーンカダッタたちはみな眼が闇にさまたげられ、声を聴きわける力を失ってしまいました。そして、呪詛の力により、お互いに探しあいながらも、はなればなれになって、あちらこちらに行ってしまいました。人間の眼をくらます夜の闇が過ぎて朝になりますと、ムリガーンカダッタは従者たちとはぐれて、森の中を歩きまわっていました。

こうして、二三ヵ月が過ぎましたとき、ムリガーンカダッタを探していた婆羅門シュルタ・ディに突然に会いました。王子は涙を浮かべて足許にひれ伏すシュルタ・ディを暖かく迎え、侍臣たちのことを尋ねますと、シュルタ・ディは王子を慰めて、このように言いました。

「わたくしはあの方たちに会いませんでしたが、あの方たちの行くところは判っています。わたくしたちはウッジャイニーの都に行くことになっているのですから。」

などと言って、シュルタ・ディはムリガーンカダッタを激励しましたので、王子は彼を連れてウッジャイニーに向ってゆっくりと旅行を続けました。

数日旅行をしていますと、途中ではからずも自分の侍臣のヴィマラ・ブッディに出会い、王子は喜こびました。王子を見て涙を目に溢らせて足もとに膝まづくヴィマラ・ブッディを王子は抱きしめ、坐らせて、他の侍臣たちの消息について尋ねました。そこで、臣下の者たちの敬愛する王子に、ヴィマラ・ブッディが言いました。

「王子さま、竜の呪詛で皆の中の誰が何処へ行ったのか、わたくしは存じません。でも、王子さまが皆と必ずお会いなるということを、わたくしは存じておりますが、その訳をお聴きください。

竜の呪詛によって、わたくしが遠くへ飛ばされて放浪し、森の東部で疲れはてていましたとき、ある親切な人がわたくしを大仙ブラフマ・ダンディンの隠棲処に連れていってくれました。其処で聖仙から貰いました果実や水で元気を回復しましたわたくしは、森の中を歩きまわっている中に、隠棲処から遠く離れたところで、大きな洞窟を見つけました。好奇心を起して洞窟に這入りますと、その中に宝玉の宮殿がありましたので、わたくしはその格子窓から宮殿の中をのぞきこみました。すると、その中には、ひとりの女性がいまして、蜜蜂のとまっている車を廻わしていました。その傍には牡牛と驢馬がいまして、蜜蜂はその両方に分れてとまっていました。牡牛の方にとまっている蜜蜂は乳の泡を吸い、驢馬の方にとまっているのは血の泡を吸うていましたが、とまっている動物の色に応じて白と黒の蜜蜂になりましたが、やがて蜜蜂はみな蜘蛛になりました。それから、白と黒の二種類の蜘蛛はそれぞれに自分の排泄物で二色の網を毒のない花と毒のある花の上に張りました。そして、蜘蛛どもが網の上を勝手気儘に歩きまわっていますと、白と黒との二つの口をもった蛇が近づいてきて、蜘蛛どもを噛みました。すると、車を廻わしている女性が噛まれた蜘蛛どもを種々の甕の中に投げこみますと、蜘蛛は再び生き返ってきまして、以前の通りに網をつくって歩きまわりました。すると、有毒な花に張った網の上にいました蜘蛛どもが、毒の激しさにあてられて、大声をあげて叫びはじめました。別の網の上にいました他の蜘

蛛どもも、そのとき喚きはじめました。その声で瞑想を妨げられました婆羅門は、火を網に吹きつけて網を焼いてしまいました。蜘蛛は網を焼かれて中空の珊瑚の枝の中に這入り、その先端の輝く光の中に姿を消しました。とかくするうちに、女性も車も牡牛も驢馬も何処かに行ってしまいました。

それを見て愕きましたわたくしは、其処を歩きまわっていました。歩きまわっています間に、わたくしは美しい蓮華池を見ましたが、池には蓮華が咲き乱れ、群り飛ぶ蜂の唸り声は、わたくしに

『此処に来て、御覧になってください。』

と呼びかけているようでありました。その池の岸に腰を下ろして眺めていますと、池の中に大きな森が見えました。そして、森の中には、ひとりの猟師がいました。この猟師は十本の腕のある一頭の仔獅子を手に入れて育てましたが、

『どうしても馴れない。』

と怒って、その森から追払いました。この獅子は近くの森で牝獅子の吼えるのを聴き、その方に向きますと、旋風が起って獅子の十本の腕は捥ぎとられました。すると、腹の脹れた男がやって来まして、獅子の腕をもと通りにしてやりましたので、獅子は牡獅子を探しに森に出かけました。森の中で獅子は牝獅子のために苦労を重ねたのち、前生に於いて妻であった牝獅子と結ばれて、自分の森に帰りました。妻を連れて帰った獅子を見まして、猟師は獅子に森をまかせて、立去りました。

このことを見ましたわたくしは隠棲処に帰ってきまして、この二つの非常に不思議なことをブラフマ・ダンディンに物語りました。すると、過去・現在・未来に通暁する聖仙は、わたくしにこのように申しました。

『あなたは幸福者である。この凡てのことは恵み深いシヴァ神があなたに示されたのです。あなたが見たという女性はマーヤー*で、彼女の廻わしていた車は輪廻(りんね)*をあらわし、蜜蜂は生物を示す。牝牛と驢馬とはそれぞれに正義と不正の象徴で、蜜蜂の吸うている乳と血は善業と悪業を意味する。蜜蜂はそのとまっているものに影響されて、白と黒の二種類の蜘蛛となり、排泄物で象徴されている自己の努力により、子孫などの二種類の網をつくり、それぞれに幸福と不幸を示す毒のない花と有毒な花の上に張りめぐらされる。各自がそれぞれの網にしがみついていても、時機が来れば白と黒の二つの口をもつ蛇の姿をした死に咬み殺される。すると、女性の姿をしたマーヤーが、甕の形にあらわされた種々の胎に投げこまれ、そこから再び出てくるのだ。そして、再び前世の業(ごう)*に応じて白と黒の二種類の蜘蛛となり、息子などこの世の繋縛をあらわす網の上に落ち、幸福と不幸に結びつけられる。すると、己(おのれ)にふさわしい網にからませられた黒蜘蛛は、不幸の毒にあてられて、苦んで最高神に加護をもとめる。それを見て、白蜘蛛も、己にふさわしい網にとまっていながらも、自己の境遇に嫌厭を感じ、同じように最高神を呼びはじめる。すると、苦行者の姿で示現された神は、目を覚まされて、知慧の火焰ですべての網を焼きはらう。そこで、

彼等は日輪の象徴する珊瑚の中に這入り、その先端にある最高の住処に住みつく。そこで、輪廻をあらわす車とともに、正義と不正を象徴する牡牛と驢馬を連れて、マーヤーは姿を消したのである。このように、生類は、黒白の如何を問わず、それぞれの業によって輪廻の中を経めぐるのであり、シヴァ神を祀り祈ることによって輪廻から解放される。シヴァ神はあなたの迷妄をさますために、このように教示されたのだ。

あなたが池の水中に見たことは、こういうことなのだ。聴かれるがよい。神が水中に蜃気楼のように出現させられたことは、ムリガーンカダッタの未来の運命を示すものである。仔獅子は王子を意味し、十人の侍臣は十本の腕に喩えられた。獅子の棲んだ森は王子の祖国を意味し、猟師は王子の父王なのだ。別の森とはアヴァンティの土地で、そこに棲む牝獅子はシャシャーンカヴァティー姫の喩である。王子から腕を奪った旋風は竜の呪詛で、そのため王子は侍臣たちとはなればなれになったのだ。すると、腹の脹れた男の姿となってヴィナーヤカ*が現われられ、腕に喩えられた侍臣たちと再び会うことができるようになる。こうして、ウッジャイニーに赴き、非常な困難に堪えたのち、牝獅子シャシャーンカヴァティーを他の場処から得て、帰国するのだ。敵がしむけた障碍を排除して、妻を連れて帰ってきた獅子ムリガーンカダッタを見て、猟師に喩えられた父王は、森で表示された自分の領土をすべて委ねて、苦行林に隠遁することになるのだ。このように、シヴァ神は未来のことを過去にあったこととして、あなたに示された。従って、あなたの御主人が侍臣たちと再会し、妻をえて、王位に即かれることは必定じゃ。』

と、偉大な聖仙から教えられましたわたくしは、勇気が出まして、その隠棲処を出発しまして、ゆっくり旅を続けまして、王子さま、今日お目にかかることができました。ですから、出発の前に常にヴィナーヤカを礼拝されますので、王子さまは神の恩寵をえられまして、プラチャンダ・シャクティたち侍臣の者どもと再会され、目的を達成されましょう。」

と、侍臣のヴィマラ・ブッディから不思議な物語を聴きまして、ムリガーンカダッタ王子は非常に喜こびました。そして、ヴィマラ・ブッディと相談をし、他の侍臣たちと再会するということと自分の目的の達成のために、アヴァンティ*国の都城に向って出発しました。

三

こうして、ムリガーンカダッタ王子がシュルタ・ディとヴィマラ・ブッディの二人を連れて、シャシャーンカヴァティー姫をもとめてウッジャイニーに向って進んで行きますと、間もなくナルバダー河につきました。見ると、揺れさわぐ川浪は歓迎の手を振るかのように、白い水泡は微笑んでほころばした皓歯のように、王子が幸運にも侍臣と再会したことをよろこんで微笑み踊っているかのようでありました。王子が水をあびに河に下りて行きますと、たまたまシャバラ王*のマーヤーバトゥも、水をあびにやってきました。

シャバラ王が水あびをしていますと、三疋の河童が突然にとびだしてきて、王をひきずりこみ

ました。それを見た王の従者たちは怖れて逃げてしまいました。

ムリガーンカダッタ王子は、すぐさま刀を抜いて水中に飛びこみ、河童を殺して、シャバラ王を救い出しました。

シャバラ王は河童の襲撃を免れて、水から出てきますと、王子の足許に平伏して、言いました。

「運命の神に奇しくもここに連れてこられ、わたくしの生命をお救いくださったあなたは、どなたでございましょうか。あなたは、何という有徳なお家柄のお生れでございますか。あなたがたのごとき有徳な方々の訪問を受ける幸運の土地は、いずこでございますか。何卒、お話しください。」

と言いましたので、シュルタ・ディが一部始終をのこらず話しました。すると、シャバラ王は一層恭々しくお辞儀をして、

「あなたの御希望を遂行なさるおてつだいをいたしましょう。わたくしの友であるマータンガ族*の王ドゥルガ・ピシャーチャも、やって参りましょう。どうか、わたくしの館に御来臨を賜わりとう存じます。」

と、いろいろと丁寧な言葉でムリガーンカダッタを招き、自分の村に案内しました。そして、村に着くと、あらん限りの贄をつくして王子をもてなしましたし、村民ものこらず王子に貢物をささげました。マータンガ王も来まして、友人の生命を救ってくれたムリガーンカダッタ王子に、臣従のしるしとして、大地に頭をつけて平伏しました。王子はシャバラ王マーヤーバトゥの好意

を無にしないために、その村に数日のあいだ滞在しました。

こうして王子が滞在していたある日、シャバラ王は自分の侍衛であるチャンダ・ケートゥと博奕をはじめました。そのとき、雲が轟きはじめ、庭に飼っている孔雀が踊りだしましたので、マーヤーバトゥは立上って、それを見ました。すると、博奕の好きな侍衛が

「陛下、踊りのうまくない孔雀を御覧になって、どうなさるのですか。わたくしの家にいます孔雀は天下一品でございますよ。おのぞみなら、明日、お見せいたしましょう。」

と言いました。その言葉を聴くと、シャバラ王は侍衛に

「是非見せておくれ。」

と言って、出ていきました。ムリガーンカダッタは二人のやりとりをのこらず聴いていましたが、仲間と一緒に立上って、水浴・食事などをしました。

そして、夜になって、暗い闇があたり一帯をつつんでしまうと、王子は身体に麝香を塗り、青黒い衣服を着て、手に刀を持ち、仲間の寝ている部屋からひとりで抜け出しました。そして、あたりを歩きまわっていますと、向うからやって来た一人の男が暗闇のために王子に気づかずに側を通りすぎ、王子の肩に肩をぶっつけました。王子は怒って、その男にとびかかり、戦いを挑みました。すると、その男はあつかましい男だったので、その場をとりつくろうのにうまい返事をしました。

「君は深く考えないで、何を血迷うているのだ。よく考えたら、君は今夜月の照っていないこ

とを咎めるべきじゃないか。とにかく、暗闇の中では、こういうくだらないいさかいが起るもんだよ。」

と、うまく言い逃れたのを聴いて、王子は嬉しくなり、

「そら本当だ。だが、一体、君は誰だ。」

と聴きますと、

「わたしは盗人さ。」

と、その男が答えました。そこで、ムリガーンカダッタは

「手を握らせてくれ。わたしも君と同じ商売だよ。」

と、嘘を言いました。そこで、好奇心を起した王子はその男と仲間になり、一緒に歩いて、草の生い茂った古い堀のところへやって来ました。すると、その男は坑道の中に這入って行きましたので、王子はその男と一緒に歩いて行き、マーヤーバトゥ王の後宮につきました。燈火の下でその男を見ますと、その男は王の侍衛のチャンダ・ケートゥで、盗人ではありませんでした。侍衛は王妃の情夫だったのですが、王子がいつもと違った衣服を着ていましたし、燈火の光があまりとどかない隅に立っていましたので、ついてきた男が王子だとは気づきませんでした。

情夫のチャンダ・ケートゥが部屋に這入って行きますと、マンジュマティーという妃は立上って、彼の頸に抱きついて、ソーファにすわらせて、

「ねえ、あなたと一緒に来た人は誰ですの。」

と聴きました。

「わたしの友だちだよ。安心おしよ。」

と、チャンダ・ケートゥが言いますと、マンジュマティーは心配そうに

「妾のように運の悪い女は、どうして安心しておれるでしょう。王は死神の口にはいりかけていたのに、ムリガーンカダッタに救い出されるなんて。」

と言いました。チャンダ・ケートゥが

「なあに、そう心配するな。ねえ、おまえ、王とムリガーンカダッタを、そのうち、殺すよ。」

と言いますと、マンジュマティーが運命の神の命ずるままに

「あんたは、どうして、そんなにえらそうなことを言うのさ。ナルバダー河で王が河童につかまえられたとき、ムリガーンカダッタだけが王を助けようとしたのじゃありませんか。そのとき、あんたはなぜ王を殺さなかったの。あんたはこわくなって、逃げ出したくせに。とにかく、おしゃべりはよしなさい。誰かがあんたの言うことを聞くかも知れないんですよ。それに、あんたはムリガーンカダッタにひどい目にあわされるよ、あの人は勇士だっていうから。」

と言いました。すると、情夫のチャンダ・ケートゥは怒って、

「この阿魔、さてはおまえはムリガーンカダッタに惚れているんだな。よし、馬鹿にされたこの俺のしかえしを、さあ受けるんだ。」

と言って、立上って刀をふりあげました。

すると、王妃の信頼していた一人の侍女が走ってきて、手で刀をにぎって、とめました。その間に、マンジュマティーは別の部屋に逃れました。チャンダ・ケートゥが侍女の手から刀をもぎとると、侍女の指は切りおとされてしまいました。侍衛は、事の成行に驚いているムリガーンカダッタをうながして、もと来た道を通って、一緒に自分の家に帰ってきましたが、かなりあわてていました。

暗闇で誰だかみつけられなかったのをさいわいに、ムリガーンカダッタが、

「さあ、君の家についた。わたしはここで失敬しよう。」

と言いますと、侍衛が王子に

「まあ、今夜はとまって行けよ。君もひどく疲れたろう。」

と言って、ひきとめましたので、王子はチャンダ・ケートゥのすることを確かめたかったので、

「では、そうさせて貰うよ。」

と答えました。すると、チャンダ・ケートゥは召使の一人を呼んで、

「この人を孔雀のいる部屋に案内して、休ませなさい。寝床を用意するのだ。」

と言いつけました。

「承知いたしました。」

と、召使は王子をその部屋に案内し、燈火をつけて、寝床の用意をしました。そして、召使は部屋から出て、外側に鍵をかけました。王子は籠の中にはいっている孔雀を見ました。

「ああ、これが侍衛の言っていた孔雀だな。」

と言って、好奇心から籠戸をあけました。すると、孔雀は籠から出てきて、ムリガーンカダッタをじっと見つめていましたが、足許に倒れて、何度も苦しみもがきました。王子は苦しみもがいている孔雀を見ていますと、孔雀の頸に糸が結びつけてあるのが判りました。そのために孔雀が苦しんでいるのだと考えて、すばやくその糸を切りました。孔雀の頸から糸がとれた途端に、王子の眼の前で孔雀は王子の侍臣の一人ビーマ・パラークラマになりました。

ムリガーンカダッタ王子は驚いて、王子に恭々しく挨拶するビーマ・パラークラマを抱きしめて、

「これは、どうしたことなのだ。話しておくれ。」

と言いますと、ビーマ・パラークラマは嬉しそうに

「王子さま、どうか聴いてください。わたくしの冒険を最初からお話し申しあげます。

竜の呪詛で王子さまのお側からはぐれ、森の中をさまようていますと、一本のシャルマーリ樹のところへ、やって参りました。その幹にガネーシャ神の像が彫ってありましたので、わたしはその像を拝み、疲れていましたので、樹の根元に腰をおろしました。そして、

『この災難は自業自得だ。わたくしはこの罪深い自分をここで捨てよう。』

と考えて、神の像の前で断食して、そこにいました。

幾日かが過ぎたある日、年老いた旅行者がそこへやって来て、樹の蔭に腰をおろしました。わ

たくしを見て、この親切な人は
『お若いの、そんなに悄気た顔をして、どうしてこんな人のいない場処にいるのかね。』
と、執拗にたずねました。そこで、わたくしが一部始終をその通り話しますと、老人はわたくしを元気づけようとして、こんな話をしました。
『あんたは勇気のある人だとお見うけするが、どうして女のように自分を殺そうとなさるのだ。いや、女でも、不幸の際には勇猛心を起すものだ。まあ、こういう話を聴きなさい。

〔カマラーカラ王子とハンサーヴァリー姫の物語〕

コーシャラ*の都に、ヴィマラーカラという王がいましたが、その王子にカマラーカラという人がいました。この王子は、スカンダやカンダルパや天上の如意樹をだしぬくことを望んで、創造主が作りだしたかのように、勇猛で、容姿すぐれ、また寛容で物惜しみをしないという徳のすぐれた方でした。あるとき、四方に於いて詩人が讃えるにふさわしいこの王子の前で、以前から知っていた一人の吟遊詩人が詩を詠みました。

蓮の花咲き、もろもろの
鳥・蜂のむれ、かしましく

囀り唸る蓮池を
見つけえざりし白鳥の
群は、いずこに飛びゆきて、
憩いの喜こび、見出ださん。

マノーラタ・シッディというこの詩人が度々この詩を繰返して詠みましたので、カマラーカラ王子がそのわけをたずねますと、詩人が王子に語りました。
「王子さま、わたくしは諸国を遍歴して、メーガマーリン王の統治されるヴィディシャー*という、繁栄の女神の遊戯の園である都に参りました。その地で、わたくしは音楽の先生ダルドゥラの許に逗留しておりますと、たまたまある日のこと、先生がわたくしに
『明日、ハンサーヴァリーと申される王女さまが、王さまの御前で最近習われた踊りをされるとのことだ。』
と話してくれましたので、わたくしは王女の踊りが見たくなり、策を講じて、その次の日に先生と一緒に王宮に行き、音楽堂に参りました。そして、うちならされる音楽にあわせて、父王の前で踊る美しい姿の王女ハンサーヴァリーを見ました。装飾品を花のように揺がせ、手を若芽のようになびかせて踊る王女は、あたかも若さの風に煽られて愛の樹木にからむ蔓草のようでありました。そこで、わたくしは考えました。

『この雌鹿のような眼をもつ王女にふさわしい夫は、カマラーカラ王子をおいて外にない。このような姫が、もしカマラーカラ王子と結ばれないとすれば、愛の神カーマが花の弓の弦を引いたとて、なんの役にたとうか。よし、なにか策を講ずることにしよう。』

と考えまして、姫の踊りを見た後に、王宮の門に行き、

『われと肩を並べる絵師があれば、その者に絵を描かされるがよい。』

と書いて、張紙をしました。その張紙を誰も破る人がいませんでしたので、王はそのことを知って、わたくしを呼び、王女の部屋で絵を描くことを命じました。そこで、わたくしは王女の部屋の壁に、カマラーカラ王子さま、従者をつれたあなたさまの肖像を描いたのでございます。

『わたくしがはっきり言えば、王女はわたくしのたくらみを知ってしまうだろう。そこで、策略を用いて、王女にさとらせよう。』

と考えて、親友の一人の眉目秀麗な青年を説き伏せ、よく打合わせて、狂人を装わせました。この佯りの狂人が歌ったり踊ったりしながらうろついていますと、王女たちがそれを遠くから見て、なぶりものにしようと自分たちの傍に呼びよせました。そして、冗談半分に、この男をハンサーヴァリー姫の部屋に這入らせました。すると、この男はわたくしが書いたあなたの肖像画を見て、あなたを賞讃する歌をうたいました。

蓮華と鏍貝の吉相しるく、
吉祥の女神も恋を媚ぶ、
ヴィシュヌのごとく、限りなき
徳のかずかず湛えたる
カマラーカラの御姿を
ここに見るこそ、うれしけれ。

などと、踊りながら歌うのを聴いて、王女はわたくしに

『この男はなにを言っているのですか。あなたが描いた方はどなたですか。』

とたずねましたので、

『あの狂人はきっと以前にこの方を見たことがあるに相違ありません。わたくしはこの王子があまりにも容姿端麗でいられますので、敬慕のあまり、肖像画を描いたのです。』

と申しました、あなたさまのお名まえと人徳のかずかずをお話しました。すると、王女の心の中に、愛情の若木が生えてきて、あなたさまへの恋慕の溢れる流れが注がれるようになりました。

すると、そこへ王女の父のメーガマーリン王が来られて、その様子を御覧になり、怒って、踊っている佯狂人とわたくしとを部屋から追い出しました。それ以来、王女はあなたに恋いこがれて、あたかも黒分*の月のように、美しさをのこしながらも、日に日にやせほそりました。そして、とうとう、病気といつわって、父王の許しをえて、ヴィシュヌ神の神殿にとじこもり、孤独の生

活を送って神に仕え、悲しみをなくそうとしました。あなたを思うあまり睡ることもできず、月の光にさえ堪えられなくなり、夜と昼の区別もわからなくなりました。

ある日、わたくしが王女の住む神殿に行きますと、王女はわたくしを窓から見て呼び入れ、叮重にもてなして、衣服や装飾品をくださいました。わたくしが外に出て見ますと、衣服の裾に、さきほどあなたにお聞かせした詩が書かれていました。もう一ど、その詩を聴いてくださいませ。

蓮の花咲き、もろもろの
鳥・蜂のむれ、かしましく
囀り唸る蓮池を
見つけえざりし白鳥の
群は、いずこに飛びゆきて、
憩いの喜こび、見出ださん。

わたくしはこの詩を読んで、王女の心を知りました。そこで、あなたにお知らせするために、ここに参り、あなたの御前でその詩を詠んだのでございます。そして、王女がその詩を書きつけた衣服は、これです。」

と、吟遊詩人が言うのを聴いて、また衣服の裾に書きつけられた詩を見て、カマラーカラ王子は

王子の心の中に耳からも目からも這入りこんだ王女のことを思うて、よろこびました。

カマラーカラ王子がハンサーヴァリー王女を思うて、王女を獲る手段を色々と考えていますと、たまたま父のヴィマラーカラ王が王子を呼んで言いました。

「冒険心のない王者は、あたかも呪縛された蛇のように、滅ぶものだ。ひとたび滅ぼされたときにはどうして再び擡頭することができようか。そなたは悦楽に耽溺して、いままで一度も征服の意欲を燃やしたことはなかった。されば、怠惰な心を捨てて、奮起せよ。わたしは国にとどまるが、そなたは進撃して、敵のアンガ*王を征服せよ。かの王は自分の国を出て、われわれに攻撃をしかけているではないか。」

と、父の言葉を聴きますと、勇敢なカマラーカラは喜んで承諾しましたが、心は恋しい女に飛んでいっていました。

こうして、王子は父王から委ねられた軍勢を率いて出発し、大地を揺がせ、敵の心胆を震いあがらせました。しばらく進撃すると、アンガ王の軍勢に遭遇し、襲撃して粉砕しました。あたかもアガスティヤ*が大海を飲みつくしたように、王子は雄々しく敵軍を呑み滅ぼし、勝利の声高らかにアンガ王を生捕りにしました。王子は敵王の従者たちを殺し、敵王を侍衛長に委ねて、父の許に送り、

「わたくしは、父上、今日、他の敵どもを征服しに出発します。」

と、侍衛長の口から父に告げさせました。

こうして、カマラーカラ王子は大軍を率いて他の王者を順次に征服しながら進軍し、ヴィディシャーの都の近くにつきました。そこに宿営をして、王子はハンサーヴァリー王女の父メーガマーリン王の許に使者を派遣し、王女に求婚しました。メーガマーリン王は使者からカマラーカラ王子が攻撃に来たのでなく、王女へ求婚するために来たことを知り、安心して、親しく王子を訪れました。叮重に迎える王子に、王は挨拶した後、

「使者でことたりることがらのために、あなたは何故に態々とご自分で来られたのですか。わたしはこの結婚を望んでいますが、その訳を聴いて頂きたい。娘のハンサーヴァリーは幼いときからヴィシュヌ神*に帰依しておりますし、それにシリーシャ樹のように細い身体ですので、そういう娘の姿を見ては、

『こういう娘にふさわしい夫は、誰だろうか。』

と、心配でした。娘にふさわしい夫が見つからず、心配のあまり、わたしは不眠症にかかり、激しい熱病に罹りました。熱に苦しんだわたしは、熱を鎮めるためにヴィシュヌ神を祀り祈願しました。ある夜、うとうととまどろみましたとき、ヴィシュヌ神が夢の中でお告げになりました。

『息子よ、そなたが心配のあまり熱を出したハンサーヴァリーの手でさすってもらいなさい。そうすれば、熱は鎮まるのだ。姫の手はわたしに帰依したことによって清められている故、姫の手がさわるならば、如何なる人の如何に激しい熱といえ、鎮まることは必定じゃ。それに、姫の結婚のことについて、そなたは二度と再び心配をするでない。カマラーカラ王子が姫の夫となる

ことに定められているのだ。だが、姫は、ほんの僅かの間、苦労するであろう。』

と、ヴィシュヌ神からお告げを頂き、朝になって眼が覚めました。そこで、ハンサーヴァリーにさすってもらいますと、熱はなくなりました。ですから、あなたと姫の結婚は神のお定めになったことです。ですから、わたしは喜んでハンサーヴァリーをあなたに差上げます。」

と言って、吉日を定めて、メーガマーリン王は自分の宮殿に帰ってゆきました。

王宮に帰りますと、王は一部始終を話しました。王の言葉を聴いて、ハンサーヴァリーはカナカ・マンジャリーという腹心の侍女を呼んで、秘かに言いました。

「そなたは行って、あの王子がここに描かれて妾の心を奪ってしまった方であるか、見きわめてほしい。軍隊を率いてやって来た同じ名の王子に、父が恐怖から妾を贈物にするのかも知れない。」

と言って、姫は自分の意志でカナカ・マンジャリーを行かせました。

カナカ・マンジャリーは数珠をもち、鹿の毛皮を着て、頭髪を束ねて女苦行者に変装し、カマラーカラ王子の陣営に行き、王子の従者に案内されて這入りました。そして、愛の神カーマがこの世を征服し魅了しつくす剣を統べる神にも似た王子を見て、王子の容姿に心を奪われて、あたかも瞑想しているかのように、その瞬間、茫然とたちどまってしまいました。彼女は王子に恋い焦れて、

「このような方と結婚できないのなら、この世に生れた甲斐がない。あとはどうなろうと、な

んとか手段を講じよう。」

と考えました。そこで、カナカ・マンジャリーは王子に近づき、王子に宝珠を贈りました。王子が宝珠を受取ると、恭々しく

「この宝珠は、これを持っていられるならば、敵の利剣もにぶるという勝れたものでありまして、妾もしばしばその御利益を受けました。王子さまの御徳を慕って、この宝珠を差上げるのでございます。と申しますのは、王子さま、あなたがこの宝珠をお持ちになるのが、妾が持つよりふさわしうございますから。」

と言いました。王子がカナカ・マンジャリーに話しかけますと、彼女は物乞いの生活のみに専心するという誓いを立てていると詐って、王子の言葉をさえぎって、そこから出て行きました。

侍女のカナカ・マンジャリーは女苦行者の衣服をぬぎ捨てて、失望落胆したかのような顔をして、ハンサーヴァリー王女のそばに近づきました。そして、王女からたずねられますと、彼女は嘘を言いました。

「妾は姫に心から敬慕いたしておりますので、本当は言ってはならないことですが、王さまの秘密を申上げます。妾が女苦行者の姿をして、あの王子の陣営に参りますと、ひとりの男が自分から出て来まして、『尊尼よ、魔物を攘う儀式次第を知らないか。』と申しました。妾はその男が侍衛だと見てとって、『よく知っている。妾にとって、そんなことは、なんでもないことだ。』と答えました。すると、王女さま、妾はすぐさまカマラーカラ王子のそばに案内されました。見まして情なくなりましたのですが、

魔物に取憑かれた王子は侍臣たちに押さえつけられておりまして、薬草と魔除の宝珠が結びつけられてありました。妾は贋の魔除の祈禱をしまして、『明日、参りまして、王子さまのお悩みを取除いて差上げます。』と言って、すぐに出て参りました。そこで、予期していませんでしたこのような悲惨な様子を眼のあたりに見て、妾は悲しくなり、あなたにお話しようと帰ってきたのです。これ以上は、あなたの御判断です。」

素直な心の持主のハンサーヴァリーは、落雷のように怖ろしい、侍女のこのようなつくり話を聴きますと、一瞬茫然としましたが、こう申しました。

「運命の神が、自分の創造されたものが勝れているのにもかかわらず、それにさえ嫉妬されるとは、なんということでしょう。月に見られる汚点は、それをつくったものの失敗です。あの王子は妾が夫に選んだ方です。でも、お目にかかることはできないのです。ですから、妾は死ぬか、何処か森に引籠ったほうが、ましです。この場合、妾はどうしたらよいのか、話しておくれ。」

と、素直な王女が言いますと、悪智慧のたけたカナカ・マンジャリーが答えました。

「だれか侍女の一人に、あなたの衣裳をつけさせて、お嫁入りさせましょう。そのときには、人々が騒いでいるのですから、二人で王宮を出て、何処かに隠れましょう。」

と言うのを聴いて、王女はこの奸智にたけた侍女に

「では、あんたが妾の衣裳をつけて、あの王子にお嫁入りするのがよい。他に、あんたのように、妾につくしてくれる人が、誰かいるでしょうか。」

と言いました。このように王女から言われました邪悪なカナカ・マンジャリーは、

「あなたに信用されています妾ですから、なんとか策を講じて、そのようにいたしましょう。でも、その時になったら、妾が申上げる通りにしてください。」

と、王女を慰めた後、退出しますと、自分がたくらんでいる秘密を一番親しい友人のアショーカ・カリーに話しました。そして、カナカ・マンジャリーはアショーカ・カリーと一緒に、数日間、思い悩むハンサーヴァリーに侍づいて、よく打合せをしました。

結婚式の日が来ますと、花婿のカマラーカラ王子は象や馬や歩兵を率いて、夕方にメーガマーリン王の宮殿につきました。宮廷の人々がみな喜びざわめいている間に、カナカ・マンジャリーは口実を設けて侍女たちを遠ざけ、姫の着附をすると伴って姫を自分の部屋に連れこみ、王女の衣裳を自分が着て、王女をアショーカ・カリーに変装させました。そして、共謀者のアショーカ・カリーには自分の着物を着せ、夜になると、ハンサーヴァリーに言いました。

「お城の西門を出て、一クローシャ*ほど行きますと、洞穴のあるシャールマリ樹の古木があります。そこへ行って、その洞穴の中に匿れて、妾の行くのを待っていてください。用が終りましたら、必ずあなたのところへ参ります。」

と、性悪な侍女の言うのを聴きますと、侍女の姿をしたハンサーヴァリーは承知をして、夜に紛れて、後宮から出て行きました。城門のところには花婿の従者たちがたむろしていましたが、王女は気づかれずに城門を出て、シャールマリ樹の根元につきました。見ますと、洞穴がありましたが、中が真暗なので怖ろしくなり、中に這入らないで、その傍にある菩提樹に攀じのぼりました。誠実な心の王女は侍女の悪だくみも覚らずに、葉の中にかくれて、性悪な侍女のあらわれるのを待っていました。

話かわって、王宮では、吉祥な時刻になると、ハンサーヴァリーの衣裳をつけたカナカ・マンジャリーを、王は連れて祭壇の上に坐らせました。そして、カマラーカラ王子は贋のハンサーヴァリー姫と結婚式を挙げましたが、カナカ・マンジャリーが口許まで蔽う衣裳のニーランギーを着ていましたし、夜だったので、誰も気がつきませんでした。結婚式が終ると、王子は贋のハンサーヴァリーの手をとり、贋のカナカ・マンジャリーを連れて、同じ西門を通って、急いで自分の幕舎に出発しました。そして、近くにハンサーヴァリーがだまされて匿れている菩提樹の立っている、あのシャールマリ樹の木の傍に来ました。そこへ来たとき、象の背に乗っていた贋のハンサーヴァリーがおびえた様子でカマラーカラに抱きつきました。王子が驚いて訳をたずねますと、贋のハンサーヴァリーは偽りの涙を流して、答えました。

「いま思い出したのですけど、昨夜夢の中で、このシャールマリ樹から羅刹のような女が出てきて、妾を捉えて食べようとしました。すると、ひとりの婆羅門が走って来て、妾を救うてくれました。その方は妾を慰めた後、『娘さん、この樹木を焼きなさい。もし女が飛び出してきたら、その中に放りかえすのです。そうすれば、安心です。』と言いまして、姿を消されました。途端に、妾は眼が覚めました。今、あの樹を見て、それを思い出し、怖ろしくなったのです。」

と言いましたので、カマラーカラはすぐに樹木と女とを焼くことを自分の部下に命じました。部下の者たちが樹木を焼きましたが、ハンサーヴァリーは出てこなかったので、贋のハンサーヴァリーは王女は焼死したと思いました。贋のハンサーヴァリーは安心しました。カマラーカラ王子は真のハンサーヴァリーを得たと思って、彼女をつれて自分の幕舎に帰りました。

こうして、その翌日、カマラーカラ王子が自分の都コーシャラに急いで帰りますと、王子の功績に満足した父王は王子を王位に即かせました。父が森林に隠棲しますと、カマラーカラはハンサーヴァリーになりすましたカナカ・マンジャリーを妃として、国土を統治しました。

しかし、吟遊詩人のマノーラタ・シッディは、カナカ・マンジャリーに見つけられると、身に危険の振りかかるのを怖れて、王宮には近づきませんでした。

さて、ハンサーヴァリーはその夜を菩提樹の上で過しましたが、一部始終を聴き、また見て、自分がだまされたことを知りました。カマラーカラが立去ったとき、考えました。

「ああ、あの性悪な侍女は妾をだまして、妾の恋人を奪ってしまった。ああ、それに、妾を焼き殺して、安穏に暮そうとしたのだ。悪人を信頼したならば、どんな人でも不幸に陥らずにはいない。こうなれば、シャールマリ樹の燃えのこりの火の中に身を投じて、不運な自分を捨てよう。そうすれば、妾のために焼かれたシャールマリ樹に負債をかえすことになる。」

と考えて、菩提樹から下りて、生命を捨てようとしたときに、我にかえって考えました。

「無駄に自分をすてる必要が、どこにあろう。生きていれば、あの性悪な侍女に、妾は怨みを

かえすことができよう。父上が熱病に罹られたとき、ヴィシュヌ神が夢の中で現われられ、妾の手でさすれば熱は鎮まることを教えられ、『ハンサーヴァリーはカマラーカラという似合いの夫を得るが、しばらくの間は不幸を忍ばねばならない。』と仰せられたではないか。だから、何処かへ行って、しばらく様子を見よう。」

と決心して、ハンサーヴァリーは人の住んでいない森に行きました。

かなりの距離を歩いて疲れ、足がよろめきはじめた頃に、夜が明けましたが、王女に同情して行く道をわからせるためであるかのようでした。あたりの草木にひかる露は、天が王女を見て憐れみを垂れ、おもいやりの涙を流したかのようでありました。そして、徳ある人々の友である太陽が登って、王女に希望を与え、王女の心を和げましたが、王女の涙をぬぐうかのように、光線をさしかけました。

こうして、王女はいくらか元気を回復して、クシャ草の葉で足に怪我しましたけれども、人目を避けて、小径をゆっくりと歩いてゆきました。王女は漸くのことである森につきましたが、その森には沢山の鳥が囀っていて、

「こちらへ、いらっしゃい。」

と歌っているかのようでした。疲れはてた王女が森の中に這入りますと、木々が絡みついた蔓草の葉を揺がせて、恭々しく王女をあおぐかのようでした。恋人に恋い焦れながら、王女があたりを見ますと、森は春のさかりで、コーキラ鳥は花ざかりのマンゴーの木にとまって、楽しそうに

睦言をかわしていました。ハンサーヴァリーは心が乱れていましたが、

「マラヤ*の山から吹く風は、花粉に染められて赤く、わが身をこがす焔のようだ。花は梢から雨霰と降りそそぎ、群がり唸る蜂は妾に射かけられるカーマの矢雨のようだ。でも、しばらくここにいて、これらの花でラマー(ラクシュミー女神、幸運の女神)の夫(ヴィシュヌ神)を祀りながら、わが不幸の終るのを待つことにしよう。」

と考えて、泉で水浴をし、果物を食べて其処にとどまり、カマラーカラを恋い慕って、ヴィシュヌ神を祀ることに専心していました。

さて、話かわって、コーシャラでは、たまたまカマラーカラが流行病の四日熱に罹りました。それを見て、ハンサーヴァリーになりすました性悪なカナカ・マンジャリーは不安になり、考えました。

「ずっと今まで、アショーカ・カリーが秘密をあばきはしないだろうかという一つの恐怖があったが、また別の心配が湧いてきた。いつかハンサーヴァリーの父が大勢の人々の前で『ハンサーヴァリーの手でさすれば熱は鎮まる。』と、妾の夫にいったことがある。熱病に罹ったいま、夫はそのことを思い出すであろう。妾には熱を鎮める力はないから、嘘がばれ、わが身の破滅となろう。だから、妾は王のために熱病を鎮める呪法をしなければならないが、いつかある女苦行者から聴いた熱病の鬼を招請し、その面前で策を講じてアショーカ・カリーを殺せば、人間の肉を供物にすることができて、鬼は満足して妾の望みをかなえてくれるであろう。こうなれば、王の

熱病は癒えるし、それと同時にアショーカ・カリーはいなくなり、心配は二つとも消えてしまう。それ以外に、うまい方法はない。」

と考えて、カナカ・マンジャリーは自分の考えた策の中で人間を殺すことを除いて、反対しようのない点だけをアショーカ・カリーに語りました。アショーカ・カリーが同意して、呪法に必要な道具を持ってきましたので、口実を設けて他の侍女たちを遠ざけて、カナカ・マンジャリーはアショーカ・カリーだけをつれ、手に剣を持って、夜にまぎれて後宮から逃れでて、城門を通って、一本のリンガの祀ってあるシヴァ神の荒れはてた神殿へ行きました。そこで、剣で山羊を殺し、血をリンガに塗りつけ、その生肉を供物とし、その内臓を頸輪のように懸け、その蓮華の心臓を頭上に置き、その両眼で香をたき、その頭を供えて、シヴァ・リンガを祀りました。それから、像の前の祭壇に赤栴檀などを塗り、黄色の塗料で八瓣の蓮華を描きました。そして、その果皮に、マンゴーをつぶして、三本の足と三つの口をもち、灰を握った拳をふりあげた熱病の鬼を描き、蓮華の葉の上に熱病の鬼の眷族を、定められている通りに描いて、自分の知っている呪文を唱えて、彼等を招請しました。

それから、嚮に申し上げましたように、人間の肉と血とを供物にしようと考えて、カナカ・マンジャリーはアショーカ・カリーに

「ねえ、正しく地面に平伏して神さまを拝みなさいよ。そうすれば、必ずあんたによいことがあるでしょう。」

と言いました。アショーカ・カリーが

「そうしましょう。」

と、大地に平伏しますと、悪だくみをしていたカナカ・マンジャリーは剣を振りおろしました。たまたま剣がそれて、肩さきに傷を負わせただけでしたので、アショーカ・カリーは驚きあわて立上ると逃げだし、

「助けてください。」

と、なん度も叫びました。その叱声を近くにいた警官たちが聞き、走ってきて、追いかけているカナカ・マンジャリーの姿を見ました。警官たちは剣を抜いて追いかけている怖ろしい形相のカナカ・マンジャリーを見て羅刹と思い、刀で斬りつけて瀕死の傷を負わせました。そして、アショーカ・カリーの口から事の次第を聴きますと、都城長官を先頭にして、王宮に二人の女を連行しました。カマラーカラ王は警官たちから報告を聴き、驚いて、性悪な妻とその侍女を自分の前に連れてこさせました。二人が王の面前に引きすえられますと、カナカ・マンジャリーは恐怖と重傷のために、その場で息が絶えました。

そこで、心を傷めた王は負傷したアショーカ・カリーに

「これは一体どうしたことなのだ。怖がらずに、話しなさい。」

と訊ねました。そこで、アショーカ・カリーはカナカ・マンジャリーが大胆にも遂行した奸計を最初から余すことなく話しました。一部始終を知りましたカマラーカラ王は、そのとき激しく苦

しみ悩み、このように運命を呪いました。

「ああ、わたしはこの贋のハンサーヴァリーにたぶらかされたのだ。それに、自分の手でハンサーヴァリーを焼き殺してしまったとは、なんという馬鹿だ。ともかく、この性悪な女は王妃となったけれども、自分の悪行の報いを受けて、このような刑罰を受けたのだ。それにしても、子どもをだますように外見でわたしをだまし、宝石を奪い去って、その代りにガラスを渡した運命の神は、わたしに対して何故にそのように残酷なのか。そのうえ、ハンサーヴァリーの手でさすれば熱病は鎮まると、ヴィシュヌ神が彼女の父に語っていたのに、それを確めることも、わたしは忘れていたのだ。」

と、なげき悲しみましたが、カマラーカラ王は

「ハンサーヴァリーは夫を得るが、ほんの僅かの間だけ苦労するであろう。」

と、ヴィシュヌ神が父のメーガマーリン王に告げたことを憶い出して考えました。

「そのことを父王がわたしに語ってくれた。神の宣示したことに偽りはない。だから、ハンサーヴァリーは何処かへ、なんとかして行って生きていることであろう。運命の深遠な帰趣はもちろんのことだが、女の心の神秘な動きは誰にも知られない。吟遊詩人のマノーラタ・シッディだけが、今の場合、頼みの綱だ。」

と考えて、この勝れた詩人を呼び寄せました。そして、

「久しく現われなかったのは、どういう訳だ。悪者にだまされた者たちにとって、希望の成就

は何処にあるのだ。」

と言いました。この言葉を聴いて、吟遊詩人は言いました。

「わたくしのお答えは、アショーカ・カリーは秘密をばらしはしないかという恐怖から殺されたということです。だが、ハンサーヴァリーのことで、そのように落胆なさることはありません。姫はほんの僅かの間だけ苦労なさると、ヴィシュヌ神は宣示されました。ですから、いつも怠ることなく神を祀っていられる姫を、神は守護されています。なぜならば、徳が支配しているからです。今の場合、なぜそのようにお考えにならないのですか。ですから、王さま、わたくしは姫の消息を知るために出かけましょう。」

と、吟遊詩人が申しますと、王が言いました。

「姫を探すために、わたしもそなたと一緒に行こう。そうしないと、わたしの心は一瞬も安まらないのだ。」

と言って、決心をした王はその翌日プラジュナードヤという大臣の手に王国を委ねました。大臣は思いとどまらせようとしましたが、王を説得することができず、王はマノーラタ・シッディと人知れず都城を脱け出ました。

そして、恋の命令は重く、王はわが身体の受難もかえりみず、諸方の聖地、仙人の隠棲処、森などを歩き廻りました。運命のしからしむるところ、マノーラタ・シッディをつれた王はハンサーヴァリーが苦行をして住んでいる森に漸くにしてつきました。そして、赤いアショーカ樹の下

に、輝く下弦の月輪のように、瘦せて青ざめてはいましたが輝くばかりに美しいハンサーヴァリー姫の姿を見つけました。

「あそこに、無言で動かずに瞑想している女性は誰なのか。女神だろうか。あの容姿は人間とは思えぬ。」

と、カマラーカラ王が言いますと、吟遊詩人はよく確かめて見て、言いました。

「王さま、あなたは本当に幸運な方です。ハンサーヴァリーに会えました。あそこにいるのが姫です。」

その声を聴いて、ハンサーヴァリーは二人を見て、嘗て自分の部屋に来て肖像画を描いた吟遊詩人であることを知り、悲しみも新たに泣き叫びました。

「ああ、父上、妾は死にました。ああ、あなた、カマラーカラさま。ああ、マノーラタ・シッディさま。ああ、何という酷い運命でしょう。」

と悲しみながら、気絶して地上に倒れてしまいました。カマラーカラ王はその声を聴き、姫の姿を見て、悲しみにうちひしがれて、地上に倒れました。

マノーラタ・シッディが二人を介抱しましたので、二人は正気づき、互いに確かめ合って安心しました。二人は別離の大海を渡って、漸くにして会えたことを喜こびあい、お互いに自分の経てきたことを一部始終語りあいました。

こうして、カマラーカラ王はハンサーヴァリー姫をつれ、吟遊詩人をお伴に、自分の都城コー

シャラに帰りました。そして、その報らせを聴いて喜んだ父王メーガマーリンをコーシャラに招いて、病気を癒すというハンサヴァリー姫の手を、聖典の掟に従って、把りました。そのとき、父系に於いても母系に於いても清浄なハンサーヴァリー姫と結ばれて、カマラーカラ王は殊のほか清らかに光り輝きました。目的を果した王は、勇猛心によって果報をえた姫とともに幸福に、マノーラタ・シッディとも別れることなく、国土を統治しました。

このように、苦境に際しても勇猛心を捨てないときは、その希望するところがすべて得られるのだ。だから、あんたは自殺するのではない。生きておれば、主君と再会できるというものだ。』

その老人の旅行者はこのように物語をしまして、わたくしの自殺を思いとどまらせますと、気のむくままに立去っていきました。」

と、ビーマ・パラークラマは夜中にチャンダ・ケートゥの家でムリガーンカダッタ王子に話しましたのち、さらに言葉を続けて、

「さて、忠告されましたわたくしは、あなたに会うために、森を出て、あなたが行こうとしておられましたウッジャイニーの都へ参りました。あなたに会うことはできず、ひとりの女の家に宿らせてもらおうとして這入り、食物の代金を女に渡しました。寝床を与えられたわたくしは疲れていましたので暫くの間ねましたが、眼が覚めましたので、好奇心を起して女のすることを黙って見ていました。すると、女は一握りの大麦を持ち出し、下唇を動かして呪文を唱えながら、

家の中に一面に蒔きました。すると、大麦はすぐに芽ばえ、穂を出し、熟しました。女はそれを刈りとり、炒り、粉にして、団子をつくりました。そして、その団子を銅製の皿に盛り、水にひたしたのち、家をもと通りにして、急いで水浴に出かけました。

そこで、わたくしは女が魔女であると考え、素早く起上って、皿に載せてある団子を別の櫃にうつし、まざり合わないように注意して、その櫃から同数の団子を取出して、皿の中に入れておきました。

こうして、わたくしが再び寝床に這入っていますと、女が帰ってきて、わたくしを起して、皿に載せてある団子をわたくしの食事に差出しました。そして、わたくしが取換ったことを知らずに、呪文のかかった団子を櫃から取出して、自分も食べました。その団子を食べた途端に女は雌山羊となりましたので、わたくしはそれを牽いて行って肉屋に売りとばしまして、讐をかえしました。

すると、肉屋の女房がやって来まして、怒って、わたくしに申しました。

『お前さんはわたしの友だちをだましたね。このお返しをきっとお前さんにするからね。』

と、おどされまして、わたくしはひそかに都城を出て、ヌヤグローダ樹の根元に疲れて睡りました。わたくしがこうした状態でいましたとき、邪悪な魔女である肉屋の女房がやって来まして、わたくしの頸に紐を結びつけました。その性悪な女が立去った途端に、わたくしは眼が覚めましたが、見ると、わたくしは孔雀になっていました。それでも、記憶は依然として持っていました。

こうして、わたくしは悄然といく日か、あちらこちらを歩きまわっていましたが、あるとき鳥屋に生擒りにされました。鳥屋はわたくしを持ち帰って、ビッラ王*の首席侍衛官のチャンダ・ケートゥに賄賂として贈りました。侍衛官はすぐにわたくしを自分の妻に与えましたので、わたくしはペットにされて、この部屋で飼われていました。いま、ここに運命の神に導かれて、あなたが来られ、頸に結びつけられていた紐を解いてくださったので、王子さま、わたくしは元の人間の姿にかえりました。

ですから、わたくしたちは早くここを立去りましょう。あの悪党の侍衛官は秘密のばれることを怖れて、夜間行動の仲間をいつも殺すのです。あなたはあの男の夜の行動の目撃者ですから、ここへ連れてこられたのです。あの魔女がつくったこの紐をあなたの頸に巻きつけ、孔雀になって、この窓から外へ出てください。そこで、わたくしが手を伸ばして、あなたの頸から紐を解きましょう。その紐を自分の頸に巻きつけ、わたくしも孔雀になって、急いで窓から出ます。あなたがわたくしの頸の紐を解いてくださったならば、ふたりとも元の姿になれます。戸は外側から錠がかけられていますから、このままでは出ることはできません。」

と、智慧のあるビーマ・パラークラマが言いましたので、ムリガーンカダッタは同意して、そこから逃げ出しました。そして、二人の仲間がいる自分の宿舎に帰り、みんなはお互いに自分の経験を話し合って、愉快にその夜を過しました。

朝になると、村の支配者であるビッラ王マーヤーバトゥがやって来まして、夜よく睡れたかど

うかをたずねのたち、ムリガーンカダッタを喜こばせようとして、

「こちらへいらっしゃって、博奕をなさいませんか。」

と言いました。すると、ビッラ王が侍衛官と一緒にやって来たのを見まして、ムリガーンカダッタ王子の仲間のシュルタ・ディが言いました。

「どうして、博奕なんか、なさるのですか。『侍衛官の孔雀を見る』と昨日仰言ったのを、お忘れになりましたか。」

と聴きますと、シャバラ王は思い出して好奇心を起し、侍衛官に命令して孔雀をとりに帰らせました。

「夜の秘密の目撃者の、あの盗人を鳥小屋の中に放りこんでおいたが、うっかりして忘れてしまい、どうして殺さなかったのか。急いで家に帰って、仕事を二つしなければならん。」

と、不図思い出し、侍衛官は急いで自分の家に帰りました。そして、鳥小屋に這入って見ましたが、盗人も孔雀も見えませんでした。侍衛官チャンダ・ケートゥは失望すると同時に怖ろしくなり、王のところに帰ってきまして、

「夜の間に、盗人がわたくしの孔雀を盗んでしまいました。」

と言いました。すると、シュルタ・ディが

「君の孔雀を盗んだ大盗人は有名な人なんだね。」

と、笑いながら言いました。ムリガーンカダッタたちが互いに顔を見合わして笑っているのを見

まして、マーヤーバトゥは
「一体、どうしたのですか。」
と、繰返して熱心にたずねました。そこで、ムリガーンカダッタは、夜中に侍衛官と出会ったこと、侍衛官が王妃の情夫で、王妃の宮殿に忍んで、剣を引抜いて争うたこと、侍衛官の家に行ったこと、ビーマ・パラークラマを孔雀の姿から解放したこと、そしてそこから逃げ出したことなど、侍衛官に関係のある一切の経験をのこらずシャバラ王に話しました。
シャバラ王マーヤーバトゥは、ムリガーンカダッタの話を聴き、また侍女の手が剣で負傷しているのを見ましたし、紐を頸にかけた途端にビーマ・パラークラマが再び孔雀になるのを見まして、後宮をあらした罪で侍衛官チャンダ・ケートゥを斬罪の刑に処しました。しかし、妃のマンジュマティーはムリガーンカダッタのとりなしで生命を赦しましたが、身辺から遠ざけて、遠方に放逐しました。

四

ムリガーンカダッタ王子はシャバラ王に歓待されて、シャシャーンカヴァティーに恋いこがれながらも、仲間のものたちがやって来て再会できるのを待って、いく日かをシャバラ王の村で過しました。

ヴィマラ・ブッディたちと一緒に、ムリガーンカダッタがシャバラ王マーヤーバトゥの館に逗留していますと、ある日シャバラ王の将軍が非常に昂奮して王に近づいてきて、ムリガーンカダッタの前で報告をしました。
「陛下の命令により、ドゥルガー女神に犠牲として供える人間を探しておりましたところ、ひとりの偉丈夫を見つけましたが、その男のために味方の勇士が五百人も殺されました。甚だしい傷のために力の尽きはてたところを漸く取りおさえ、連行致しました。」
という言葉を聴きますと、シャバラ王が将軍に
「その男を速かにここに連れてきて、われわれに見せよ。」
と言いました。その男が連行されましたので、そこにいた皆の衆が見ますと、傷から流れ出た血にまみれ、戦塵でよごれ、よろめきながら這入ってくる有様は、顳顬（こめかみ）から流れ出る液が頬に描かれた赤鉛とまざってよごれた狂象が鎖につながれているかのようでありました。
ムリガーンカダッタはその偉丈夫が自分の侍臣のグナーカラであることを知って、走り寄って、涙を流しながら頸に抱きつきました。シャバラ王は仲間の者たちからグナーカラと聴き、主人の足に縋りついている彼をなぐさめ、館に連れ帰って水浴をさせ、傷に繃帯をし、医者の指示に従って健康回復によい飲食物を与えました。
グナーカラが元気を回復しますと、ムリガーンカダッタはグナーカラに
「グナーカラよ、おまえはどんな冒険を経験したのか、話せ。」

と訊ねました。そこで、グナーカラは皆の者たちが聴いているところで語りました。

「王子さま、わたくしの経験しました一部始終をみなさんにお話しましょう。

竜の呪詛によって、わたくしはあなたがたから別れますと、正気を失ってなにも知らずに森の奥深くさまよい歩きました。漸く正気を取戻して、

『ああ、これはまたなんと言う気まぐれな運命の悪戯だろう。宮殿におられてさえ、いろいろと苦労をなさるムリガーンカダッタは、この燃えるような熱砂の森の中で、どうしていられるだろうか。また、仲間の者たちは、どうしているだろうか。』

と、心の中で繰返して考えながらさまようていますと、たまたまドゥルガー女神の祀堂に来ました。祀堂の中に這入りますと、夜となく昼となく数多くの種々な生物が供えられていまして、死の神の神殿に似ていました。わたくしは女神を拝みましたが、手に持った剣を喉に突きさして自分を犠牲にした男の屍を見ました。それを見ますと、あなたと別れたことを悲しんでいましたわたくしは、自分を犠牲にして女神を宥慰しようと決心しました。わたくしが走り寄って剣をひき抜きましたとき、わたくしの自殺を思いとどまらせようとするかのように、遠くから頭を振りながら、ひとりの女苦行者が近づいてきまして、親切にも事情をたずねて、わたくしに自殺を思いとどまらせて、このように申しました。

『そんなことをするではない。死者との再会でさえ、この世にはあることだし、まして生きている人との再会はなおさらのことだ。伜よ、こういうお話を聴きなさい。

〔ヴィニータ・マティ*王の物語〕

地上に、アヒッチャトラーという名の有名な都城がある。そこに、むかし、ウダヤ・トゥンガという有力な王がいた。この王の侍衛官にカマラ・マティという偉大な人物がいたが、この人にヴィニータ・マティという比類のない息子がいた。この人があるとき真白な宮殿の露台に立っていたとき、夕方になって、恋の神の如意樹から芽ばえた若芽でつくられた東の方角の耳環のように光り輝く、月が登ってくるのを見た。ヴィニータ・マティは、あたりが月の光に次第に照らされてゆくのを見て、楽しくなって考えた。

「ああ、街の道という道は月に照らされて、白く輝き、漆喰を塗ったようだ。ひとりで道を歩きまわっては、いけないのだろうか。」

と考えると直ぐに、弓を持って出かけて歩きまわった。一クローシャばかり行くと、突然に泣き声がきこえてきた。その声をたよりに行くと、樹木の根元にもたれて、ひとりの美しい乙女が泣いていた。そこで、ヴィニータ・マティが

「娘さん、あなたはどなたですか。どうして、月のように麗わしい顔に涙を流して、汚点のついた月のようにするのですか。」

とたずねた。すると、その乙女は語った。

「勇士のお方、妾は竜王ガンダ・マーリンの娘で、ヴィジャヤヴァティーと申します。妾の父はあるとき戦争から逃げ出して、ヴァースキ*から『この悪者め、汝は戦争に負けて敵の奴隷となれ。』と、呪詛されました。この呪詛のために、やさしい父は敵のカーラ・ジフヴァ夜叉に負け、いつも花を運ぶ奴隷となりました。そのことを悲しんで、妾はガウリー女神を苦行によって宥慰しました。すると、女神は姿を現わされて、このようにお告げになりました。

「愛する娘よ、よくお聴き。マーナサ湖に千瓣をほころばせた大きくて神々しい水晶の蓮華がある。その蓮華に太陽の光線があたると、光輝を放って、あたかも数多の頭飾りの宝玉が黄色に輝くシェーシャ*の頭さながらである。あるとき、ヴァイシュラヴァナ*がそれを見て欲しくなり、それを手にいれるために水浴をしてヴィシュヌ神を祀りはじめた。そのとき、ヴァイシュラヴァナの従者の夜叉たちは、チャクラヴァーカ鳥や白鳥などの水鳥となって、マーナサ湖で遊び戯れていた。たまたま、そなたの敵のカーラ・ジフヴァの長兄ヴィデュジュ・ジフヴァが愛人と一緒にチャクラヴァーカ鳥の姿をして遊んでいたが、羽搏きをした拍子に、クベーラ神の手のさきにあった祭祀用の皿をはたき落してしまった。クベーラ神は怒って呪詛し、ヴィデュジュ・ジフヴァとその妻をマーナサ湖にすむチャクラヴァーカ鳥にしてしまわれた。カーラ・ジフヴァは、このように姿を変えられた兄が愛人と別れて悲しんでいるのを見て、兄に対する愛情から毎夜兄の愛人の姿となって兄を慰め、昼間は奴隷となったそなたの父ガンダ・マーリンを伴うて、そこに居る。されば、娘よ、そなたはアヒッチャトラーの都に住む護衛官の息子で偉大な勇士であり勇

猛心に富むヴィニータ・マティを、そこへ派遣せよ。そして、この馬と剣を受取るがよい。かの勇士はこれらのものによって夜叉を征服し、そなたの父を奴隷の境遇より解放するであろう。この勝れた剣の持主となる男は、すべての敵を征服して、地上に於いて王者となるであろう。』

と、このように仰せられて、女神は妾に馬と剣を授けられて、姿を消されました。そこで、妾はあなたにお頼みするために、今日、漸くのことでここに参ったのです。女神の恩寵を受けられたあなたが、夜になってお出かけになりましたのを見て、策略を用いて泣声をお耳に入れ、ここへお誘いしたのです。ですから、妾の望みを適えてやってくださいませ。」

と、ヴィジャヤヴァティーに頼まれたヴィニータ・マティは

「よろしい。」

と、承知した。

すると、竜王の娘はすぐに立去って、光芒を放って四方の暗黒を攘う月輪にも似た駿足の白馬と、勇士を探しもとめる幸福の女神のまなざしにも似て星空の美しさをもつ利剣とを持ってきて、この二つをヴィニータ・マティに渡した。

ヴィニータ・マティは剣をたずさえ、ヴィジャヤヴァティーと一緒に馬に乗って出発したが、駿馬の威力によって忽ちにマーナサ湖に到着した。蓮の葉は風にそよぎ、チャクラヴァーカ鳥の訴えるような鳴声は、カーラ・ジフヴァに同情して、ヴィニータ・マティたちに

「来るな、来るな。」

と、近づくのを思いとどまらせようとしているかのようであった。

ヴィジャヤヴァティーの父ガンダ・マーリンが夜叉どもに拘禁されているのを見て、ヴィニータ・マティは彼を解放するためにこの残忍な輩を剣で斬りまくり、追払った。それを見たカーラ・ジフヴァはチャクラヴァーカ鳥の姿を捨てて、雨季の雨雲のように咆えたけりながら、池の真中から昇ってきた。戦闘が始まると、カーラ・ジフヴァが空中に舞い上ったので、ヴィニータ・マティも馬で後を追い、カーラ・ジフヴァの頭髪を摑んだ。ヴィニータ・マティがまさにカーラ・ジフヴァの頭を剣で斬り落そうとしたとき、夜叉は憐れな声でつぶやくように宥恕を懇願した。赦されたカーラ・ジフヴァはあらゆる災害を攘う威力のある自分の指環を恭々しくヴィニータ・マティに贈り、竜王ガンダ・マーリンを奴隷の境遇から解放した。ガンダ・マーリンは非常に喜び、自分の娘ヴィジャヤヴァティーをヴィニータ・マティに与えて、家に帰った。そして、ヴィニータ・マティも、剣と指環と馬をたずさえ、乙女をつれて、夜明けに自分の家に帰った。父のカマラ・マティは息子に訳をたずねて満足したが、王もまたその話を聴いて喜んだ。こうして、ヴィニータ・マティは竜王の娘ヴィジャヤヴァティーと結婚した。

ある日、父のカマラ・マティが、四つの宝と種々の徳を具えたヴィニータ・マティに、ひそかに言った。

「伜よ、われわれのウダヤ・トゥンガ王にウダヤヴァティーという王女があって、あらゆる学問に通暁している。王は『婆羅門であれ刹帝利であれ、論争に於いて姫を打負かした者に、姫を

授ける。』と、賭をされた。あたかも世の嘆賞する姫の美しさが美しさの点で天上の美女たちをさえ面目なからしめたように、他の論客たちは姫と論争して、のこらず姫に打ち負かされてしまった。そなたはわれわれ刹帝利の中で最高の論客であるのに、何故に沈黙をしているのだ。姫と論争して、姫を打負かし、そなたの妻とするのだ。」

と、父から言われたヴィニータ・マティは

「父上、わたくしのごとき者が、どうしてかよわい女性と論争ができましょう。でも、父上の御命令に従いましょう。」

と言った。この若者がこのように言ったので、彼の父は王の許に行き、

「陛下、明日、ヴィニータ・マティが王女さまと論争をいたしたいと存じます。」

と、王に告げた。王がこの申出を承知したので、カマラ・マティは家に帰って、息子のヴィニータ・マティにその旨を告げた。

こうして、その翌日、白鳥が蓮池に舞いおりたかのように、王が学者の集まる会堂に出御すると、ヴィニータ・マティは太陽のようにあたりを光り輝かせながら、蓮華の花のまわりを飛ぶ蜂のように高徳碩学が注視する中を、座についた。間もなく、王女ウダヤヴァティーが静かに這入ってきたが、さながら美徳の弦をひきしぼったカーマ(恋愛の神)の弓のようであった。王女は美わしい音をたてる華麗な装飾品をつけていたが、その触れ合う音は最初の反論をほのめかしているかのようであった。王女が翠玉の座についたとき、皓々と明月が晴れわたった中天に照り輝くさまに

似ていた。そして、王女は皓歯を輝かせながら最初の反論をしたが、あたかも宝玉のように優雅な言葉の鎖を美しい歯並の糸につなぐかのようであった。そこで、ヴィニータ・マティは王女の反論の前提が明確に不合理なことを論証し、逐一反駁して、美女を沈黙させてしまった。こうして、満堂の碩学がヴィニータ・マティを賞讃すると、王女は議論には負けたけれども、勝れた夫を得たことによって勝ったと考えた。そして、ウダヤ・トゥンガ王は大いに喜こび、論争に勝った褒美として王女をヴィニータ・マティに授け与えた。さらに、ヴィニータ・マティは王から宝玉を与えられ、竜王の娘と王女を妻とした。

あるとき、ヴィニータ・マティが賭博に耽り、他の博奕うちたちに散々に負け、気をくさらせていたとき、ひとりの婆羅門がやって来て、彼に執拗に食物を乞うた。うるさくなった彼は下男に耳うちして、砂をいれた皿を布ぎれに包んで婆羅門に渡した。この正直な婆羅門はそれを受取るや否や、その重さから黄金が這入っていると想像して喜こび、片隅に行って、それを開いた。砂が一杯つまっているのを見て、それを地上に捨てて、

「あの男は、わたしをだました。」

と、落胆して自分の家に帰った。ヴィニータ・マティはそのことに心もかけず、賭博をやめて家に帰り、愛妻たちと楽しく暮していた。

時が経ち、ウダヤ・トゥンガ王は老齢となり、身体が不調となり、王国統治の重責に耐えられなくなった。王子のない王は娘婿のヴィニータ・マティを即位させ、みずからは捨身のためにガ

ンジス河に赴いた。ヴィニータ・マティは王位に即くと、早速に、駿馬と利剣の威力により、十方を征服した。そして、災害を攘う指環の威力により、彼の王国はラグ王*の王国のように疫病もなく、饑饉もなかった。

あるとき、ラトナ・チャンドラマティという仏僧が王のところに来たが、この比丘（びく）*は論客中の獅子とも象ともいうべき人であった。有徳の人を寵愛する王はこの比丘を叮重にもてなしたが、この比丘は王に論議を挑み、次のような賭を提唱した。

『大王よ、もしあなたが負けたときは、仏陀の教を信奉されよ。わたくしが負けたときは、わたくしは僧衣をぬぎ捨てて、婆羅門たちの教を聴きましょう。』

という言葉を聴いて、王は承知した。そして、ヴィニータ・マティ王はこの比丘と七日間にわたって論争したが、八日目に至って、比丘は王を論破した。こうして、王は比丘に教えられて、信仰を持つに至り、有情（うじょう）*に恩恵を与え福徳ゆたかなブッダ*の教を信奉した。そして、仏教に専心帰依した王は、仏僧たちや、婆羅門たちや、すべての人々のために、僧院*や宿房などを造った。

仏教の修行によって心の平静をえた王は、有情に奉仕する菩薩行*のための修行を、比丘に教えてほしいと懇請した。そこで、比丘は王に

「王よ、菩薩たらんとする偉大な修行は、罪のない人々が行うべきものであって、しからざる者の行うべきことではない。あなたには、われわれのような者が認めうるほどの大罪はない。しかし、このような方法で微罪をさがして、それを消滅されるがよい。」

と言って、王に夢を見るための呪文を教えた。王はその呪文によって夢を見て、その翌朝、比丘に告げた。

「尊師よ、昨夜、夢の中で、わたしは他の世界に行き、空腹に苦んで食物を乞いましたところ、刑棒を持った男たちが、『王よ、嘗てひとりの婆羅門が空腹に堪えかねて、そなたに食物を乞うたとき、お前が与えた多量の熱砂を食え。十億金を贈るならば、お前はその罪より免れるであろう。』と言いました。このように、刑棒を持った人々に言われて、夜明けに眼が覚めました。」

と、王は語って、比丘の指示によって、十億金を償いとして寄捨し、再び夢を見るために呪文を唱えた。王は再び夢を見て、朝になって起きると、

「昨夜も、他界で腹を減らしているわたしに、刑棒を持った人々が砂を食べさせようとしました。わたしが『寄捨をしましたのに、どうして砂を食べねばならないのですか。』とたずねますと、あの人たちは『お前の寄捨は無効だ。お前の寄捨した金の中に、婆羅門のものが一つあったぞ。』と言うのです。その言葉を聴くと、眼が覚めました。」

と、前夜の夢を話して、王は再び十億金を乞食たちに贈った。

こうして、その夜もまた夢の呪文を唱え、再び夢を見て、翌朝起きると、前夜の夢を話した。

「昨夜も、他界で刑棒を持った人々がわたしに砂を食べさせようとしました。わたしが訳をたずねますと、あの人たちは『王よ、お前の寄捨は無効なのだ。その訳は、お前の国の森林で、ひとりの婆羅門が山賊に襲われて殺された。お前は民衆の保護を怠ったことにより、お前の寄捨は無効である。されば、もう一度、今までの二倍の寄捨をせよ。』と言いました。その言葉を聴きました途端に、わたしは眼が覚めました。」

と、王は先生の比丘に夢を語って、二倍の額の寄捨をしました。

そこで、王は比丘に言った。

「先生、この世に於いて、わたしのような者がこのように違反しやすい法を守ることは、どうしても出来ないのでしょうか。」

と、王の言うのを聴いて、比丘は言った。

「王よ、法を守るにあたって、賢明な人は意志を挫くということはありません。神は、自己の法を逸脱することなく、それを固守する意志堅固な人々を保護し、その希望を達成せしめるものであります。あなたは世に尊き菩薩が前生に猪として生れた本生物語*を、王よ、お聴きになったことはありませんか。お聴きでないなら、お話し申しましょう。お聴きください。」

〔猪本生物語〕

むかし、ヴィンディヤ山中にある洞穴に、仏陀の分身から生れた賢明な猪が、友だちの猿と一緒に棲んでいました。この猪は一切の生類に恩恵を与え、常に友だちと親しく交際し、客人を厚く歓待し、自分にふさわしい仕事に従事していました。

あるとき、暴風雨が起り、五日にわたって続きました。絶え間なく降りつづく雨のために、生類の活動がとまるほど激しい暴風雨でありました。五日目の夜に、猪が猿と一緒にねていますと、洞穴の戸口に牝と仔をつれた獅子がやってきました。獅子が牝に

「このように長雨が続くと、われわれは食物が得られず、飢餓のために必ず死んでしまうであろう。」

と言いますと、牝獅子がそれを聴いて、

「このままでは、わたくしどもはみな死んでしまいます。ですから、あなたがたで、わたしを食べて生きのびてください。あなたはわたしの旦那さまですし、この仔はわたしの生命なのですから。わたしのような牝は、ほかにいますし、わたしを食べて、あなたがたは幸福にくらしてください。」

と、このように互いに話し合っていましたとき、たまたま崇高な心の持主の猪が眼を覚まし、この言葉を聞きました。猪は大いに喜こび、考えました。

「このような暴風雨の夜に、客人を迎えるとは、わたしにとって、なんという素晴らしい福徳であろうか。なんの障害もない。ともかく、瞬時に滅する自分の身体を提供して、この客人たちを満腹させてやろう。」

と考えて、起き上って出て行き、猪は慈愛溢れる声で獅子に

「君、失望してはならない。わたしは、君と君の奥さんと子どもさんに食べてもらおうと思って、ここに来たんだ。だから、わたしを食べてもらいたい。」

と言いますと、喜こんだ獅子が妻に言いました。

「まず、真先きに、この仔に食べさせよう。それから、わたしが食べよう。そのあとで、お前が食べなさい。」

牝獅子が承知しましたので、まず仔獅子が猪の肉を食べ、ついで牡獅子が食べはじめました。すると、偉大な心の持主の猪が、自分を食べている獅子に、

「血が地中にしみこまないうちに、早く血を飲みなさい。わたしの肉で満腹したら、君の愛する妻に残りを食べさせなさい。」

と話しているうちに、獅子は猪の肉を食べてしまい、骨だけがのこりました。

猪は肉を食べられてしまいましたけれど、忍耐の極限を観察するかのように、生命は絶えませんでした。ところが、牝獅子はその間に飢死してしまいました。獅子は仔をつれて、何処かへ行ってしまいました。

夜が明けました。このとき眼を覚ました友人の猿は洞穴から出てきて、猪がこのような有様になっているのを見て、驚きあわてて、たずねました。

「誰がこんなにしたのだ。君、出来るなら、話しておくれ。」

と、猿が言うのを聴いて、勇気のある猪は一部始終を話しました。そこで、猿は涙を流しながら、足許に平伏して言いました。

「獣性からみずから解放されたあなたは、さだめし神の分身でございましょう。もし、おのぞみがあるならば、おっしゃってください。おのぞみが適うように、いたします。」
と、猿が言いますと、猪が猿に言いました。
「君、わたしののぞみは運命の神でさえ成就しがたいことなのだ。わたしの見ているところで飢死した、この不幸な牝獅子が蘇生して、元通りの身体になったわたしを食べて、満腹してもらいたいのだ。」
と、猪が言いますと、正法の神が姿を現わされ、手で触って、猪を神々しい姿の聖仙に変えました。そして、
「神通力により獅子などの姿をしたのは、まさに余である。他人に恩恵を与えようと専念する汝を、余は征服したいと念じたのだ。汝は欠くることなき善性でもって、他のために自己の生命を捧げた。汝は正法の神である余を打負かして、今や聖仙の位を得たのである。」
と語りました。この言葉を聴きますと、聖仙は自分の前に立つ正法の神を見て、
「尊き神よ、わたくしは聖仙の位を得たとしても、この友だちの猿が獣性を捨てることができない今、少しも嬉しくはありません。」
と言いました。この言葉を聴きました正法の神は猿を仙人としました。まこと、偉大な人との交遊は偉大な果報を生むものであります。正法の神は姿を消し、死んだ牝獅子も見えなくなりました。

このように、王よ、正義の力によって正法を不断に努力する人々は、神々の援助をえて、所期の目的を成就するものであります。」
と、比丘の言葉を聴き、ヴィニータ・マティ王は再び布施の勇者となり、夜になると夢の呪文を唱えた。
王はその夜夢を見て、翌朝かの比丘に語った。
「夢の中で、だれか神々しい聖仙がわたしに『倅よ、そなたは罪障を免れた。今こそ、菩薩行を行え。』と言われたのを、覚えています。その言葉を聴くと、わたしは眼が覚め、今こそ解脱をえました。」
と、王は先生の比丘に、このように語り、比丘の教えに従って、吉日をえらんで偉大な誓願をした。そして、懇願する人々に恩寵を雨霰とそそいで飽きることがなかった。しかし、王の財宝は無尽であることが知られた。繁栄は正法の根をもつものであるからである。
さて、ある日、庇護をもとめて、ひとりの婆羅門がヴィニータ・マティ王の許に来り、
「陛下、わたくしはパータリプトラ*の都城に住む婆羅門であります。わたくしの家の祭火の部屋を羅刹が占領し、わたくしの倅を捉えてしまい、それを攘う方法はいずれも役に立ちませんでした。そこで、懇願する者には如何なるのぞみをも適えてくださるというあなたさまに、お願いがあって参りました。一切の障害を攘うという指環を、わたくしにお下げ渡しくださって、わたくしの幸福のために役立たせて頂きとう存じます。」

と懇願すると、王は夜叉のカーラ・ジフヴァから獲た指環を、ためらうことなく婆羅門に与えた。指環を受取って、婆羅門が立去ると、王の菩薩行を行おうとする誓の名声が諸方に拡がった。

その後、ある日、インドゥ・カラシャという王子が北国から来て、王の客人となった。王は、この王子の家系のすぐれていることを知って、叮重にもてなし、王子の望みをたずねた。剛毅な心の持主である王から望みをきかれた王子は、

「ともあれ、あなたは懇願する人々にとって此の世に於ける宝珠との盛名の高い方です。あなたの生命を懇願する者でも、失望して帰ることはないということです。わたくしはカナカ・カラシャという兄に襲われて、父祖伝来の王国から追放され、あなたにお願いがあって参りました。勇気ある方よ、あなたの利剣と駿馬とを、わたくしに下さい。その威力によって、わたくしは王位の簒奪者を征服して、王国を回復したいと存じます。」

と言うと、その言葉を聴いたヴィニータ・マティ王は、王国を守護する宝珠ではあったが、駿馬と利剣とを王子に与えた。大臣たちは顔をふせて溜息をついていたが、剛毅な心の持主である王は逡巡することはなかった。利剣と駿馬を獲た王子は、それらの威力により、故国に帰って兄を征伐し、王国を恢復した。

王国から追放された兄のカナカ・カラシャは、ヴィニータ・マティ王の都城に来たが、苦労に耐えかねて火中に身を投じようとした。ヴィニータ・マティ王はそのことを聴き、大臣たちに

「あの善人は余の過失により、このような状態になった。されば、この王国をあの男に譲りわ

たして、余は今こそあの男への負債をかえすことにしよう。他人の利益に役立たぬこの王国は、余にとって、なんの役に立とうか。余に子はない故に、あの男を息子とし、王位を継がせよう。」

と語って、王はカナカ・カラシャを呼び、大臣たちが反対するにも拘わらず、自分の王国を譲った。

ヴィニータ・マティ王は王国を譲ると、直ちに躊躇することなく、二人の妃をつれて都城を出た。その姿を見て、都の人々は

「ああ、ああ、甘露の光輝をもち世間に繁栄をもたらす満月は、突如として下りてきた雲に蔽われて姿を消してしまった。臣下の者にとって如意樹*にもひとしい王は、一切の生類の一切の希望を満足させようとしていたのに、運命の神によって、何処に連れ去られたのであろうか。」

などと、嘆きながら、流す涙で大地をしめらせて、王の後を追うて、都から出ていった。ヴィニータ・マティは漸くのことで都城の人々を家に帰らせ、みずからは二人の妃を連れて、車にも乗らずに森林に向った。

王は遂に、運命の神が彼の剛毅な心を試すために創造したかと思われる、太陽に砂が熱せられ、水も樹木もない荒野についた。喉の渇きに苦しみ、遠路を歩いた疲労に力尽いて、王と二人の王妃とは荒野の中のある地点に腰を下ろしたが、その途端に睡魔のとりことなった。

眼を覚ますと、広くて素晴らしい庭園を王は見た。この庭園は王の勝れた徳から生じたのであった。満開の蓮華が咲きほこり、冷たくて透明な水を湛えた池があり、青々と茂った草におおわ

れ、樹々は果実の重さにたわんでいた。木蔭には広くて高い滑らかな岩盤があり、まこと王の布施の威力により天上より引きおろしたナンダナ園*さながらであった。

「夢であろうか、幻であろうか。それとも、神の恵みであろうか。」

と、王はいぶかりながら、しばらくの間、庭園をみつめていたが、そのとき二羽の白鳥の姿をして空を飛ぶ二人のシッダの声が天上からきこえてきた。

「王よ、あなた自身の徳の偉大な光輝を、なぜそのように驚いていられるのですか。常時花が咲き果実のみのるこの庭園に、どうか気楽にお住みになってください。」

と、シッダが言う言葉を聴いて、ヴィニータ・マティ王は二人の妃と一緒に、苦行をしながら、その庭園に安楽に暮した。

あるとき、王が岩盤の上で休んでいると、ひとりの男が頚をつって死のうとしているのを、遠くから見た。王は急いでそこに行き、自殺を思いとどまらせ、その男に訳をたずねた。すると、その男は事の仔細を物語った。

「おはなしいたします。どうか、聴いてください。わたくしはソーマカ王の子孫で、ナーガ・シューラの子ソーマ・シューラと申します。星占いに通暁した人々から、わたくしの本生は盗人であると教示され、父はわたくしが盗人になることを怖れて、努力してわたくしに法典を教えてくれました。このように教育されましたけれども、わたくしは悪人と交わり、盗人になりました。前世に於ける業を、この世に於いて変えることのできる人が、誰かありますでしょうか。

さて、あるとき、わたくしは都の警吏によって他の盗人どもと一緒に捕えられ、処刑のために刑場に連行されました。その瞬間に、王の大象が鎖を切って暴れだし、人々を殺しながら、その場にやってきました。刑吏たちは象を怖れて、わたくしを捨てて、何処かに行ってしまいましたので、わたくしはその混乱にまぎれて逃げだしました。わたくしが処刑のために連行されたことを聞いて、わたくしの父は自殺し、母は父のあとを追うたことを、わたくしは人から聴きました。わたくしは悲しみにうちひしがれ、落胆して自殺を望んで歩きまわっていますうちに、漸く人の住んでいないこの大きな森にやってきました。ここに這入りました瞬間に、突然に、どなたか天上の女性が姿を見せられ、わたくしをなぐさめて、

『息子よ、そなたは王仙ヴィニータ・マティの隠棲処に来て、そなたの罪は消えた。かの王仙より、そなたは智識をえよ。』

と言いました。このように言って、天上の女性は姿を消されました。わたくしは園内を歩きまわりましたが、かの王仙に会うことができませんので、落胆して自殺しようとしていまして、あなたに見つけられたのです。」

と言ったソーマ・シューラを、王仙は自分の小屋に案内し、名乗ったのち、客人としてもてなした。食事をさせた後、王仙は低頭して教えを乞うソーマ・シューラに、数々の正法に関する物語の間に、彼を無知から救うために、語った。

「息子よ、無知はまこと両界に於いて、智慧の劣れる者たちにとっては、害悪となるものであ

る。今、こういう言いつたえを聴くがよい。

〔婆羅門デーヴァ・ブーティと妻の物語〕

むかし、パンチャーラに、*デーヴァ・ブーティという、ヴェーダに通暁した婆羅門がいた。彼に、ボーガダッターという貞淑な妻があった。

ある日、婆羅門が水浴に出かけた留守に、彼の妻は野菜畑に野菜をとりに行ったところ、洗濯屋の驢馬が野菜をくっているのを見た。ボーガダッターは棒を持って驢馬を追いかけ、驢馬が逃げる途中で穴に落ちこむと、それを打擲して蹄を折ってしまった。それを知って、驢馬の持主の洗濯屋は怒って、やって来て、婆羅門の妻を棒でたたき足蹴にした。そのため、妊娠していた婆羅門の妻は流産したが、洗濯屋は驢馬を引張って自分の家に帰った。夫の婆羅門は水浴から帰ってきて、それを知り、妻を看護したのち、憤慨して都城長官のところに赴いて訴えた。

ところが、この愚かな長官は直ちに洗濯屋のバラースラを召喚し、双方の申立てを聴いて、

「驢馬の蹄を折ったのであるから、驢馬の蹄が癒えるまで、婆羅門は洗濯屋のために驢馬の運ぶべき荷を運べ。一方、洗濯屋は婆羅門の妻に流産させたのであるから、婆羅門の妻を妊娠させよ。これが双方に対する制裁である。」

と、判決を下した。これを聴いた婆羅門は絶望して、妻とともに毒を飲んで生命を捨てた。この

ことを知って、王はこの思慮のない都城長官を婆羅門殺しの罪で処刑したが、長官はその後長く動物の胎に生れたという。

このように、無知の闇に包まれた人々は自己の罪障の邪道を行き、勝れた聖典という燈明に導かれることなく、必ず滅ぶのである。」

ヴィニータ・マティがこのように語ると、ソーマ・シューラはさらに教えを懇請したので、王仙は彼を正しく導くために、再び言葉を続けた。

「愛児よ、波羅蜜*を正しく順次に教えるために、話をしよう。よく、聴くがよい。

〔布施によって解脱をえたインドラ・プラバ王子の話〕

むかし、クル・クシェートラ*に、マラヤ・プラバという王があった。あるとき、饑饉が起り、王は臣下の者に財貨を頒ち与えようとしたが、大臣たちは貪欲から王を制止した。そのとき、王子のインドゥ・プラバが王に、

「父上、あなたは何故に悪辣な大臣たちの言うなりになって、臣下の者たちを無視なさるのですか。あなたは臣下の者たちにとって如意樹であり、彼等はあなたの望みを適えてくれる牛ではありませんか。」

と、執拗に言葉を繰返すと、大臣の掣肘を受けていた王はうるさくなって、

「愛児よ、わたしの財宝が無尽蔵だというのか。無尽蔵な財宝もないのに、どうしてわたしは臣下の者たちの如意樹になれようか。そなたこそ、どうして彼等の如意樹になってやらないのだ。」

と言った。父のこの言葉を聴いて、偉大な勇士である王子は

「苦行により自ら如意樹となるか、さもなくば死すべきだ。」

と、誓を立て、苦行林に赴いた。王子が苦行に這入るやいなや、饑饉はやんだ。王子の激しい苦行に満悦したインドラ神から王子は恩寵を授けられ、王子は都城に於いて如意樹となった。王子は四方に拡げた枝と枝に囀る鳥の鳴声によって遠方にいる人々を魅了して呼びよせるかのようであった。王子は毎日援助を懇請する人々の望みを適えてやり、常人の完遂しがたい恩恵を授け、臣下の者たちがあたかも天国にいるかのように、もはや希求するものがないほどにした。

暫くすると、インドラ神が王子のところに来て、

「他人に恵むという汝の希望は満された。天国に来れ。」

と誘うた。すると、如意樹となった王子が、インドラに答えた。

「美わしい花と甘味な果実でもって、他の樹木が自らの利益をかえりみず、他人に常に恵み与えているのに、如意樹となったわたしだけが、自分の幸福のために、人々を失望させて、どうして天国に行けましょうか。」

と、王子の殊勝な言葉を聴いて、インドラが再び言った。

「まこと、そなたの臣下の者たちをも、すべて天国に行かせよう。」

そこで、如意樹ではあったが、王子が

「もしわたしの苦行に満足されたのであるならば、臣下の者たちを天国に導かれよ。それによって、わたしに利益はない。わたしは他人に恩恵を施すことのみを成就するために、大苦行をおこなうであろう。」

と言ったので、インドラは王子を仏陀の分身と讃嘆し、満悦して王子の懇願を聴許し、臣下の者たちをつれて天国に還った。

そして、インドゥ・プラバ王子も樹性を捨てて、もとの姿に還り、森林に住して、苦行によって菩薩の位を得た。

このように、

「布施に専心する者たちは解脱を得る。」

と、布施波羅蜜について、余は語ったのである。持戒波羅蜜について、この話を聴け。

〔持戒を教えられた鸚鵡の話〕

むかし、ヴィンディヤ山に、ヘーマ・プラバという克己心のつよい鸚鵡の王がいたが、この王はブッダの分身の生れで、前生におさめた戒行の徳に富み、前生のことを記憶しており、正法を説いていた。この王の侍衛にチャール・マティという鸚鵡がいたが、この鸚鵡は愛慾に耽る愚か者であった。

あるとき、彼の妻の雌鸚鵡が鳥刺しのわなにかかって死ぬと、彼は妻と別れたことを悲しみ、憐れな境遇に陥った。そこで、賢明なヘーマ・プラバ王は策略で彼を悲しみから救うために、彼のためを思うて、偽って、このように話をした。

「おまえの妻は死んでいない。鳥刺しのわなから逃げていったのだ。というのは、わたしはあの雌鳥が生きているのを、いま見たのだ。さあ、おまえに見せてやろう。さあ、おいで。」

と言って、王はチャール・マティを連れて空を飛び、とある沼に行った。そこで、水に映じた彼自身の姿を見せて、

「さあ、見てごらん。あれがおまえの妻だ。ここに居るじゃないか。」

と言った。その言葉を聴いて、この愚か者は水に映った自身の姿を見て喜こび、水にとびこんで、自分の姿を抱きしめて接吻した。しかし、愛する妻から抱きかえされず、また声を聞くことができなかったので、

「愛する妻は、どうしてわたしを抱きしめてくれないのだろうか。どうして、話しかけてこないのだろうか。」

と考えた。妻が怒っていると想像した愚かな鸚鵡は立去って、アーマラカの実を持ってきて、妻の機嫌をとろうとして、妻と思いこんでいる自分の姿に、それを与えた。アーマラカの実が水中に沈んで浮き上ってくると、愛する妻がそれを受取るのをこばんだと思い、失望落胆してヘーマ・プラバ王の許に行き、王に

「王さま、わたくしの妻はわたくしに抱きつきもせず、言葉もかけてくれません。それに、わたくしが贈ったアーマラカの実さえ、つきかえしました。」

と言った。その言葉を聴いて、王は言うのを厭うかのように、ゆっくりと、

「おまえに話すべきではないのだが、でもわたしはおまえが可愛いから、話そう。おまえの妻は他の雄鳥に惚れているのだ。だから、どうしておまえに愛情を示したりするものか。さあ、はっきりと見せてやろう。あの沼へ行ってみよう。」

と言って、沼へ連れて行き、自分のと愚かな鸚鵡の二羽の水に映じた姿がより添うているのを見せた。

愚かな鸚鵡は自分の妻が他の雄鳥と逢曳しているのだと思い、愛想をつかして引返し、自分の王に言った。

「王さま、これは、わたしがあなたの御訓戒を聴かなかった罰です。わたしは、今、どうしたらよいか、教えてください。」

と、漸く覚った侍衛官の鸚鵡に、教示の機会を摑んだヘーマ・プラバ王は語った。

「女を信用するくらいなら、毒薬のハーラーハラを飲むほうがましなのだし、毒蛇を頸に巻くほうがましなのだ。二度と、女を信用するな。女には、護符も呪文も役に立たない。女というものは風のように変りやすく、ものすごく埃があり、正直を歩む者をよごし穢すのだ。従って、勝れた智慧をもつ堅固な心の持主は、女に執着してはならないのだ。愛欲を捨てた聖者の位を得るために、戒行をこそ行うべきだ。」
と、王から教えられたチャール・マティは女を絶ち、戒行を守って、遂にブッダに等しい者となった。

このように、戒行に富む人々は他の人々を救済するのである。以上、余はそなたに持戒波羅蜜を説いた。次に、忍辱波羅蜜について、聴け。

〔忍辱を行じたシュバナヤ仙の話〕

ケーダーラ山*に、シュバナヤという偉大な聖仙がいたが、いつもマンダーキニー河*で水浴をし、平静で、苦行によって痩せおとろえていた。

ある夜、盗賊どもが以前に地中に埋めておいた黄金を探しにやって来たが、何処にも見つからなかった。そこで、このように人の居ない処では、この聖仙のほかに黄金を盗む者はいないと考え、盗賊どもは聖仙の小屋に這入って言った。

「おい、似而非仙人よ、地中から盗んだ俺たちの黄金をはき出せ。盗人のおまえは、盗賊の俺たちのうわまえをはねたな。」
と、悪党どもから間違って責めたてられたが、聖仙は財宝を盗んでいないので、
「わたしは盗んでいない。また、見たこともない。」
と言った。すると、野蛮な悪党どもは棍棒で聖仙を打擲したが、虚偽を言わぬ偉大な聖仙は同じ言葉を繰返すだけであった。そこで、盗賊どもは
「この男は強情な奴だ。」
と、聖仙の両手と両足を次々に切りおとし、また両眼をえぐってしまった。

しかし、聖仙は憶することなく同じ言葉を繰返したので、盗賊どもは
「誰か他のものが盗んだのだ。」
と考えて、もと来た道を引返していった。

その翌朝、聖仙の弟子のシェーカラ・ジュヨーティという王が聖仙に会いに来て、手足を切られ眼をえぐられた聖仙を見た。そこで、尊師の災難に心をいためた王は、その訳を知ると、早速に盗賊どもを捜索させて、そこへ連行させた。王が盗賊どもを処刑しようとすると、聖仙が王に言った。

「王よ、盗賊どもを処刑なさるのならば、わたくしは自ら生命を絶ちます。剣がわたくしにこ

のようなことをしたのであって、彼等になんの罪がありましょうか。また、彼等が剣を動かしたにせよ、それは憤怒が彼等にそうさせたのです。それに、彼等が怒ったのは黄金が紛失したからであり、それはわたくしの前世の悪業によるものです。そして、それはわたくし自身の無智に基づくのです。ですから、わたくしの無智こそ、わたくしに災害を与えたのです。従って、わたくしの無智こそ、殺さるべきです。しかも、盗賊どもがわたくしに対して暴行を働いた廉で処刑されるべきであるならば、わたくしに恩恵を与えたことで、保護さるべきではないでしょうか。もし彼等がこのようなことを、わたくしにしなかったら、解脱という果報をもたらす忍辱を、わたくしはどうして行うことができたでしょうか。ですから、彼等はわたくしに完全無欠な恩恵を与えてくれたのです。」

などと、言葉をつくして、忍辱に専心する聖仙は王に諭したので、王は盗賊どもを処刑することを止め、釈放した。

そして、聖仙の苦行の功徳により、聖仙の身体は以前の通りに五体完全となり、それと同時に聖仙は解脱に達した。

このように、忍辱を行ずる人々は輪廻を脱するのである。以上、余は汝に忍辱波羅蜜を説いたのであるが、精進波羅蜜について、聴け。

〔精進により目的を達成した婆羅門マーラーダラの話〕

むかし、マーラーダラという婆羅門の息子がいた。あるとき、彼はシッダ族の王子が空中を飛んでいるのを見た。彼はシッダ族の王子と競争しようと思い、草で作った翼を自分の身体の両側に結びつけ、飛び上り飛び上って、空中を飛行することを練習した。毎日このように無駄な努力を続けているのを、あるとき空中を飛行していた王子が見た。

「成功しがたいことであっても、あのように努力して精進している若者には同情すべきである。恩恵を授けてやろう。」

と考えて、満悦した王子は婆羅門の青年を自身の神通力により、自分の肩にのせ、従者とした。

このように、神々でさえ精進に満足されるのである。余は汝に精進波羅蜜を説いた。禅定波羅蜜について、聴け。

〔絵に恋をした商人の話〕

むかし、カルナータ地方*に、ヴィジャヤ・マーリンという商人がいた。この富裕な商人に、マ

ラヤ・マーリンという息子があった。

あるとき、この青年は父と一緒に王宮に行き、インドゥ・ケーサリン王の王女を見た。王女インドゥ・ヤシャーは恋の蔓草のように魅力があり、青年が王女を見た途端に、その心の中に這入りこんでしまった。家に還ったのち、夜も眠らず、青白い顔をして、日中はクムダ*の花のように身体をすくめてふさぎこんでいた。王女のことばかりを考えて、食物なども摂らず、身内の者からたずねられても、唖のように黙っていた。

王女と離れているのを悲しみ、このように一隅に引籠っているマラヤ・マーリンのところへ、友人で王室画家のマンタラカがやって来て、語った。

「君、君はまるで絵のように壁に凭れてばかりいるが、どうしたのだ。生命のない像のように、君は食事もせず、聴こうともせず、見ようともしない。」

と、執拗にたずねられて、商人の息子マラヤ・マーリンは友人に自分の望みを語った。

「商人の息子である君が王女に恋慕するのはふさわしくない。白鳥は他の池に生える蓮華の美わしさを慕うであろうか。ヴィシュヌ神の臍である池に生える蓮華を楽しんだとて、なにになるか。」

と言ったけれど、画家は思いとどまらせることができなかったので、マラヤ・マーリンの恋慕の気持を和らげ、時間を過させるために、王女を画布に描いて与えた。

商人の息子マラヤ・マーリンは、絵に描かれた王女を見つめ、なぐさめ、さわり、また飾って、

それが本当のインドゥ・ヤシャーであると想像し、次第にそれに夢中になり、遂には絵姿に話しかけたり接吻したりするようになった。

ある日、月が登った頃、彼は絵を持ち出して、恋人と娯もうと思って、庭に出た。一本の樹木の根元に絵をおいて、彼は恋人のために花摘みに遠くへ行った。そのとき、ヴィナヤ・ジュヨーティスという聖仙が天上から彼を見て、憐れんで、迷妄から覚めさせようとして、天降ってきた。聖仙は自分の神通力によって、その絵の片隅にあたかも生きているような黒蛇を描き、傍に姿をかくして立っていた。とかくするうちに、マラヤ・マーリンは花を摘んで還ってきて、絵に描かれた黒蛇を見て、考えた。

「この蛇は何処から来たのであろうか。美しい容姿の宝庫ともいうべきこの美姫を護るために、運命の神が創造されたのであろうか。」

と考えて、花で絵姿を飾り、抱きしめて、考えた通りにたずねた。そのとき、聖仙の神通力により、王女の姿は黒蛇に嚙まれて、生命をなくした。王女の姿が絵であることを忘れたマラヤ・マーリンは、「ああ、ああ。」と叫んで、気を失って地上に倒れた。

間もなく正気を取戻した彼は、涙を流しながら、自殺を決心し、立上って樹によじ登り、高い樹の梢からわが身を投げた。聖仙は落ちていく彼を両腕に抱きとめ、姿を現わして彼をなぐさめ、

「馬鹿な子よ、あの王女は自分の御殿にいることを知らないのか。画布に描かれている王女は生命のない絵姿ではないか。おまえが抱きしめたのは誰なのだ。あるいは、大きな蛇に嚙まれた

のは誰なのだ。恋慕しているおまえの心がつくり上げたものに真実さを与えたのは、誰なのだ。それにもかかわらず、何故おまえは禅定の堅固心でもって真実を知ろうとしないのか。それによって、このような悲しみの容器に二度とならないようにするためだ。」

と語った。この言葉を聖仙から聴いたとき、迷妄の夜は明けて目覚めたマラヤ・マーリンは、聖仙を恭々しく礼拝して言った。

「尊師よ、あなたの恩寵により、わたくしはこの不幸を渡ることができました。如何にすれば輪廻を渡ることができるか、恩寵を垂れて御教示ください。」

このようにマラヤ・マーリンが懇請すると、菩薩である聖仙は彼に自らの智慧を教えて、姿を消した。そこで、マラヤ・マーリンは森林に行き、苦行の力により、拒否すべきものと受容すべきものに関する真実を、その理由とともに知るをえて、阿羅漢*の位を得た。そして、慈悲深い彼は帰ってきて、智慧を教示して、インドゥ・ケーサリン王ならびに都城の人々を解脱させた。

このように、不真実のことであっても、禅定の力をもつ人々には、真実となるのである。以上、禅定波羅蜜について説いたのであるが、智慧波羅蜜について聴け。

〔ヤマの秘書を籠絡した盗人の話〕

むかし、シンハラ島*に、シンハ・ヴィクラマという盗人がいたが、この男は生れたときから諸方から奪ってきた他人の財宝で育てられてきた。年をとって、自分の仕事に嫌気をさした彼は考えた。

「他界に於いては、如何なる方策があるのだろうか。そこでは、如何なるものに庇護をもとむべきであろうか。わたしがシヴァ神かヴィシュヌ神に庇護をもとめたとしても、これらの神に奉仕する神々や聖仙たちや、その他の輩がいる場合、わたしをこれらの神はどのように待遇するだろうか。だから、わたしは人間の善行と非行を記録する唯一人のチトラグプタ*に仕えよう。彼は自分の力でわたしを護ってくれよう。書記である彼は、ひとりでブラフマンとルドラ*の役割を果しているからだ。彼は自分の手中にある一切を一瞬に書きとめたり消したりするからだ。」

と考えて、チトラグプタのみに誠信を捧げはじめた。シンハ・ヴィクラマはチトラグプタのみを祀り、それを喜こばせるために、婆羅門たちに食事を饗応した。

このように、シンハ・ヴィクラマがしていると、あるときチトラグプタが彼の本心をたしかめるために、彼の家に客人の姿をしてやって来た。すると、この盗人は彼を恭々しく迎え、饗応し、布施をしたのち、

「『チトラグプタが汝に満足せよ』と言ってください。」

と言った。そこで、婆羅門の姿をしていたチトラグプタは

「シヴァやヴィシュヌなどの神々を捨てて、そなたは何故にチトラグプタを祀るのか。」

とたずねた。この言葉を聴いて、盗人のシンハ・ヴィクラマが

「あなたは、そんなことを聴いて、どうするのだ。わたしはチトラグプタ以外の神々は必要でないんだ。」

と言うと、婆羅門の姿をしたチトラグプタは再び言った。

「おまえがわたしに自分の妻をくれるなら、そのように言おう。」

シンハ・ヴィクラマはこの言葉を聴くと、喜んで、

「わたしが特にえらんだ神を喜こばすためなら、あなたにわたしの妻をさしあげます。」

と語った。チトラグプタは、その言葉を聴くと、姿を現わして、

「わたしがチトラグプタだ。わたしは満足じゃ。そなたのために、わたしがどうしたらよいか、話すがよい。」

と言った。

そこで、大いに喜んだシンハ・ヴィクラマが言った。

「尊者よ、わたしが死なないように、してください。」

と言うと、チトラグプタは

「人間を死から護ることはできない。しかし、とにかく、おまえに方策を授けよう。わたしの言うことを、よく聴け。

死の神はシュヴェータ*のことが原因で怒ったシヴァ神に焼かれたが、死の神がいなくては困る

ので、再びつくられた。それ以来、シュヴェータが住んでいるところでは、死の神はシヴァ神の命令により制限されていて、他の生類をさえ滅すことはない。シュヴェータはいま東方の海の向う岸にあるタランギニー河を渡った苦行林にいる。そこには死の神は踏みこまぬ故、そなたをそこへ連れて行って、住まわせよう。だが、タランギニー河のこちら側に来てはならない。間違って帰ってきて、死の神に捕えられる場合には、そなたが他界に来たときに、方策を講じてあげよう。」

と言って、満悦したチトラグプタはシンハ・ヴィクラマを連れてシュヴェータの隠棲処に行き、彼をそこにおいて、姿を消した。

さて、暫くして、シュヴェータの隠棲処に住むシンハ・ヴィクラマを連行しようとして、死の神はタランギニー河のこちら側の岸に近づいた。そこに立って、シンハ・ヴィクラマを連行する手段が見つからなかったので、死の神は幻力で神々しい美女をつくり、彼のところへ行かせた。媚めかしいこの美女はシンハ・ヴィクラマに近づき、自分の美しい魅力を溢れさせて、彼を魅惑し、たくみに彼をとりこにした。いく日かが経って、美女は親族の者たちに会いたいという口実を設けて、川を渡ろうとして、浪立っているタランギニー河にはいった。彼女について来て、シンハ・ヴィクラマが岸に立って見ていると、彼女は川の真中でつまずいた。流れに流されるかのように、彼女は叫び声をたてた。

「死のうとしているわたしを眺めていられるのですか。あなた、わたしを護ってくれないので

すか。あなたの勇気は狐で、名前のように獅子の勇気(シンハ・ヴィクラマ)を持っていないのですね。」

と、美女が言うのを聴くと、シンハ・ヴィクラマは河にとびこんだ。女は川の流れに流される様子を装うて、彼女を救おうと追いかける彼をこちら側の岸に、またたく間に引きよせた。シンハ・ヴィクラマがこちら側の岸に引きよせられると、死の神は彼の頸に鎖をかけて、捕えた。まこと、対象に心を奪われた人々には、破滅がさしせまっているのである。

かくて、死の神によってヤマの会堂に連行された不注意なシンハ・ヴィクラマを見て、彼が嘗て満悦させたチトラグプタがひそかに語った。

「まず地獄に住むか、それとも天国に住むか、と訊ねられたら、まず天国に住むことを懇請せよ。天国に住んでいる間に、天国に永住することができるように、福徳を積むのだ。それから、そなたの罪障をすべて消滅させるために、苦行をせよ。」

と、チトラグプタが言うと、悄気こんで顔をふせ、怖れおののいていたシンハ・ヴィクラマは、すぐに同意した。

その直後に、法王ヤマがチトラグプタに

「この盗人に、なにか福徳の部分がいくばくか、あるか。それとも、ないか。」

と訊ねた。そこで、チトラグプタが語った。

「この男は客人を歓待いたします。自分の信奉する神を喜こばせるために、自分の妻さえ客人に提供しました。されば、この男は天国に赴き、天上の一日を過すに値いします。」

と、チトラグプタが言うのを聴いて、法王はシンハ・ヴィクラマを見た。

「おい、おまえは天国の楽しみと地獄の責苦のどちらを先に楽しみたいか。言え。」

と、法王が言うのを聴くと、シンハ・ヴィクラマは天上の楽しみを先にしてもらうよう頼んだ。法王の命令により車が来ると、それに乗り、シンハ・ヴィクラマはチトラグプタの言葉を心の中で繰返しながら天上に登った。

シンハ・ヴィクラマは天上に登ると、快楽を遠ざけ、天上の川での潔斎と祈頌の読誦の戒行に専心し、遂に天上に於いて第二日を過すことができた。このようにして、彼は遂に激しい苦行の力により天国に永住することができるようになり、シヴァ神を宥慰して罪障を消滅し智慧を得た。こうして、地獄の使者どもは彼の顔を見ることができなくなり、チトラグプタは帳簿にある彼の名を抹消し、ヤマも黙っていた。

このように、シンハ・ヴィクラマは盗人ではあったが、正しい智慧の力により、解脱を得たのである。以上、智慧波羅蜜を語った。愛児よ、このように、賢者はブッダの教えられた、船にも喩うべき六波羅蜜に乗って、この世の大海を渡るのである。」

と、かの森の中で、菩薩の位に住するヴィニータ・マティ王がソーマ・シューラに教え諭していると、太陽は法の教えを聴き、心に寂静をえて、黄褐色の袈裟をまとうたかのように色が淡くなり、山の洞穴の中に這入ってしまった。そこで、ヴィニータ・マティ王とソーマ・シューラとは

夕方のお祈りを正しく行って、その夜をそこで過した。

そして、その翌日も、ヴィニータ・マティはソーマ・シューラにブッダの教えを説き、その秘義を明かした。そこで、ソーマ・シューラは、その森の大樹の根元に小屋をつくり、先生に侍坐して、瞑想に専念した。

遂に、先生と弟子の両人は同じくヨーガ*の偉大なる神威力をえて、最高のさとりを得た。

さて、話かわって、インドゥ・カラシャ王は、ヴィニータ・マティ王が兄のカナカ・カラシャ王にアヒッチャトラ*の王国を贈ったことをねたみ、攻めてきて、利剣と駿馬の威力によって、兄のカナカ・カラシャを再び王国から追放した。アヒッチャトラ王国から追放されたカナカ・カラシャは二三人の侍臣をつれて放浪し、たまたまヴィニータ・マティの隠棲処のある森林にやって来た。空腹と喉の渇きに苦しんだカナカ・カラシャが、その森で果実や木の根や水を探していると、インドラ神はヴィニータ・マティがそのように旅行者を歓待することを妨げようと思い、その森林を焼き払って、もとの通りの沙漠にしてしまった。

ヴィニータ・マティは自分の隠棲処が突然に沙漠となったのに混惑して、しばらくあたりを歩きまわった。そして、従者をつれたカナカ・カラシャが飢餓のために息も絶えだえになって放浪してやって来たのを見た。客人に親切をつくしてやまない菩薩は近づいていって、カナカ・カラシャの一行を賓客として迎え、このように悲惨な境遇に陥った次第を詳しく訊ね、事情を知って、言った。

「この森は沙漠となって、おもてなしするものもありませんが、空腹に苦しんでいられるあなたがたの生命を救う方策をお話しましょう。ここから半クローシャほどの距離に穴があり、鹿がそこに落ちこんで死んでおります。その肉を食べて、生命を護りなさい。さあ、行きなさい。」

「そういたします。」

と、空腹に悩んでいたカナカ・カラシャが従者をつれて出かけますと、菩薩のヴィニータ・マティは一足さきにそこへ行った。その穴につくと、神通力で鹿の姿となり、穴に身を投げて、客人のために自分の生命を捨てた。

カナカ・カラシャたちがゆっくりと歩いて穴のところに到着して見ると、穴の中に鹿が死んでいた。それを引きあげ、草や莢で火をおこし、その肉を焼いて、のこらず食べてしまった。

話かわって、菩薩の妻の竜王の女と王女とは、隠棲処の森林が荒れはてたうえに、夫の姿が見えないので、心乱れてソーマ・シューラのところに行き、そのことを告げた。ソーマ・シューラは深い瞑想から立上って、直ちに先生のしたことを誓願の力によって覚り、先生の二人の妻を悲しませることではあったが、その訳を話した。そして、彼は先生の二人の妻をつれて、先生が賓客のために自己を犠牲にした穴のところへ、急いで行った。行って見ると、そこには、鹿の姿となった夫の角と骨とだけが残っていたので、夫を熱愛していた竜王の女と王女とは嘆き悲しみ、その角と骨とを拾い、自分の隠棲処から薪を持参し、火中に身を投じた。すると、そこに居たカナカ・カラシャと従者も、一部始終を知って嘆き、火中に身を投じた。

このようになって、ソーマ・シューラは先生の亡くなった悲しみに堪えられず、自分の生命を捨てようと決心して、ダルバ草の席の上に寝た。その瞬間に、インドラが姿を現わして彼に近づき、

「そのようなことを、するな。わたしはそなたの先生をためしてみたのだ。おまえの先生は骨と灰だけが残っているに過ぎないけれども、余は甘露の雨をそそいで、妻や賓客も一緒に生きかえらせた。」

と語った。インドラ神の言葉を聴いて、ソーマ・シューラがインドラを拝み、喜んで立上り、行って見ると、彼の先生である菩薩のヴィニータ・マティは、二人の妻とともに、またカナカ・カラシャたちも一緒に、生きかえって、立上っていた。

そこで、ソーマ・シューラは妻と一緒に他界に往ってきた先生に頭を下げ、花を捧げ、言葉を述べて、先生を礼拝し、先生の姿を眼で飲んだ。そして、カナカ・カラシャなどがヴィニータ・マティに恭々しく誠信を捧げていると、ブラフマンとヴィシュヌをはじめとして、すべての神々がそこにやって来た。そして、ヴィニータ・マティの慈愛に満悦して、彼に最もふさわしい恩恵を授けて、姿を消した。ソーマ・シューラたちも一部始終を物語ったが、そののちヴィニータ・マティは彼等と一緒に他の神々しい苦行林に赴いた。

このように、灰になっていても再び会うことができるのであるから、この世に於いては、それ

それ思いのままに行ったとしても、生きているかぎり、再会できないことはない。されば、倅よ、わが身を捨てることは止めよ。そなたは勇者なのだ。さあ、行くがよい。必ずムリガーンカダッタ王子と会うことができる。』

と、年老いた女苦行者の口から、この偉大な物語を聴いて、新らしい希望に燃えましたわたくしは礼を言って、剣を手にして出発しました。そして、遂にこの森に来ましたところ、たまたまチャンディカー女神*のために犠牲を探していましたこのシャバラ族の者たちに見つけられました。戦って、負傷をしますと、彼等はわたくしを縛りあげ、シャバラ族の王マーヤーバトゥの側に連れて来られました。そして、王子さま、数人の侍臣を従えられたあなたに、お会いできました。あなたのお蔭で、わたくしは自分の家に居るかのように安心いたしました。」

と、侍臣のグナーカラが自分の身上を話すのを聴いて、シャバラ王の宮殿に逗留していましたムリガーンカダッタは、この上ない喜びを享受しました。そして、戦闘で受けた傷の手当が終ったのを見て、既にその日も暮れかかっていましたので、王子は他の侍臣たちと一緒に座を立ち、毎日の務めを果しました。

そして、他の侍臣たちと再会し、またシャシャーンカヴァティーを得るためにウッジャイニーに一刻も早く行きたかったのですが、グナーカラの傷の癒えるのを待って、なお数日間、そこに逗留していました。

五

グナーカラの傷が癒え、健康が回復しますと、ムリガーンカダッタは吉日を選んで友人のシャバラ王に別れの挨拶をして、シャシャーンカヴァティーを探しに、ウッジャイニーに向って、シャバラ王の村から出発しました。シャバラ王マーヤーバトゥは盟友のマータンガ王ドゥルガ・ピシャーチャをともない、従者をつれて、かなり遠くまで見送り、有事の際には援助することを約束しました。王子はシュルタ・ディ、ヴィマラ・ブッディ、グナーカラおよびビーマ・パラークラマの四人を連れて、ヴィンディヤ山の森林中を他の友人たちを探して歩いていましたが、ある夜、彼は仲間と一緒に、一本の樹木の根もとで寝ました。突然に眼が覚めて立上り、あたりを見まわすと、別の男がひとりよく寝ているのを見つけました。その男が顔にかけている布をとりのぞいて見ますと、その男が侍臣の一人ヴィチトラ・カタであることが判りました。ヴィチトラ・カタも眼を覚まし、主人のムリガーンカダッタであることを知るやいなや喜んで、王子の両足に抱きつきました。王子も突然にヴィチトラ・カタに出会い、驚きの眼をみはらせて彼を抱きしめましたし、他の侍臣たちもみな眼を覚まして、再会を喜びあいました。そこで、みんなが順次に各自の経験を話してきかせたのち、ヴィチトラ・カタに訊ねましたので、彼は自分の経験を話しはじめました。

「あのとき、竜王パーラーヴァタの呪詛によって、あなたがたがちりぢりとなったとき、わたくしも一人になって長い間うろついていました。遠くまでさまよい歩いて疲れ果てて茫然としていましたが、その翌日、突然に森のはずれにある素晴らしい大宮殿につきました。

神々しい二人の妃をつれたひとりの貴人がわたくしを見て、冷たい水をあびさせて、わたくしをいたわってくれました。その貴人はわたくしを城内に案内し、わたくしに素晴らしい食事を饗応し、自分も食べ、その後で二人の妃も食事をしました。食事を終って元気を回復しましたわたくしは、その貴人に

『あなたはどなたですか。死のうとしているわたくしを、どうしてこのようにお救いくださるのですか。わたくしは主人を見失って、死ぬより外に途がないのです。』

と言って、自分の身上について、のこらず話しました。すると、この親切で寛大な貴人が、わたくしに、このように申しました。

『わたしは夜叉で、あの二人の女はわたしの妻です。あなたは今日わたしの賓客として、ここに来られたのです。能力に応じて客人をもてなすのは、家長たる者の義務です。ですから、わたしはあなたをおもてなししたのです。でも、あなたは何故に生命を捨てようとされるのですか。あなたがたの離散は竜王の呪詛によるのですから、ほんの僅かの間です。とにかく、呪詛は力を失って、再会ができます。輪廻にさいなまれることなく、この世に生れている人がいましょうか。夜叉のわたしでさえ、輪廻の苦悩に出会ったのです。それを、お話しましょう。聴いてください。

〔シュリー・ダルシャナの物語〕

大地という花嫁の頭を飾る花環ともいうべき、勝れたる人々の徳で飾られたトゥリガルター*という都があります。そこに、パヴィトラ・ダラという婆羅門がいましたが、この人は財宝の点では貧乏でしたが、親族の人々および家系などでは恵まれていました。この高潔な婆羅門は金持の人々の間に住んでいましたが、あるとき考えました。

「これらの金持の人々の間で、掟正しく生活していても、わたしは頭角をあらわすことはない。あたかも、すぐれた詩の中にある無意味な一つの言葉のごときものだ。わたしが尊敬に値する人間であっても、わたしは人から奉仕されることもなく、また布施を受けることもない。従って何処か辺鄙な土地へ行って、ヤクシニー(夜叉の女性)を宥慰しよう。先生はそのための呪文をわたしに教えてくれた。」

と考えて、婆羅門パヴィトラ・ダラは森林に赴き、定められている通りに呪法を行い、ひとりのヤクシニーを妻とすることができました。サウダーミニーというヤクシニーと結ばれた彼は、厳しい冬を切りぬけて春の女神に抱かれた榕樹さながらでした。

ある日、息子の生れないことを嘆いている夫のパヴィトラ・ダラに、ヤクシニーが言いました。

「あなた、そんなに考えこまないでください。わたしたちに、息子は生れます。わたしが話し

ます話を聴いてください。

南方の境界に、あたかも豪雨の発生地かと思われるタマーラ樹の森林が連なっています。木は繁茂して雲のように陽をさえぎり、昼なお暗いほどです。

そこに、プリトゥーダラという有名なヤクシャが住んでいました。妾はこのヤクシャのひとり娘で、サウダーミニーといいます。父は妾への愛情から妾を連れてあちらこちらの大山に行きましたので、妾はいつも天上の楽園で遊んでいました。

あるとき、妾が友だちのカピシャ・ブルーとカイラーサ山*で遊んでいましたとき、アッタハーサというヤクシャの若者を見ました。友人たちの間にいましたアッタハーサもまた妾を見ましたが、その途端に妾たちの眼は互いに相手の美しい姿に惹きつけられました。それを見て、妾の父は似合いの結婚だと考え、直ぐにアッタハーサを呼んで、二人の結婚を取決めました。吉日を決めたのち、父は妾を家に連れて帰り、アッタハーサも大喜びで友人たちと一緒に自分の家に帰りました。

その次の日、妾の友だちのカピシャ・ブルーがふさぎこんで妾のところへ来ました。妾が訳をたずねますと、彼女は口籠りながら、このように申しました。

『ねえ、サウダーミニー、本当は言ってはならないことだけれど、悪いしらせをお話ししましょう。今日、妾がここへ来る途中に見たのですが、あなたの婚約者のアッタハーサがヒマーラヤ山の高原にあるチトラスタラという遊園で、あなたに対する思慕をまぎらせようと、友人たちと遊

んでいましたが、友人たちが戯れにアッタハーサをヤクシャ王とし、弟のディープタ・シカをクベーラ神の息子ナダ・クーバラの化身した王子とし、自分たちはその大臣となりました。あなたの愛人がこのように友人たちからおもちゃにされていましたとき、大空を心のままに飛びまわっていたナダ・クーバラがそれを見ました。財宝の神(クベーラ)の子は怒って、アッタハーサを呼びつけて、『おまえは従者の身分でありながら、君主の態度をとろうとする。不届きな奴め、おまえは人間になれ。高い地位を望んだ罰に、下界にさがれ。』と、呪詛しました。このように言われたアッタハーサは驚いてナダ・クーバラに訴えました。『王子さま、わたくしは恋しい気持を紛らせるために、愚かにもこのようなことをしてしまいました。支配を窺覦して、したのではありません。なにとぞ、わたくしをおあわれみください。』と、アッタハーサの傷心の言葉を聴いて、ナダ・クーバラは誓願の力によりその通りであることを知り、呪詛の期限を定めて、『おまえは人間になり、おまえが恋いこがれているヤクシニーに、おまえの弟ディープタ・シカを息子として、生ませるであろう。おまえは呪詛から解放されて、おまえの妻とともに、もとの身分をうるであろう。おまえの弟はおまえの息子となって、地上に王権を確立して呪詛から解放される。』と言いました。財宝の神の王子がこのように言いますと、アッタハーサは何処かに姿が見えなくなりました。それを見て、妾は悲しくなり、あなたのお側にやって来たのです。』と、カピシャ・ブルーが言うのを聴きまして、妾は悲しみのために身も心もないほどでした。妾は自分の運命を嘆き悲しみ、両親の許へ行って、そのことを告げ、夫と再会を生甲斐にして時を

過して参りました。

あなたはあのアッタハーサの生れかわりで、妾はあのときのヤクシニーです。妾たちはこうして結ばれたのです。ですから、妾たちには間もなく息子が生れます。」

このように、神聖な智慧のあるサウダーミニーが言いますと、婆羅門パヴィトラ・ダラは息子が生れる希望をえて、喜こびました。

時を経て、ヤクシニーが息子を生み、両人の家と心とを喜こびに湧きたたせました。そして、パヴィトラ・ダラが息子の顔を見ましたとき、彼は忽ちに神々しい姿となり、ヤクシャのアッタハーサとなりました。

「ねえ、おまえ、わたしたちにかけられた呪詛は終った。わたしはアッタハーサになった。さあ、おいで。わたしたちは、もとのところへ帰ろう。」

と言いますと、妻のヤクシニーが

「この子は、呪詛のためにわたしたちの息子になった、あなたの弟さんですよ。わたしたちがいなくなったら、この子がどうなるか、考えてください。」

と言いました。その言葉を聴くと、アッタハーサは瞑想して、どのようにすべきかを察知して、

「この町にデーヴァ・ダルシャナという婆羅門がいる。彼は貧乏で、子供がなかったが、五火*を守りつづけていた。しかし、飢のために、彼と妻の胃の中では、二つの別の火がさらに熾んに燃えあがっていた。

あるとき、財宝と子供を希求して苦行している彼に、彼が宥慰している聖なるアグニ神(火神)が夢に現われて、告げた。

『おまえに実子は生れないが、養子をえるであろう。そして、その威力により、婆羅門よ、おまえは貧苦より脱けでるであろう。』

と、アグニ神のお告げを受けて、あの婆羅門は今それを期待して暮している。この婆羅門に、この子をやろう。事実、そうなることになっているのだ。」

と、妻に語って、子どもを黄金をつめた壺の上に置き、子どもの頸には神々しい宝玉の輪をかけて、夜間に婆羅門デーヴァ・ダルシャナと妻とのふたりが睡っている間に、その家に置いて、アッタハーサは妻をつれて自分のもとのところへ帰りました。

婆羅門デーヴァ・ダルシャナと妻とは眼が覚めて、光り輝く宝玉の星をもつ月にも喩うべき子どもを見ました。

「これは一体どうしたことだ。」

と驚きましたが、金の満ち溢れた壺を見て、夢の中でのアグニ神のお告げを憶い出して、喜こびました。彼は運命の神から授けられた子どもと財宝を受取り、朝になると、祝宴を催しました。そして、十一日目には、この子にふさわしいシュリー・ダルシャナという名をつけました。こうして、婆羅門デーヴァ・ダルシャナは大富豪となりましたが、祭式など婆羅門の義務を果たし、この世のもろもろの幸福を享受しました。

さて、シュリー・ダルシャナは父の家で成長し、ヴェーダ*などの学術の蘊奥をきわめましたが、勇気のある彼は剣道にも練達しました。時を経て、シュリー・ダルシャナが青年になりますと、父のデーヴァ・ダルシャナは霊場巡拝の旅に出かけて、プラヤーガ*で死にました。父の死を知ると、母も火に身を投じて死にましたので、シュリー・ダルシャナは悲しみの裡に聖典に規定された諸行事を行って、両親の菩提をとむらいました。

次第に悲しみも薄らいでくると、彼は結婚しておらず、また親族もなかったので、学問はありましたけれども、遂に博奕に耽るに至りました。間もなく、彼の財産はこの悪業のために浪費しつくされて、食物さえ手に入れることができなくなりました。

あるとき、シュリー・ダルシャナが賭博に負けて裸にされ、着ている着物さえ取上げられたため恥ずかしくて外出することもできず、賭博場に三日間も何も食べずにいました。他の人々が呉れる食物も拒んでいますと、友人のひとりのムカラカという博奕打がシュリー・ダルシャナに話しかけてきました。

「どうして君はそんなにすねているのだ。これは博奕という悪業をやれば当然のことじゃないか。骰子は不運の女神の流し目だということを知らないのか。両腕が博奕打の着物で、塵埃がその寝床、十字路がその家で、破滅がその妻という具合に、神は博奕打にきめていられるのだ。どうして、食物を受取らないのだ。どうして、智慧があるというのに、自分の身体に気をつけないのだ。賢者が生きているかぎり達成できない目的があるだろうか。この点について、ブー・ナン

ダナの素晴らしい物語を聴け。

〔ブー・ナンダナ王の冒険〕

この世に、大地の飾りともいうべきカシュミーラ*という土地がある。そこに、ブー・ナンダナという学芸・聖典に通暁した王がいた。王は敵の国土に於いて勇名を轟かせたが、愛する女の二つの乳房に爪痕をつけるのに似ていた。王は政治の要諦に通暁し、クリシュナ*神に熱烈な信仰を捧げていたので、国民は常に災害を受けず、また邪悪なことに心を動かされなかった。

ブー・ナンダナ王がある月の十二日にヴィシュヌ神を聖典の掟に従って礼拝したが、その夜、夢を見た。夢の中で、ひとりのダイトヤの娘が王に近づいてきたので、王はこの娘と交わった。眼が覚めると、娘の姿は見えなかったが、自分の身体にはっきりと愛欲を楽んだ痕があるのを見て、驚いた。

「あれは夢ではない。たしかに、あの娘と交わりをした。だが、天上の女性にたぶらかされたのではなかろうか。」

と考えて、その娘のことばかりを思うて、再び会うことのできないのを悲しみ、次第に王者としての務めをすべて怠るようになった。再び会う手段も見つけられず、王は遂に

「あの女と逢瀬を楽しめたのは、ヴィシュヌ神の恩寵によるものであった。だから、あの女と

再会できるよう、何処か人里離れた処に行き、ヴィシュヌ神を祀ろう。あの女と離れていて、まことに味気ない王国の鎖をたちきろう。」

と考えて、自分の決意を家臣たちに告げ、王位を弟のスナンダナに譲った。

王位を捨てたブー・ナンダナ王は、ヴィシュヌ神の足痕から生じたクラマ・サラスという霊場に赴いた。王はその地に住んで、他の欲望を絶ち、盛夏にチャータカ鳥が新らしい雨を待ちのぞむように、ダイトヤの娘との再会のみを願って、苦行をつづけた。こうして、その地で苦行をつづけて、十二年の歳月が過ぎたとき、賢者の中の賢者ともいうべきひとりの苦行者が王の方に近づいてきた。この苦行者は褐色の髪をたばねて、弟子の群を連れており、あたかもシヴァ神が霊場のある山の頂から天降ってきたかのようであった。苦行者は王を見て、王に対して親愛の情をおこし、近づいて恭々しく事情を聴き、しばらく考えて王に語った。

「王よ、あなたの恋せられるそのダイトヤ*の娘は、パーターラ*に住んでおります。御安心なさい。わたくしがあなたを彼女の許へ、おつれしましょう。わたくしはヤジュナというダークシナートヤ地方*の供犠僧の息子で、ブーティ・ヴァスと申す婆羅門でありますが、呪師の師匠であります。わたくしは父から知識を学び、パーターラに関する論典からシヴァ神を宥慰する呪文と祭式の次第とを習得しました。そして、わたくしはシュリー・パルヴァタ*に赴き、シヴァ神の宥慰する苦行を行いました。すると、苦行に満足されたシヴァ神が親しく姿を現わされ、わたくしに申されました。

『行け。そなたはダイトヤの美女と結婚をして、地下界で愛欲を娯んだのち、余の許に還れ。その目的を達成する手段を、そなたに語ろう。よく、聴くがよい。この地上に、パーターラに通ずる入口が数多くある。カシュミーラには、マヤ*が作った有名な大きな入口が一つある。この入口から、バーナ*の娘ウシャーは恋人のアニルッダを這入らせて、ダーナヴァ族*の遊園でアニルッダを娯ませた。また、プラデュムナは息子を救うためにこの入口をあけ、山の頂を片方の扉とし、ドゥルガー女神を数百の讃頌で宥慰してシャーリカーという名をもつ女神とし、勧請してその扉を守護させたのである。従って、現在その土地はプラデュムナ頂とシャーリカー山という二つの名称で呼ばれている。行け、そなたは従者とともに、この勝れた洞穴からパーターラに這入るがよい。余の恩寵により、そなたは其処にて目的を達成するであろう。』

と言われますと、シヴァ神は姿を消されました。神の恩寵の威力により、わたくしは知識を余すところなく会得し、いまカシュミーラの土地に来たのであります。ですから、王よ、わたくしどもと一緒にシャーリカー山に行きましょう。そうすれば、わたくしはあなたが恋い焦れていられる美少女のいるパーターラへ、あなたを御案内することができましょう。」

と、苦行者が語ったので、ブー・ナンダナ王は承諾して、一緒にシャーリカー山に赴いた。其処に到着すると、まずヴィタスター河で水浴をして、ヴィナーヤカ神を礼拝し、シャーリカー女神を祀って、四方の悪霊を鎮める祭典などを行った。すると、シヴァ神の恩寵を授けられた偉大な苦行者は、掟の通りに芥子の実を撒じて入口の扉を開いた。王は苦行者と弟子たちとともに這入り、パーターラへ通ずる道を五日五夜のあいだ歩いていった。そして、六日目に、一行はパーターラを流れるガンガー河を渡って、白銀の地上に茂る神々しい森を見た。其処には、輝かしい樟、栴檀、アガルなどの樹が生い繁り、大きな満開の黄金の蓮華の香がたちこめていた。その真中に、シヴァ神の神殿が見えた。神殿は壮大で、宝玉の階段で飾られ、黄金の壁、宝石づくりの柱が燦然と輝き、神殿の本殿は大きな水晶づくりで、月光の凝縮した玉の煉瓦を積み重ねたかのようであった。ブー・ナンダナ王と弟子衆が感嘆して神殿を見ていると、神秘な威力を持つ苦行者が彼等に言った。

「これはシヴァ神がパーターラに住まわれるときの宮殿である。三界に於いて讃歌でたたえられるかの神を尊崇されよ。」

そこで、彼等はすべてパーターラのガンガー河で水浴をし、パーターラに生える数々の花でシヴァ神を祀った。神を祀って暫く休憩したのち、彼等は再び歩いて、一本の素晴らしい蒲桃（ふともも）の樹のところに来た。見ると、その果実が熟して、地上に落ちていた。それを見て、苦行者が彼等に

「お前たちはこの実を食べてはならぬ。若し食べると、お前たちが享けたものを害うであろう。」

と語った。その言葉を聞いたにもかかわらず、ひとりの弟子が空腹に堪えかねて、その実を食べた。すると、食べた瞬間に、その男は樹木のように動かなくなってしまった。そこで、それを見た他の弟子たちは怖れおののき、その実を食べたいという慾もなくなった。苦行者はブー・ナン

ダナ王と弟子たちを連れて、一クローシャほど進むと、宝玉づくりの門のある高い黄金の城壁のそそり立っているのを見た。その門の両側には、銅の肢体をもった二頭の牡羊が立っていて、門を這入ろうとする者を拒んで、角で突きかかりそうであった。それを見て、苦行者が即坐に魔法をかけた棒で牡羊の頭に一撃を加えると、二頭の牡羊は稲妻にうたれたかのように何処かに姿を消してしまった。こうして、苦行者と弟子たちと王とがその門を這入ると、黄金と宝石で造られた神々しい宮殿が見えた。その入口という入口には、銅の矛を手に持ち、歯で下唇を噛みしめた怖ろしい姿の門番が立っていた。そこで、みんなの者は一本の樹木の下に腰を下ろしたが、苦行者は悪事を避けるために坐禅した。この坐禅の威力により、怖ろしい姿の門番たちはすべてどの門からも逃げてゆき、見えなくなった。

すると、その瞬間に、それらの門からダイトヤ族の娘たちの侍女である神々しい装飾品と衣裳をつけた美女の群が出てきた。美女たちはひとりひとり近づいてきて、それぞれの主人の名でかの苦行者をふくめて一行の者を別々に招じ入れた。そのとき、賢明な苦行者は他の人々に

「宮殿の中に這入ったときには、お前たちは各々の愛人の言葉を拒んではならぬぞ。」

と語って、数名の美女と一緒に壮麗な宮殿に這入り、ひとりのダイトヤ族の乙女を得て、望んでいた歓楽を尽した。そして、他の者たちもそれぞれに他の美女に案内されて神々しい御殿に這入り、ダイトヤ族の乙女と愛慾の娯しみをたのしんだ。

ブー・ナンダナ王も、そのとき、ひとりの侍女に恭々しく侍づかれて、外側が宝玉で造られた

宮殿に案内された。宮殿の壁にはめこんだ宝玉に、美しい侍女たちの姿がうつって、周囲の壁には生きた絵が描かれているかのようであった。宮殿は滑らかな緑玉の敷地に建てられ、天空を駆る戦車と競うて天蓋に達するばかりに聳えていた。中では酔いしれた美女が遊びたわむれ、カーマ*の神の媚態が溢れんばかりであった。朝日の光のみに堪えうる可憐な花でさえも、美女たちの身体の優雅さには比ぶべくもなかった。神々しい音楽のひびき渡る宮殿に這入ると、王は嘗て夢の中で見た美しいアスラ族の乙女を見た。乙女の美しさは陽の光のないパーターラに輝きわたり、創造主が宝玉などの光り輝くものを創造したことも無駄にするほどであった。王は筆舌につくしがたいほどに美しい姿の乙女を見て歓喜の涙を流したが、他の女を見て汚れた両眼を清めるかのようであった。あたかも蜂の群がむらがり飛んで白い水蓮（クムディニー）の花を讃えるかのように、侍女たちの歌声に讃えられた乙女クムディニーも、王を見て、この上ない歓喜に心を躍らせた。そして、座から立上って、王の両手をとり、

「あなたに色々と御苦労をさせました。」

と言いながら、恭々しく王を座につかせた。水浴をして暫らく疲れをいやした王に衣服や装飾品をつけさせると、アスラ*族の美少女は酒を飲むために王を庭に案内した。そして、酒の満ち溢れた池の岸に王とならんで腰をおろしたが、岸に生えた樹木に垂り下げられた死体から血と脂が池に滴りおちていた。美少女は血と脂の滴りおちた池の酒を盃にみたして、王に飲むように勧めたが、王はこの胸の悪くなるような飲物を受けようとしなかった。

「この妾どもの飲物をお飲みにならなければ、あなたは幸せになれないでしょう。」
と、丁寧に勧める乙女に王は言った。
「どのようなことが起ろうとも、わたしは決してこの飲みものを飲まぬ。」
と言うと、乙女は王の頭に盃の酒をかけて、何処かへ行ってしまった。すると、王は眼も見えず、耳も聴こえなくなった。侍女たちは王をとらえて、別の池の水中に投げこんだ。そして、投げこまれた瞬間に、王は嘗て居たクラマ・サラス霊場の苦行林の中に自分がいることに気がついた。すると、あたかも彼に微笑みかけているかのような、雪を頂いた山が見えた。だまされて、失望し、驚き、なさけなくなった王は、
「ダイトヤ族の娘の庭園と、クラマ・サラス霊場の山とは、何という相違だろう。ああ、何という奇蹟だろう。あれは幻なのか、それとも心の迷いだろうか。苦行者の警しめの言葉を聴いていたにも拘わらず、あの娘の言葉に従わなかったがために、わたくしはこのような目に遭ったことだけは確かだ。それに、あの飲物は飲んでもよかったのだ。あの娘はわたくしをためしたに過ぎない。わたしの頭上に落ちてきた液体で、天上の香わしい匂がした。とすれば、いずれにせよ、運のない人々にとっては、たとい非常な困難を堪えしのんでも、運命の神が見むいてくれないために、なんの報いもえられないことは、明々白々だ。」
と考えた。このように、王が考えこんでいると、アスラの娘に香水を振りかけられた王の身体から馥郁たる香を放ったのに惹かれて、蜂が飛んできて王を刺した。王は

「ああ、わたしの苦労は望んでいた果報をもたらすことなく、望みもしない仕末となった。」
と思い、心の乱れた王は自殺を決心した。
すると、そのとき、たまたまひとりの若い仙人が通りかかり、このように狂気のようになった王を見た。慈悲の心の深い彼は急いで王に近づき、蜂を追払って、一部始終を聴いて、王に語った。
「王よ、この肉体のあるかぎり、苦悩の絶えることが、どうしてありましょう。だから、賢者は迷うことなく人生の目的を常に追求すべきであります。だから、あなたは今後十二年間ここで苦行をしなさい。そうすれば、あなたは恋人と再会し、そしてその結果として、永遠につづく解脱を達成するでしょう。それに、あなたの身体は既に芳香を帯びているではありませんか。この黒鹿の毛皮をあなたに差上げますから、これを受取ってください。この毛皮には呪文がこめられていますから、あなたがこれを着ていれば、蜂になやまされることはありません。」
と語って、聖仙は王に鹿皮と呪文とを贈って、立去った。王は
「その通り、しよう。」
と、堅く決心して、其処にとどまって苦行をつづけた。
王が十二年間を其処で過ごし、苦行によってシヴァ神を宥慰すると、ダイトヤ族の娘クムディニーが自分から王のところに近づいてきた。こうして、ブー・ナンダナ王は愛人と一緒にパーターラに行き、永く楽しみを享けるとともに、解脱を得たのである。

このように、心に迷妄のない人は堅固に堪え忍ぶときは、たとい遠くに離れたとしても、必ず自分の国土を得るものである。シュリー・ダルシャナよ、君はすぐれた吉相をそなえており、未来の繁栄が運命づけられているにもかかわらず、どうして悄気こんだまま食物をとらずにいて、自分を顧みないのか。」

と、夜半に仲間のムカラカが賭博場で話しかけますと、断食を続けていたシュリー・ダルシャナが彼に言いました。

「君の言う通りだ。だが、博奕のために、このようなみじめな有様となった現在、良家に生れたわたしは恥ずかしくて、どうして町なかに出て行くことができよう。だから、もし君が引きとめないなら、ねえ君、わたしは今夜すぐに何処か他国へ行って、食事をとることにしよう。」

すると、ムカラカはこの言葉を聴いて同意し、食物を持ってきてシュリー・ダルシャナに与えましたので、彼は喜んでそれを食べました。シュリー・ダルシャナは食物を食べますと、友情から随行してきたムカラカをつれて、他国に出発しました。

シュリー・ダルシャナが夜間に途を歩いていますと、彼が生れるとすぐに彼を婆羅門のデーヴァ・ダルシャナの家に委ねた両親のアッタハーサとサウダーミニーの二人のヤクシャが、たまたま空を飛んでいて彼を見つけました。彼が賭博の悪行によって無一物になり、他国へ赴く途中であることを知って、両親は愛情から姿を見せないで、天上から彼に言いました。

「おお、シュリー・ダルシャナよ、お前の母親、デーヴァ・ダルシャナの妻が、自分の家の地中に、宝玉などを埋めている。行って、それを掘り出し、ためらうことなくマーラヴァ*に行くがよい。そこには、シュリーセーナという勢威赫々たる王がいる。この王も若いとき賭博のために悲惨な境遇にひどく苦しんだために、賭博をする人々のため大きな素晴らしい救護所を建てている。賭博に負けた人々が其処に住み、望むがままの食物を得ているのだ。されば、愛児よ、其処に行け。そうすれば、お前に必ずよいことがあるだろう。」

と、天から聞こえてくる声を聴いて、シュリー・ダルシャナは友人をつれて自分の家に帰り、地面の孔の中に埋められている装飾品を見つけました。彼は天の神の恵みと思い、それを持って、喜び勇んでマーラヴァへ向って出発しました。

そして、その夜と翌日、友人と一緒にかなりの道程を行き、夕方にバフサスヤという村に着きました。歩き疲れました彼は、村からあまり遠くないところにある、清らかな水を湛えた池の岸に、友人と一緒に腰をおろしました。其処で足を洗い、また水を飲んで暫く休んでいますと、容姿ならぶものもないほどに美しい、ひとりの少女が水を汲みにやって来ました。彼女の四肢は青蓮の花に似た色を帯び、カーマ(愛の神)がシヴァ神に焼かれたときに、あとに一人のこされて、その煙のために燻らされたラティ(カーマ神の妃)さながらでした。彼女は自分をじっと見つめているシュリー・ダルシャナを愛情をこめたまなざしで見ますと、二人のところに近づいてきて、言いました。

「尊い方々さま、あなたがたはどうして此処にいらっしゃって、死地に飛びこむようなことを

なさるのですか。なにも御存知ないとはいいながら、蛾のように、燃えさかる火の中に落ちこまれたのですか。」

と、乙女が語るのを聴いて、驚いたムカラカは

「あなたは誰ですか。あなたのおっしゃったことは、どういうことですか。話してください。」

と、少女にたずねました。すると、少女が言いました。

「かいつまんで、お話しましょう。どうか、聴いてください。

スゴーシャという大きな有名な拝領地があります。そこにヴェーダに通暁した大学者のパドマ・ガルバという婆羅門が住んでいます。この人に、シャシカラーという、名家の出の妻がありまして、二人の間にムカラカという息子と、パドミシュターという娘の妾と、二人の子供があります。兄のムカラカは幼いときでさえ賭博の悪行に溺れまして、家を出て、何処か他国へ行ってしまいました。その悲みのために母が死にますと、父は二つの不幸を悲んで家長の地位を捨て、妾だけをつれて息子を探しに諸方を歩き廻り、たまたま此の村に着きました。すると、此の村に、ヴァス・ブーティという名前だけ婆羅門の大盗賊の首領がいました。父と妾が此処に着きますと、盗賊の首領は手下の者と一緒に妾の父を殺し、身体につけていた黄金を奪ってしまいました。妾も家に連行され、スブーティという息子の嫁にする手筈をととのえました。ところが、幸いにも、妾の前世の福徳によって、この息子は隊商を襲撃に何処かへ行って、まだ帰ってきません。ですから、あの盗賊があなたがたを見ましたら、必ずあなたがたの為にならぬことをします。うまく

逃げられるように、なにか手段を講じなければなりません。」

と、少女が言いますと、ムカラカはこの少女が自分の妹であることを知り、直ぐ彼女の頸に抱きつき、泣きながら言いました。

「ああ、パドミシュターよ、わたしがお前の兄ムカラカだ。父上を殺したのも、母上を殺したのも、みなわたしだ。妹よ、わたしはなんという運の悪い男だ。もう駄目だ。」

と、ムカラカが言うのを聴いて、パドミシュターもまた彼が自分の兄であることを知りましたが、同情が忽ちにあらゆる苦悩で包まれてしまうかのようでした。

そこで、シュリー・ダルシャナは両親のことを嘆き悲んでいる兄妹を慰め、その場合にふさわしい言葉を語りました。

「いま、徒に嘆き悲んでいる時ではない。急いで、わが身を護らねばならぬ。たとい財貨を捨てても、盗賊に対する対策をしなければならない。」

と、このようにシュリー・ダルシャナが言いますと、兄妹は心を抑えて悲しみを捨てましたので、三人は互いに各々のすべきことを相談しました。

そこで、シュリー・ダルシャナは以前に断食をしましたために痩せていましたので、病気を装い、池の岸に横になって寝ころがっていました。ムカラカはその側で両足をかかえて泣いていました。そして、パドミシュターは急いで盗賊の首領のところへ帰りました。

「旅行者が来ましたが、病気で池の岸に寝ています。もう一人、その召使もおります。」

と、パドミシュターが言いますと、その言葉を聴いて、盗賊の首領は手下の者たちに見に行かせました。彼等は池の岸に行って、前に述べた通りの二人を見て、ムカラカに
「旦那、あんたは何故そんなにひどく泣いてるんですかい。」
と尋ねました。その言葉を聴くと、ムカラカは悲痛な顔をして、
「この婆羅門はわたしの兄なのですが、わたしを連れて霊場巡拝に出かけ、到頭病気となりましたので、ゆっくりと歩きながら、今日やっとのことで此処に着きました。着くやいなや動けなくなり、わたくしに申しました。『さあ、弟よ、立上って、急いでダルバ草の褥を作っておくれ。そして、誰か有徳の婆羅門をこの村から連れてきておくれ。その方にわたしの所持金をみな差上げたい。わたしは、今晩中、生きていることはできない。』と、他国で、しかも太陽が沈んだ後に、兄から言われますと、わたしはどうしてよいか判らず、悲しくてたまらず、泣いているよりほかに、しかたがなかったのです。ですから、兄が生きている間に、誰か婆羅門を連れてきてください。そして、わたしたちの所持金のすべてを兄が自分の手で贈って、善業を積めるようにしてください。と申しますのは、兄は今晩中生きることはできませんし、わたしも兄が死ねば、その悲しみを堪えきれませんゆえ、明日になれば火の中に這入ります。ですから、わたしたちのお願いすることをわたしたちのために、どうかしてください。情深いあなたがたと、今日ここでお会いしたのも、なにかの御縁でしょうから。」
と、ムカラカの言うのを聴いて、盗人たちは二人が可哀相になり、帰ってきますと、聴いた通り

に首領のヴァス・ブーティに語って、さらに
「ですから、大将が自身で行って、あの婆羅門から贈物として財宝を受取ってください。普通なら、持主を殺して、有難く頂戴するんですがね。」
と言いました。すると、ヴァス・ブーティが言いました。
「そりゃ、何というざまだ。持主を殺さないで、財貨を頂くことは、われわれの掟にそむくものだ。財貨を奪っておいて殺さなかったら、必ずわれわれに危害を加えるぞ。」
と、悪党が言いますと、手下の者たちが答えました。
「何か妙なことでもあるんですかい。殺して奪うのと、死のうとしている奴から貰うのと、何処が違うんですかね。明日になって、あの二人の婆羅門が生きていたら、殺してしまおうじゃありませんか。さもないと、婆羅門殺しの汚名を下らぬことで着ますぜ。」
と、手下の者が言うのを聴いて、首領のヴァス・ブーティは同意しました。そして、その夜、贈物を受取るために、シュリー・ダルシャナのところへ行きました。シュリー・ダルシャナは母の装飾品を一部分をかくして、途切れ途切れの声で喘ぎながら、残りをヴァス・ブーティに与えました。そこで、目的を達した盗賊の首領は手下の者たちを連れて家に帰りました。
さて、盗賊どもが睡りこんでしまうと、パドミシュターが夜闇にまぎれてシュリー・ダルシャナとムカラカのところへやって来ました。そこで、三人はすばやく相談をして、盗賊たちが平素あまり通らぬ道を通って、再びマーラヴァへ向って其処を出発しました。その夜の間に、かなり

の距離を行き、大きな森林に着きました。茨が生い繁り、中を歩きまわる黒鹿はあたかも森の眼がぎらつくように、ひからびた蔓草は森の恐怖を物語り、樹皮の裂ける鋭い音は恐怖の叫び声に似て、虎や獅子などの野獣の咆吼に怖れおののいているかのようでした。三人が森の中を通っていきますと、彼等が終日歩き続けた疲労を見て同情したかのように、陽は光をやわらげ、やがて沈んでいきました。そこで、疲れ果てて空腹となった彼等は樹の根もとに腰をおろしました。

日が暮れて間もなく、彼等は遠くの方に火のように光るものを見つけました。

「このあたりに村があるのだろうか。行って、しらべてみよう。」

と言って、シュリー・ダルシャナは光を頼りに行きました。其処に着いて見ると、それは宝玉づくりの宮殿で、その輝きが火のような光を放っているのでした。見ると、その宮殿の中には、神々しい姿のヤクシニー(女性の夜叉)が大勢のヤクシャに侍づかれていましたが、ヤクシャたちの足は逆向きで、彼等の眼は眇(すがめ)でした。ヤクシャたちが其処に種々の飲食物を持ってくるのを見て、シュリー・ダルシャナは勇気を出して近づき、ヤクシニーに賓客に対する分けまえを乞いました。ヤクシニーは彼の勇気を悦び、彼自身を含めて三人が満腹するだけの食物と水とを、彼の望むままに与えさせました。そして、ヤクシニーの命令で食物と水とを肩にかついだヤクシャをつれて、シュリー・ダルシャナはパドミシュターと友人のムカラカのいるところへ帰ってきました。ヤクシャをかえして、彼はパドミシュターたちと一緒に種々の素晴らしい食物を食べ、冷たい清らかな水を飲みました。

そこで、満足したムカラカは、シュリー・ダルシャナの勇気と生命力に富んでいることから、彼が神の権化であると考え、自身の繁栄を冀って、彼に言いました。

「とにかく、君は誰か神の権化だ。わたしの妹パドミシュターはこの世に並ぶもののない美女だが、妹を君に委ねることを約束するよ。」

と、ムカラカの言うのを聴いて、非常に悦んだシュリー・ダルシャナが友人に言いました。

「君の言葉ほど嬉しいものはない。以前から望んでいたことだ。目的を達した暁に、掟に従って、君の妹を娶ることにしよう。」

と言って、彼と兄妹の三人は互に悦びあって、その夜を森の中で過しました。

その翌日、彼等三人は其処から出発して、遂にマーラヴァのシュリーセーナ王の都城に着きました。其処に着くと、彼等は疲れていましたので、直ちに年老いた婆羅門婦人の家に這入り、休息しました。そして、彼等は自分たちの名を告げ、身の上などを話しましたが、婆羅門の老婦人が心配そうにしているのを見て、たずねますと、老婦人が言いました。

「妾は王さまに仕えていました婆羅門サトヤ・ヴラタの妻で、ヤシャスヴァティーと申し、血統正しい家に生れました。夫が死にました後、子供のない妾の生活のために、情深い王さまは夫の俸祿の四分の一を妾に下賜されました。ところが、王さまは福徳高く、すべての人々を満足させられるほどに寛容な方でありますのに、労咳に罹られ、医者も癒すことができません。呪文や医薬に通暁された方々の手当も、王さまの病気には効験がありません。でも、ある呪師の方が王

さまの前で『もし余の手助けをなしうるような勇士があるならば、余はヴェーターラを宥慰して、その力を借り、この病気を癒すであろう。』と、誓盟をされたのです。そこで、太鼓を叩いて、そのことが公示されましたが、そのような勇士の方は現れません。遂に、王さまは大臣たちに『賭博者のために余の建てた有名な大救護所に這入ろうとする博奕打ちで、勇気のある者を探せ。大体、博奕打ちは向うみずで、妻子眷族を捨てて金もなく、恐怖心もなく、苦行者のように樹の根もとなどに寝るものだ。』と、命令されました。このように王さまから命令されました大臣たちは、救護所の監督にその通りに伝えましたので、救護所の監督はいま救護所に這入ろうとする勇士を探しているのです。あなたがたは博奕打ちです。シュリー・ダルシャナよ、もしあなたがその仕事をすることができるのでしたら、妾がいまあなたをその救護所へ御案内いたしましょう。王さまはあなたを歓待なさるでしょう。そして、あなたは妾に恩恵を授けられることになります。妾にとっては、本当に、苦悩は妾の生命とりだからです。」

老婦人がこのように語りますと、シュリー・ダルシャナは彼女に言いました。

「よろしい、わたしはその仕事をすることができる。すぐ救護所へ連れて行ってください。」

この言葉を聴きますと、老婦人はパドミシュターとムカラカを連れ、シュリー・ダルシャナを救護所に案内し、そこの監督に

「この方は博奕打ちの婆羅門で、他国から来られたのですが、勇士で、王さまのために呪師の方のお仕事を手助けすることができます。」

と言いました。監督はこの言葉を聴くと、シュリー・ダルシャナに質問して老婦人の語ったことを確認すると、彼を叮重にもてなし、直ちに王のところに案内しました。監督に紹介されてシュリー・ダルシャナが王を見ますと、王は新月のように痩せて青白い顔色をしていました。シュリーセーナ王は面前に伺候して平伏しているシュリー・ダルシャナの態度の平静なのを見て、彼の容貌にも満足して、彼に対する信頼の心を生じて言いました。

「そなたの努力で、余の病気は必ず癒えるであろう。余の身体がそれを語ってくれる。そなたを見ただけで、余の苦しみは軽くなったからだ。されば、呪師の手助けをしてもらいたい。」

と、王から言われましたとき、シュリー・ダルシャナは

「陛下、お安い御用です。」

と言いました。

そこで、王は呪師を召して、

「この勇士が汝の仲間だ。汝が曾て語ったことをしてくれ。」

と言いました。王の言葉を聴くと、呪師がシュリー・ダルシャナに言いました。

「君、ヴェーターラを召請するのを助けてくれるなら、その達成のために、今日、黒分の十四日の夕方に、此の土地の墓地にいるわたしのところへ来てもらいたい。」

と言って、呪術を行う苦行者は立去りました。シュリー・ダルシャナも、王に挨拶をして、救護所に帰りました。

其処でシュリー・ダルシャナはパドミシュターおよびムカラカと一緒に食事をした後、夜になると剣を持って、墓場に行きました。其処には数多の鬼霊が溢れて人影なく、無気味で、豺の鳴声がきこえて、真暗闇でしたが、骨が堆みあげられているところどころは光っていました。勇気あるシュリー・ダルシャナはこの不吉なものどもの棲処を歩きまわって、その真中に呪師がいるのを見つけました。呪師は身体全体に灰を塗り、頭髪でつくった聖索をかけ、死者の衣服でつくった帽子をかぶり、黒い衣を着ていました。シュリー・ダルシャナは近づき、自分の来たことを知らせ、腰に紐を締めて、

「どうすべきか、言え。」

と尋ねました。

「此処から西に半クローシャだけ行け。其処に、屍体を焼く火の熱のために葉の焼けたシンシャパー樹がある。その根元に屍体がある。それを、害わずに此処に運べ。」

と、彼の来たのを悦こんだ呪師が言った。そこで、シュリー・ダルシャナは

「よろしい。」

と言って、急いで其処へ行ってみると、屍体を誰か他の者が運んでいこうとしているのを見た。彼は走りよって、その男の肩から屍体を奪おうとしたが、その男は離しませんので、

「離せ、わたしが焼こうとしている友人を、何処へ持って行こうとするのだ。」

と、シュリー・ダルシャナが言いました。すると、その男もシュリー・ダルシャナに

「俺は離さない。これはわたしの友人なんだ。お前はこの屍体の何なんだ。」

と言いました。このように、二人がお互いの肩から奪い合っていますと、ヴェーターラの憑いた屍体が怖ろしい叫び声をあげました。その叫び声におびえて、相手の男は心臓が破裂して死んでしまいました。シュリー・ダルシャナは屍体を担ぐやいなや立去りました。すると、相手の男は死んだのでしたが、ヴェーターラが憑いたために、立上ってシュリー・ダルシャナを引きとめようとし、

「とまれ、わたしの友人を肩に担いで行ってはならん。」

と言いました。そこで、シュリー・ダルシャナはヴェーターラが憑いたと考えて、

「この屍体がお前の友人だという証拠が何かあるのか。これはわたしの友人だ。」

と言いました。その言葉を聴くと、別の男の屍体が

「その屍体が俺たちに決着をつけてくれるよ。」

と言いました。そこで、シュリー・ダルシャナが言いました。

「この屍体がわれわれのどちらが自分の友人であるかを言うというのか。」

すると、彼の肩に担がれていた、ヴェーターラの憑いた屍体が言いました。

「腹の減っている俺に食物をくれる者が俺の友人だと言うよ。その男は好きなところへ俺を連れて行け。」

この言葉を聴くと、ヴェーターラの憑いた第二の屍体が

「俺には食物はない。その男が持っているなら、お前にくれるよ。」
と言いました。シュリー・ダルシャナはこの言葉を聴くと、
「わたしが食物をやろう。」
と言って、自分の肩に担いだ屍体のヴェーターラに食物をやるために、第二の屍体を剣で切り倒そうとしますと、ヴェーターラの憑いた第二の屍体は、自分の神通力で姿を消してしまいました。
すると、肩に担いだ屍体にいるヴェーターラが
「お前が約束した食物を、いま、俺にくれ。」
と言いました。シュリー・ダルシャナは他の肉を手に入れてヴェーターラに食べさすことができないので、そこで自分の肉を剣でそぎとって与えました。このことに悦んだヴェーターラが、そのとき彼に言いました。
「わたしはお前に満足だ。えらい男だ、お前の身体はもと通りにしてあげよう。さあ、わたしを連れて行け。お前の仕事は成功するだろう。あの呪師の苦行者は臆病者だから、身を滅ぼすだろうよ。」
と、ヴェーターラが言いますと、シュリーダルシャナの身体はもと通りになりましたので、彼は屍体を運んで行って、呪師に渡しました。呪師は喜んで受取ると、その屍体に血の滴る華蔓を飾り血を塗りつけて、隅には血の這入った壺を置き、人間の脂肪を燃やした燈火をともした、粉末にした人間の骨で描いた大きなマンダラ(円形の祭壇)の真中に、ヴェーターラの憑いた屍体を仰向けに

置きました。そして、屍体の胸の上にのって、人間の骨でつくった柄杓と匙を持って、その口に溶けた乳酪を注ぎはじめた。すると、その途端に、ヴェーターラの憑いたその屍体の口から火が噴き出したので、呪師は怖れて飛び上って逃げだしました。呪師が驚きあわてて柄杓と匙とを放り出して行きましたので、ヴェーターラはその後を追いかけ、口を大きく開いて呪師を鵜呑みにしてしまいました。シュリー・ダルシャナはそれを見て、剣を抜いてヴェーターラに襲いかかりますと、ヴェーターラが彼に言いました。
「シュリー・ダルシャナよ、わたしはそなたのこのような勇猛さに満足じゃ。わたしの口にある芥子の実を受取るがよい。この実を王の頭に結びつけ王の手に置くならば、王が患っている労咳はたちどころに癒るであろう。そして、そなたは間もなく全世界の王者となるであろう。」
と、ヴェーターラの言葉を聴いて、シュリー・ダルシャナがヴェーターラに言いました。
「呪師を連れないで、わたしはどうして帰ることができよう。王は必ずや『この男が自分だけで利益を得ようとして、呪師を殺したのだ。』と言うであろう。」
このようにシュリー・ダルシャナが言いますと、ヴェーターラが彼に言いました。
「そなたが身の潔白を明かす確かな証拠を言ってあげよう。この屍体の腹を剖いて、わたしが呑んで死んだ呪師が腹の中にあるのを見せるがよい。」
と言って、ヴェーターラは彼に芥子の実を与えると、何処かに行ってしまいました。屍体からヴェーターラが出るやいなや、屍体は地上に倒れました。

そこで、シュリー・ダルシャナは芥子の実を取って、帰ってきて、その夜は仲間のいる救護所で過しました。その翌日、王のところに行って、夜間の出来事を話し、大臣たちを案内して屍体の腹から呪師を出して見せました。こうして、シュリー・ダルシャナが芥子の実を王の頭と手に結びつけますと、王の病気は拭うように癒えました。

かくて、満悦したシュリーセーナ王は子がありませんでしたので、生命の恩人シュリー・ダルシャナを養子としました。そして、すぐに、この勇士に灌頂して太子の位に即けました。まこと善業の種は肥沃な土地に蒔かれたときには大きな果実をもたらすのであります。かくて、幸運なシュリー・ダルシャナはラクシュミー（繁栄と幸福の女神）のようなパドミシュターと結婚し、彼女と一緒に、また彼女の兄ムカラカと一緒に幸福に暮し、大地を支配しました。

あるとき、ウペーンドラ・シャクティという大商人が池の岸で宝玉づくりのガネーシャ神の像を獲て、それを持参してシュリー・ダルシャナに献上しました。太子はその像が非常に貴いことを見て、深い信仰心から綺羅をつくして祀り、その祠堂の維持のために千ヵ村を寄進し、またその祭典の行列を定めましたが、その祭日には国中の人がのこらず参集しました。踊りや歌や楽器の演奏がガネーシャを祀るために行われますと、満悦されたガネーシャがガナ（シヴァ神の眷属）たちにこのように命令しました。

「余の恩寵により、シュリー・ダルシャナは地上に於ける覇王となるであろう。さて、西方の大海にハンサ・ドヴィーパ*という有名な島がある。其処に、アナンゴーダヤという王があり、この王にアナンガ・マンジャリーという美わしい娘がある。この娘は余を深く信仰し、余を祀っては『尊者よ、一切の大地の主である方を妾の夫にお授けください。』と懇請している。されば、余はこの王女をシュリー・ダルシャナと結婚させよう。このようにすれば、この両人に余を信仰した果報を授けることになろう。その故に、そなたたちはシュリー・ダルシャナを其処に連れて行き、策略を用いて互いに会わせ、そして彼を急いで連れ去れ。時が経てば、二人は正しく結ばれるであろう。だが、今は結ばれないのだ。それは未来のことで、そのように定められているのだ。そして、このようにすれば、余の像を得て太子に献上した商人ウペーンドラ・シャクティにも、いくらか恩恵を授けることになろう。」

このようにガネーシャから命令されたガナたちは、その夜の間に、睡っているシュリー・ダルシャナを神通力でハンサ・ドヴィーパに連れていきました。そして、アナンガ・マンジャリーの宮殿に連れこみ、睡っている王女の寝床に這入らせました。シュリー・ダルシャナは忽ちに眼が覚め、あたりを見廻しますと、宝玉の燈火がかがやき、天蓋などには測り知れないほどに高価な宝石が鏤められて輝きわたり、床にはラージャヴァルタ石*が敷きつめられて黒く光る華麗な宮殿の中に、純白の絹の褥に被われた寝床の中にいました。傍には、甘露の流れの美しさを輝かし放ち、またたく星の群に飾られた空にかかって白い雲につつまれた秋の月輪の権化のように、見る眼を娯しませるアナンガ・マンジャリーが睡っていました。シュリー・ダルシャナはアナンガ・マンジャリーを見て、忽ちに悦こび、愕き、心迷うて、瞬間考えました。

「わたしは何処で寝て、何処で眼を覚ましたか。この美女は誰なのか。これは確かに夢だ。だが、夢でも、このような夢こそ素晴らしい。ともかく、この女（ひと）を起して、事情（わけ）を知ろう。」
と考えて、アナンガ・マンジャリーの肩をやさしく手でゆすりました。シュリー・ダルシャナの手が触れましたので、姫は月の光を浴びたクムドヴァティーの花*のようにすぐ眼を覚まし、花のまわりを飛びまわる蜂のように眼をきょろつかせました。シュリー・ダルシャナを見て、姫はその瞬間に
「この神々しい容姿の方は誰だろうか。立入りがたいこの部屋に這入ってきたのであるから、きっとこの方は神さまに相違ない。」
と考えました。そして、起き上って、当惑しながらも叮重に
「あなたはどなたですか。何故に、またどのようにして、此処にお這入りになったか、お話しください。」
と尋ねました。そこで、シュリー・ダルシャナが自分の身上を話した後、姫に尋ねますと、姫も自分の土地、名前、家柄を彼に話しました。二人は互いに心を惹かれ、夢の中での出来事と思わないで、お互いに確めあう証拠として、装飾品を交しあいました。
こうして、シュリー・ダルシャナ太子とアナンガ・マンジャリー姫の二人はガーンダルヴァ式の結婚*を望みましたが、そのときガナたちは二人の気を失わせて睡らせてしまいました。シュリー・ダルシャナが寝入ってしまうと、ガナたちは彼を彼の宮殿へ連れ帰りました。そして、シュ

リー・ダルシャナが自分の宮殿で眼を覚ましますと、婦人の装身具をつけているのに気づき、ひとりで考えました。
「ああ、これは一体どうしたことか。ハンサ・ドヴィーパの王女は何処にいるのだ。あの壮麗な宮殿は何処にあるのだ。そして、いま自分は再び此処にいる。あれは決して夢ではない。この通り、あの王女の装身具をわたしはつけている。これは必ずや運命の神のいたずらに相違ない。」
など考えていますと、妃のパドミシュターが眼を覚まして、たずねました。何事も疑わぬ妃が彼を宥めましたので、彼はその夜を過しました。
その翌朝、シュリー・ダルシャナはアナンガ・マンジャリーの名を刻んだ装身具をつけて、シュリーセーナ王の前に伺候し、すべてを話しました。王は彼を悦ばせようとして、ハンサ・ドヴィーパを探すために太鼓を鳴らせて公示しましたけれども、誰もハンサ・ドヴィーパへの道を知りませんでした。こうして、シュリー・ダルシャナはアナンガ・マンジャリーと別れていると恋慕の焔にさいなまれて、あらゆる快楽を遠ざけ、彼女の装身具を眺めては食事を摂らず、彼女の蓮華の顔を見られないままに睡ることもできなくなりました。
さて、話かわって、ハンサ・ドヴィーパでは、王女アナンガ・マンジャリーは朝になって音楽の調べで眼が覚めました。夜中の出来事を思い出し、自分の身体にシュリー・ダルシャナの装身具をつけているのを見て、恋い焦れて考えこんでしまいました。そのとき、突然に、王女の父アナンゴーダヤ王が部屋に這入ってきて、男の装身具をつけている姫を見ました。姫を非常に愛し

ていた王は、あわてて自分の衣裳を着こんで、羞じらってうつむきこんだ姫を抱きかかえて尋ねました。

「姫よ、この男物の装身具はどうしたのかね。どうして、そのように羞ずかしがっているのかね。お話し。わたしを信頼して、さあ。おまえはわたしの生命なんだから。」

などと、愛情のこもった言葉を父からかけられて、姫も羞ずかしさがなくなり、一部始終をぽつぽつと父に打明けました。

そこで、父王はそれが人間の力を超えた妖術のようなものと考え、どうしてよいか判りませんでした。王は自国の生れで非常に敬愛しているブラフマ・ソーマという、偉大な戒行をまもっている呪師に尋ねました。この苦行者は深い瞑想をして、その真相を知り、王に言いました。

「真相は、ガナたちがマーラヴァからシュリー・ダルシャナ王を連れてきたのです。ガネーシャ神があなたの令嬢とかの王の二人に好意を持っておられます。そして、かの神の恩寵によって、かの王は全国土の覇王となるでしょう。このような王はあなたの令嬢にふさわしい夫です。」

と、天賦の智者から言われた王は、呪師に恭々しく敬礼して言いました。

「マーラヴァとハンサ・ドヴィーパとは、聖者よ、非常に離れておりますし、途中の道は困難です。しかし、事は遅延を許しません。あなたの常に変ることのない好意こそ、わたしの頼りです。」

と、王が懇請しますと、信者に対して親切な苦行者は

「わたしがそれを成就させせましょう。」

と言って、直ちに姿を消し、忽ちにしてマーラヴァのシュリーセーナ王の都城に着きました。その地に着きますと、苦行者は直ちにシュリー・ダルシャナの建立した神殿に這入り、ガネーシャ神を拝んで、

「星辰の環を頭に飾り、スメール山*の頂に似た、吉祥の姿なる汝に帰命したてまつる。三界の大高楼を支える柱に似て、踊りの楽しみに真すぐに延ばして、あたかも雲を払うかのごとき、汝の鼻に礼す。障碍を除去する神よ、一切の成就の宝庫にして、甕のごとき大きな腹をもち、身体に蛇の飾りをつけたる汝を崇めたてまつる。」

と、苦行者がガネーシャを讃嘆していますと、そのときガネーシャ神の像を持参した商人の長ウペーンドラ・シャクティの息子のマヘーンドラ・シャクティなる者が、長い間の激しい狂気のために自制心がなくなり、諸方を放浪して、たまたまその神殿に這入ってきました。そして、苦行者を摑まえようとして突進してきましたので、苦行者は手でその男を打擲しました。商人の息子は呪力を具えた苦行者の手で打たれましたので、狂気が癒え、もと通りに正気にかえりました。すると、息子は裸でいましたので羞ずかしくなり、神殿をとび出すと、手で陰部を覆うて自分の家に帰っていきました。そのとき、父親のウペーンドラ・シャクティは人々からそのことを聞き知り、悦こび出迎えて、自宅に連れ帰りました。そして、息子に沐浴をさせ、衣服などを着せると、息子を連れて苦行者ブラフマ・ソーマのところへ行きました。息子の救主に沢山の財貨を差

出しましたが、神のような呪力をもつ苦行者はそれを受取りませんでした。

話かわって、シュリーセーナ王はそのことを聴き、尊敬の念をおこし、シュリー・ダルシャナを伴うて親しく苦行者のところへ出かけ、平伏して讃嘆の言葉を述べ、懇請した。

「あなたがこの国においでくださったお蔭で、かの商人の息子は正気を取戻し、恩恵を頂きました。わたくしの息子シュリー・ダルシャナも元気を取戻すよう、わたくしにも恩恵を頂きたく存じます。」

と、王から懇願されますと、苦行者は笑いながら言いました。

「王よ、この盗人のために、どうしてわたしが望みをかなえてやる必要があろうか。この人は王女アナンガ・マンジャリーの心と装身具とを盗んで、ハンサ・ドヴィーパから此処に帰ってきたではないか。だが、あなたの言葉通りに、わたしはしよう。」

と言って、シュリー・ダルシャナを腕にかかえて姿を消してしまいました。苦行者はハンサ・ドヴィーパに着くと、アナンゴーダヤ王の宮殿に、王女の装身具をつけたシュリー・ダルシャナを連れこみました。悦こんだ王はまず苦行者の足許に平伏して尊敬した後、一緒に到着したシュリー・ダルシャナを歓迎しました。そして、王は日を選んで無数の宝玉の環をつけた大地のような王女アナンガ・マンジャリーを、シュリー・ダルシャナに嫁がせました。その後、かの苦行者の威力により、娘婿を娘と一緒に再びマーラヴァに帰らせました。シュリー・ダルシャナが其処に着くと、シュリーセーナ王は悦んで彼を迎え、彼は二人の愛妻と一緒に幸福に暮しました。

時を経て、シュリーセーナ王が崩ずると、勇士が王位に即き、全世界を征服しました。シュリー・ダルシャナが覇王の位に即きますと、パドミシュターとアナンガ・マンジャリーの二人の妃に、それぞれ王子が生れました。そして、王はパドミシュターの生んだ王子にパドマ・セーナ、アナンガ・マンジャリーの生んだ王子にアナンガ・セーナの名をつけて、二人の王子を養育しました。

暫く経って、シュリー・ダルシャナ王が二人の妃と一緒に宮殿にいますと、外で婆羅門の泣く声を聞きました。そこで、王は婆羅門を呼び入れて、嘆き悲しむ理由を尋ねました。すると、婆羅門は心の動揺もあらわに王にこのように言いました。

「焔を上げて燃えさかる(dīptaśikha-)火は、洪笑(aṭṭahāsa)する暗黒の雲によって、光輝の条(jyotirlekhā)と煙の条(dhūmalekhā)ともども消された。」

と言って、その瞬間に婆羅門は姿を消しました。

「あの婆羅門は何と言ったのだ。それに、あの男は何処に行ったのだ。」

と、王が驚いて言っている間に、涙を流して泣いていました二人の王妃が突然に死んでしまいました。雷にうたれたかのように突如として起った凶事を見て、王は

「ああ、ああ、これは何としたことだ。」

と嘆き悲しみ、地上に倒れました。王の側近の者たちは倒れた王を抱きかかえて、別の部屋に連れていきました。そして、ムカラカは二人の王妃を運んで、火葬の儀式を行いました。意識を回

復した王は長い間二人の王妃を悼んだ後、葬式を懇に行いました。涙の暴風雨の荒れ狂う暗い一年の後に、王は王国を二分して二人の息子に与えました。こうして、遁世の心の生じたシュリー・ダルシャナ王は都城を出て、随行してきた家臣たちをかえして、森に赴いて苦行を行いました。

王は樹の実や根を食べて其処に住んでいましたが、諸方を歩きまわって、一本のヌヤグローダ樹*の傍に来ました。王が樹の傍に来ると、そのとき突然に手に樹の実と根をもった二人の神々しい姿の婦人が、樹の幹から出てきました。

「王さま、こちらへおいでください。わたくしどものこの根と実をお受けになってください。」

と言うのを聴いて、王は

「あなたがたはどなたですか、わたしにおっしゃってください。」

と言いました。すると、神々しい二人の婦人が王に

「では、わたくしどもの家に、おいでくださいませ。わたくしどもの家に参りまして、あなたに訳をお話し申上げましょう。」

と答えました。シュリー・ダルシャナ王はこの言葉を聴いて、

「そうしましょう。」

と言って、二人の婦人と一緒に樹の幹の中に這入りますと、黄金づくりの壮麗な都城が見えました。王はその都城で天上の果実を食べて疲れをいやしました。すると、二人の婦人が語りました。

「王さま、お聴きください。むかし、プラティシュターナ*に、カマラ・ガルバという婆羅門がいまして、二人の妻があり、ひとりをパティヤー、他のひとりをアバラーと申しました。年月を経て、老齢となりました夫と二人の妻の三人は、互いに敬愛していましたので、遂に一緒に火に這入りました。そのとき、彼等は火中からシヴァ神に

『神よ、未来永劫、幾世にわたって、わたくしども三人は夫と妻であらしめたまえ。』

と懇請しました。かくて、カマラ・ガルバは劇しい苦行の力によりヤクシャの胎に生れ、ヤクシャのプラディープタークシャの息子でアッタハーサの弟のディープタ・シカという者に生れ変りました。その妻のパティヤーとアバラーも、ドゥーマ・ケートゥというヤクシャ王の娘として生れ変り、ひとりをジョーティル・レーカー、他のひとりをドゥーマ・レーカーと申しました。

時を経て、二人の姉妹が年頃になりますと、二人は苦行によって夫を得るために森に行き、苦行をしてシヴァ神を満足させました。神さまは満悦され、姿を現わされて、教えられました。

『未来永劫、いずれの生に於いても、夫と妻でありたいと願って、そなたたちが前生に一緒に火に這入った男は、ヤクシャとなってアッタハーサの弟ディープタ・シカに生れ変ったが、主人の呪詛により人間界に行き、シュリー・ダルシャナという名で再び生れている。されば、そなたたちも人間界へ行け。そして、その男の妻となれ。呪詛の終るとき、そなたたちは再びヤクシャとなり、夫と妻となるであろう。』

と、ガウリーの夫(シヴァ神)の言葉により、二人のヤクシャの娘はパドミシュターとアナンガ・マンジャリーとなって、地上に生れました。二人の娘はシュリー・ダルシャナの妻となりましたが、暫

くしてたまたま婆羅門の姿をしたアッタハーサが来まして、策略を用いて二重の意味をもった言葉で名前を述べて前世を憶い出させました。そのため、二人は肉身を捨てて、ヤクシニーとなりました。あなたがヤクシャのディープタ・シカで、わたしたち二人はあなたの妻であったことを、思い出してください。』

と、二人の婦人から言われて、シュリー・ダルシャナは自分の前生を憶い出しました。そして、直ちにヤクシャのディープタ・シカとなり、再び二人の妻と正しく一緒になることができました。

　ヴィチトラ・カタよ、わたしがそのヤクシャで、あの二人の女がわたしの愛妻のジョーティル・レーカーとドゥーマ・レーカーであることを、お知りください。わたしのごとく、神の家柄に生れた者でさえ、このように幸と不幸がめぐり合います。まして、人間にとっては、それをどうして避けることができましょう。あなたは間もなく、愛児よ、御主人のムリガーンカダッタと再会しますから、失望しないでください。それに、わたしはあなたをもてなすために此処にいるのです。此処はわたしの昔の住処だからです。どうか此処にいてください。必ずあなたの望みをかなえてあげます。それから、わたしは自分の住居のあるカイラーサへ帰ります。』

と、かのヤクシャは自分の身上をわたくしに話して、暫くの間わたくしをもてなしてくれました。そして、今夜、王子さまが此処に着かれたことを知りますと、この親切な人は睡っているわたくしを連れて来て、睡っていられるあなたがたの真中に置いたのです。こうして、あなたがたはわ

たくしを見つけられ、わたくしもまた、あなたがたを見つけたのです。以上が、あなたがたとお別れした後の、王子さま、わたくしの身上話でございます。」

と、侍臣のヴィチトラ・カタから、まことその名にふさわしい話*を聴き、ムリガーンカダッタ王子は非常に喜こびました。その他の侍臣たちも、同じでありました。

　その夜は森の草の上で過し、竜の呪詛によって離散したまま未だに会えない仲間を探しながら、シャシャーンカヴァティー姫を得たいと決心した王子は、仲間の者たちと一緒に、ウッジャイニーに向って出発しました。

六

　かくて、ムリガーンカダッタ王子はシュルタ・ディと四人の侍臣をつれて、ヴィンディヤ山中を旅行をつづけていますと、とある森に到着しました。其処には、枝もたわわに実の生った美しい樹木が茂って、心持よい木蔭がありましたし、清らかに澄んだ冷水を湛えた池がありました。王子は侍臣たちと一緒に池で水浴をし、いろいろの果実を食べていますと、蔓草の蔭の何処からか話声のような声が聞こえてきました。王子は行って蔓草の茂みを掻きわけて見ると、大きな象がいて、鼻で水をかけてやったり果実を食べさせたり耳であおいでやったりして、旅に疲れはてた盲目の男を介抱していました。そして、

「少しはよくなりましたか。」

と、親切な人間のするように、優しく、はっきりと聞きとれる声で、繰返し言葉をかけていました。王子はそれを見て驚き、仲間の者たちに言いました。

「御覧よ、森に棲む象が人間さながらの行為をしているではないか。これは誰かがある理由で、こうして此処にいるのに相違ない。それに、あの盲目の男はプラチャンダ・シャクティにそっくりではないか。だが、あの男は盲目だ。とにかく、様子を見ていよう。」

と、仲間の者たちに語って、ムリガーンカダッタは人目につかぬように蔓草の中にかくれて、耳を聳てていました。

暫くすると、盲目の男は元気を回復しましたので、象がたずねました。

「あなたはどなたですか。どうして此処へ盲目のまま来られたのですか。」

すると、盲目の男が大象に語りました。

「アヨーディヤーの都城に、アマラダッタという王がいます。この王に、ムリガーンカダッタという勝れた徳を具えられた王子があります。わたしはこの王子の侍臣で、プラチャンダ・シャクティといいまして、由緒正しい家柄の生れです。王子はある理由で父王から故国を追われ、十人の侍臣をつれて、シャシャーンカヴァティー姫を得るために、ウッジャイニーに向って出発しましたが、われわれは竜の呪詛のため森の中で離ればなれになってしまいました。わたしはその呪詛のために盲目となり、諸方をさまよい歩き、果実や木の根を食べ、水を飲んで、此処に来ました。谷に身を投ずるかなどして死ぬことを望んではいますものの、運命の神はその機会を恵んでくださらず、苦悩に堪えてゆかねばなりません。しかし、今日は、あなたのお蔭で、ひもじい苦しみもおさまり、おまけに見えぬ目さえ少しは見えるような気がします。あなたは本当に神さまです。」

と、盲目の男が言ったとき、ムリガーンカダッタは彼がプラチャンダ・シャクティであることを知りましたが、嬉しいやら悲しいやらで、侍臣たちに言いました。

「あれこそプラチャンダ・シャクティだ。哀れな姿になったものだ。だが、今、いそいで名乗りでるのはよくない。恐らく、あの象が盲の目を癒してくれるであろう。もしわれわれを見れば、象は逃げてしまうであろう。だから、われわれは今すこし隠れていて、様子を見ていよう。」

と語って、王子は従者と一緒に耳を傾けていました。すると、プラチャンダ・シャクティが象に尋ねました。

「親切な方よ、あなたがどなたか、一部始終をお話しくださいませんか。どうして象になられたのですか。象にしては兇暴さがなく、優しく話されます。」

と、プラチャンダ・シャクティの言うのを聴いて、大象は溜息をつき、彼に言いました。

「わたしの身上話を聴いてください。

〔象にされたビーマ・バタ王の物語〕

ラーダー*の都に、ウグラ・バタという王が妃マノーラマーと楽しく暮していました。あるとき、この王のところへ、外国からラーサカという芸人が来ました。そして、芝居を王に見せました。その中で、ヴィシュヌ神が美女に姿をかえてダイトヤたちから甘露を奪う場面がありました。そのとき、この美女の役を演じましたのがラースヤヴァティーというラーサカの娘でしたが、王はこの美しい容姿の娘を見ますと、ヴィシュヌ神がダーナヴァたちを惑わして奪いとった甘露さながらでしたので、王は愛慾の虜になってしまいました。芝居が終ると、王は父親に多額の金を与えて、ラースヤヴァティーを自分の後宮につれてこさせました。こうして、王は踊子ラースヤヴァティーと結婚をし、彼女の顔ばかりを眺めてくらしていました。

あるとき、王はヤジュフ・スヴァーミンという司祭官の助けを得て、子を得るために願望祭を行いました。司祭官は前もってマノーラマー妃から買収されていましたので、第一夫人である彼女に呪文で清められた供物の大部分を食べさせ、残りを第二夫人のラースヤヴァティーに与えました。こうして、二人の夫人とも妊娠しました。そして、時期がきまして、王妃マノーラマーは福徳の相を具えた男の子を生みました。すると、そのとき、

「この生れた子はビーマ・バタという有名な王となろう。」

と、はっきりした声が天上から聞こえました。

その翌日、第二夫人のラースヤヴァティーも男の子を生みました。父王はこの子にサマラ・バタという名をつけました。二人の王子は数々の聖式をうけて成長し、若者となりました。しかし、長子のビーマ・バタが種々の徳性で弟にまさっていましたので、その争いがお互いの間に敵意を増さしめたのでした。

あるとき、二人は角力をとって遊んでいましたが、弟のサマラ・バタは負けた悔しさにビーマ・バタの頸を擲りつけました。ビーマ・バタは怒って、両腕でサマラ・バタを抱えあげ、地面に音を立てるほど激しく叩きつけました。激しく叩きつけられたサマラ・バタは鼻や口などから血を出しましたので、彼の侍臣が抱き上げて、母親の許へつれていきました。その姿を見て、何が起ったかを知りました母親は、頭を愛児の頭におしつけて、激しく泣きました。そのとき、王が這入ってきまして、その有様を見て、心が乱れました。

「これは、どうしたのだ。」

と、王が尋ねますと、ラースヤヴァティーが言いました。

「ビーマ・バタが妾の息子をこのような目に遭わせたのです。いつも、この通りなのですが、王さま、妾はそのことをあなたに申上げませんでした。でも、このような目に遭いますと、妾にはよく判るのですが、このような息子がおられるかぎり、あなたさまさえ、どうして平穏でいられましょう。御決心なさいませ。」

このように、寵愛している夫人から言われましたウグラ・バタ王は怒って、ビーマ・バタを宮廷外に追い出しました。そして、ビーマ・バタの所領を没収し、その財産を弟のものとし、百人の武士を任命してサマラ・バタを守護させました。

母后マノーラマーはビーマ・バタ王子を呼び、

「お父上は踊子に夢中になられて、そなたを追放された。だから、そなたは妾の父のいるパータリプトラへ行きなさい。其処へ行けば、お祖父さんは男の子がないから、そなたに国を譲ってくれましょう。そなたが此処におれば、サマラ・バタは有力な敵となって、そなたを殺すでしょう。」

と言いました。母后の言葉を聴いて、ビーマ・バタは

「母上、わたしはクシャトリヤです。わたしは臆病者のように恐怖のために自分の故国を捨てたくはありません。母上、御安心ください。卑劣な男が、どうしてわたしを殺すことができましょう。」

と言いましたが、母后に説得されて、母后から黄金と宝玉の筐を貰い受け、剣を手にして愛馬に跨って出発しました。王子の盟友の若い婆羅門シャンカダッタも、黄金と宝石を持ち、馬に乗って王子の後に随って行きました。

ビーマ・バタ王子は婆羅門シャンカダッタを連れてかなり長い道程を進み、真夜中に道の途中にある大きな草原に着きました。二人がその中を休まず通り抜けていますと、馬に踏みつけられ

る葦の音を聞いて、牡牝の獅子が仔をつれて咆えながら飛び出してきて、馬の腹部に爪をたてました。二人の勇士は即坐に剣を抜いて獅子を殺しましたが、馬は死んでしまいました。ビーマ・バタ王子は落胆しましたが、シャンカダッタに励まされ、元気を奮いおこして一緒に歩き出しました。

二人は葦で足に傷を受け、ゆっくりと歩いて森を通り抜けました。夜の闇を攘って世界の光である太陽が登りますと、道傍の池には蓮華が咲き、そのまわりには蜂が飛びまわっていましたが、蓮華の花は大きく開いた顔を互いに見合わせて、王子を見て、

「獅子などが沢山いるこの森を無事通り抜けられて、本当によかった。」

と、しゃべりあっているかのようでした。

漸くにして、シャンカダッタをつれたビーマ・バタ王子は、ガンジス河の砂岸に着きました。そして、王子は、シヴァ神の頭にある住居から滴り落ちた月の甘露のように冷く甘い水を飲み、水浴をして、元気を回復しました。そして、途中で出会った猟師から買ってきた鹿の肉を、シャンカダッタが焙って、二人で食べました。

ガンジス河には水が溢れ、あたかも手を差しあげて渡るのを思いとどまらせようとしているかのように、波が立ちさわぎ、とても渡れそうもありませんでした。王子は河岸をあるきまわってみました。何とかして渡る手段がないものかと考えましたが、その方法もありませんでしたので、ビーマ・バタは剣と装飾品とを頭にくくりつけて、シャンカダッタと一緒にガンジス河を泳いで

渡ろうと、河に飛びこみました。川の中ほどで、シャンカダッタは流れのために遠くに流されてしまいましたが、王子も波に押し流されて、漸くのことで向う岸にたどりつきました。岸に着いても、シャンカダッタの姿が見えないので、探しながら岸に沿うて歩いている間に、日が暮れました。王子は悲しみと失望のために一度はガンジス河に身を投げて死のうと覚悟しましたが、シャンカダッタの激励を思い出し、友人を探しだそうと気をとり直しました。そして、あたかも蓮華の花が太陽を待ち望むように、友人との再会を待ち焦れて、その夜を焦燥の中に過しましたが、翌朝になるとビーマ・バタは友人を探しに出発しました。

シャンカダッタを探して諸方をひとりで歩きまわっている中に、ビーマ・バタ王子は遂にラータの国*に着きました。其処では、人々は華かな生活をしていて、諸々の芸術の中心であり、罪悪の巣窟という汚名を持っていませんでした。王子は城内を歩いて寺院や住宅を見て歩いていて、賭博場に着きました。其処に這入ってみると、一群の博奕うちがいました。彼等は襤褸布を腰に巻いているだけでしたが、四肢は均斉がとれて形がすぐれ、逞しくて、以前の勝れた生活と鍛錬のあとをしのばせていましたし、彼等は身分を匿してはいますが曾て権勢の地位にあったこと、金を儲けるために今の境遇に身を墜していることを暴露していました。王子は

「装飾品をつけたこの男は、よい鴨だ。」

と狙っている男たちと色々としゃべった後、博奕を始めました。そして、王子は博奕に勝って、

連中が他の人々をだまして奪いとった財宝をすべて巻き上げてしまいました。金を博奕でとられて、博奕うちたちが自分の家に帰ろうとしますと、ビーマ・バタ王子は戸口に立ちはだかって、彼等をおしとどめて言いました。

「何処へ行こうというのだ。この金を受取れ。俺はこの金がいらないのだ。わたしはこの金を友人にやるべきだ。君たちはわたしの友人ではないのか。君たちのような望ましい友人は、何処で得られようか。」

と、彼が言いますと、連中は羞じて受取ろうとしませんでした。すると、連中の一人のアクシャ・クシャパナカという男が言いました。

「博奕でとった金は返さないのが習慣だ。だが、この人がわれわれの友人になって、自分の意志にわれわれにやろうと言っているのに、それを受取らないのも、いかがなものであろう。」

その言葉を聴くと、連中が言いました。

「もしこの方が永久にわれわれと友情を結んでくれるなら、そのようにしよう。それが当然だ。」

と言いましたので、ビーマ・バタは彼等が勇士であると思い、彼等と友情を結び、博奕で奪った金を返してやりました。彼等から懇請されて、王子は彼等の家族と一緒に、庭園で彼等が持参した食物や酒などを飲み食いして楽しみました。そして、アクシャ・クシャパナカたちから尋ねられるままに、王子は家系や名や身上話をし、彼等にも尋ねました。彼等もまた自分の来歴を話し

ましたので、王子は彼等が金のために身分を匿して博奕をしている勇士であることを知り、彼等と種々の話をしました。こうして、楽しくその日を送り、東方がその顔を昇る月で飾ったとき、ビーマ・バタ王子はアクシャ・クシャパナカたち六人と一緒に自分の家へ帰りました。

王子が彼等と一緒に其処に滞在していますうちに、雨季がやってきました。雨雲は雷鳴を轟かせて、友人との再会を告げ報らせるかのようでした。そのとき、其の土地にあるヴィパーシャーという激流が海からの逆流で溢れ、大洪水を起して岸から氾濫したが、高潮がひくと、再び海に流れこむかのように見えました。すると、そのとき、高潮が大きな魚を運んできましたが、余り重かったため川岸に打上げられたまま動かなくなりました。人々は魚が打上げられたのを見ると、手に手に種々の武器を持って走り寄り、その大魚の腹を剖きました。すると腹の中から、ひとりの若い婆羅門が生きたまま出てきましたので*、其処にいました人々はこの奇蹟を見て歓声をあげました。その声を聴いて、ビーマ・バタが其処へ行ってみると、友人のシャンカダッタが魚の中から出たところでした。王子は走りよって抱きしめ、さめざめと涙を流しましたが、その涙はシャンカダッタが魚の腹中にいて染みこんだ悪臭を洗い流すかのようでありました。シャンカダッタも不幸から脱出しえて、友人に再会し、歓喜から歓喜へ行ったのでした。こうして、不思議に思ったビーマ・バタが尋ねるままに、シャンカダッタは自分の話をかいつまんで話しました。

「あのとき、ガンジス河の波に流されて、わたしはあなたから見えなくなりました。すると、突然、わたしは非常に大きな魚に呑まれてしまいました。その腹の広い隙間に這入りこみました

わたしは、腹が減ると小刀で魚の肉を切りとって食べながら、そこに長い間いました。今日、創造主がどうしたことか魚を此処に運んできて、岸に打ちあげたのです。この人たちが魚を殺して、わたしを魚の腹から引きずり出してくれたのです。そして、わたしは太陽を再び見ることができましたし、あなたに再会することができました。四方はわたしのために輝いています。これだけのことしか、わたしは知らないのです。」

と、シャンカダッタが言いますと、其処にいあわせた人々は驚いて、このように言いました。

「ガンジス河で魚に呑まれ、その魚が海を泳ぎ渡り、海からヴィパーシャー河に這入りこむ。どうして死ななかったのか。生きたまま魚の腹中から出てくる。ああ、まこと運命は奇蹟を行い、その動きは測り知りがたい。」

などと、アクシャ・クシャパナカたちと話しあい、ビーマ・バタはシャンカダッタを自分の家に連れ帰りました。そして、魚の腹から同じ身体のまま生れ変ってきたかのような友人に、水浴をさせ衣服を着換えさせるなど、いろいろと歓待しました。

こうして、ビーマ・バタがシャンカダッタとその土地に住んでいますと、竜王ヴァースキのお祭がやってきました。その見物に王子は友人たちを連れて、大勢の人々の集っている竜王の祠堂へ行きました。祠堂には多くの華蔓がかけられていて、あたかも蛇の群の支えるパーターラ界に似ていました。王子の一行は其処に祀られるヴァースキの像にお参りをした後、祠堂の南側に行きますと、其処に大きな池がありました。池には紅蓮が一面に咲き、蛇の頸にかけられた宝玉の

輝きの塊のようでしたし、池の周囲に咲いている青蓮は蛇毒の火から生じた煙の塊さながらでした。池に張りだした樹木は、風に花を吹き散らされたのを喜こび、頭を下げてお辞儀をしているかのようでした。

とかくする間に、其処へラータ王チャンドラーディトヤとクヴァラヤヴァティー妃の間に生れたハンサーヴァリーという美しい王女が水浴をしに来ました。王女がビーマ・バタを見たとき、王女の流し目はビーマ・バタの心臓を刺し貫き、彼を茫然とさせました。この世の美の盗人である彼もまた、彼女の流し目を通って彼女の心臓の中に這入りこみ、平静な気持を失わせました。王女は信頼している怜悧な侍女を秘かにビーマ・バタの友人たちのところへ行かせ、彼の名と住処とを聴かせました。水浴を終りますと、王女は侍女たちをつれて自分の宮殿に帰ってゆきましたが、度々振りかえってはビーマ・バタを見つめていました。ビーマ・バタも友人たちと一緒に自宅に帰りましたが、愛する乙女が投げかけた網に足をとられたかのように、足をよろめかせていました。

王女ハンサーヴァリーは宮殿に還りますと、すぐに嚮の侍女を使者として、ビーマ・バタの待ち望んでいる伝言をつたえさせました。侍女はビーマ・バタのところに来て、秘かに

「王子さま、王女ハンサーヴァリーさまがあなたさまに『あなたを恋しく焦れる妾が愛情の波にさらわれているのを御覧になったら、早く助けてくださいませ。岸に立って知らぬ顔をしていらっしゃるのは、ひどうございます。』と、懇願されていられます。」

と、侍女の口から愛する王女の甘露の言葉を聴きますと、ビーマ・バタは自分の生命も救われたと喜こび、使者の侍女に言いました。

「わたしは流れの中にいます。岸の上に立ってはいません。愛するあなたに、どうしてそれが判らないのですか。でも、今は救命袋を得ました故、悦んであなたのお言葉通りにしましょう。今夜、夜半に後宮に参って、お目にかかりましょう。呪文で姿を隠して這入って行きます故、誰にも見つかりません。」

と、侍女に言いますと、侍女は喜んで帰り、ハンサーヴァリーにその旨を告げましたので、王女はビーマ・バタとの逢瀬を待ち焦れていました。

ビーマ・バタは夜になると華やかに装飾品をつけて、呪文を唱えてわが身をかくし、王女が予め人を遠ざけていた後宮に這入りこみました。黒檀の芳香がみなぎり、五種の色の花を撒き散らして、カーマ(愛の神)の遊園さながらに恋の愉悦をかきたてる部屋の中に、愛する王女は蔓草に咲く花さながらに神々しい芳香を放っていました。ビーマ・バタは再び呪文を唱えて、王女の前に姿を現わしました。

王女が彼の姿を見た途端に、悦こびに身体をふるわせましたので、装身具が微かな音をたて、あたかも楽器の音にあわせて踊ったかのようでありました。そして、乙女の羞恥の心から顔をうつむけて、心の裡をあからさまにあらわした自分の心に、どうすべきかを尋ねているかのようでありました。

「姫よ、心の裡をあかされながら、なぜ今羞じらっていらっしゃるのだ。ほんとうの気持をかくさずにいながら、なぜ身体をかくそうとなさるのだ。身体を悦こびにふるわせて、あなたの衣服の結び目はゆるんでいるではありませんか。」

などと、愛情のこもった言葉で王女をいたわり、王女の羞じらいの気持をなくさせて、ビーマ・バタはガーンダルヴァ式の結婚でハンサーヴァリーを妻にしました。そして、蓮華の花にたわむれる蜂さながらに戯むれて彼は王女とその夜を過し、後髪をひかれながらも

「夜になれば、また来ます。」

と言って、自分の家に帰りました。

その翌朝、王女附の侍従が王女の部屋に這入ってきまして、王女が逢曳した痕をのこしているのを見つけました。頭髪のはしは乱れ、身体には爪や歯の痕がのこり、*恋の神の箭矢に射られて手傷を負うたかのようでありました。侍従は父王の許に行き、その旨を報告しますと、王はひそかに夜警を配置させて見張らせました。ビーマ・バタは友人たちと一日を楽しく過し、夜になると再び王女の部屋に忍びこみました。彼が呪文の威力で姿を見られずに王女の部屋に這入ったことを知り、夜警たちはビーマ・バタが神通力をもっていると考え、王女の宮殿から出て行って、王にそのことを報告しました。王は彼等に

「厳しく警護された王女の部屋に見つけられることなく這入るとは、人間ではあるまい。どのような次第か、事情を知りたいから、その人を此処へ案内せよ。そして、その人に『あなたは何故に、わたしの娘をくれと、公然とわたしにおっしゃらないのですか。何故に秘密になさるのですか。あなたのような徳性ある方は、わが娘にふさわしい求婚者ではありませんか。』と、余の言葉をつたえよ。」

と、命令をしました。警護の人たちは行って、戸の外に立って、ビーマ・バタに王の言葉をつたえました。ビーマ・バタ王子は王に知られたことを知り、戸の内側から図々しく

「王にわたしの言葉を告げよ。明朝、政庁に出むいて、本当のことを申上げる、とな。今は真夜中ではないか。」

と答えました。この言葉を聴いて、警護の人たちが王にその旨を報告しますと、王は黙ってしまいました。

さて、その翌日になると、ビーマ・バタは一旦友人たちのところへ帰り、七人の勇士たちと威儀を正して堂々とチャンドラーディトヤ王の政庁に出むきました。王はビーマ・バタが威風堂々として決然たる態度をし、しかも容姿端麗なのを見て、叮重に出迎えたのち、王子と自分と同じ玉座につかせました。すると、王子に扈従してきた婆羅門シャンカダッタが王に言いました。

「陛下、この方はラーダーの王ウグラ・バタの王子で、ビーマ・バタと仰せられる方であります。王子は身に具えられた不可思議な呪文の威力により何人も抵抗しえない勇気の持主であります。」

という言葉を聴いて、夜中の出来事を思い出し、娘にふさわしい人と知って、

「余はまことに幸いである。」

と言い、その申出を承諾しました。そして、王は結婚式のために豪奢な準備をととのえ、王女ハンサーヴァリーをビーマ・バタに多額の財宝をつけて嫁がせました。こうして、ビーマ・バタは王から数多くの馬や象や村落を贈られ、ハンサーヴァリーと幸運の女神と一緒に、楽しく暮しました。月日が経って、舅のチャンドラーディトヤ王が老年となり、しかも男の子がありませんでしたので、王はラータの王国をビーマ・バタに譲り、森に隠棲しました。ビーマ・バタは王国を贈られると、シャンカダッタたち七人の友人に援けられて、王国を首尾よく美事に統治しました。

さて、幾日かが過ぎて、ビーマ・バタ王は密偵から、父のウグラ・バタ王がプラヤーガに行き、その地で死んだこと、死の床で踊子の息子である弟サマラ・バタをラーダー国王に即かせたことを聴きました。王は父を悼み、葬送の儀式をおこなった後、サマラ・バタの許へ使者を派遣しました。

「踊子の息子よ、愚か者よ、わが父の獅子王座に、汝はふさわしからず。そは余のものなり、余は現在ラータ国王なるも、余こそラーダーの正統の後継者なり。汝は王位に即くべからず。」

と、書面にしたためて、僭王に伝えさせました。使者は急ぎラーダーに赴いて、身分を告げて政庁にいるサマラ・バタの許に手紙を届けました。サマラ・バタはビーマ・バタの署名と印のあるこのような手紙を読むやいなや、怒って

「嘗て父から国外に放逐された不行跡の者が、理由もなく王位を僭望するとは怪しからぬ。豺でも自分の棲処では獅子の真似もしようが、ひとたび獅子の視界に這入れば、豺に過ぎないのだ。」

などと、咆え叫び、この旨を手紙にしたためて、返答の使者をビーマ・バタの許に派遣しました。使者はラータに赴き、侍衛官に案内されて、ビーマ・バタに手紙を渡しました。ビーマ・バタはその手紙を読むと、大笑いをして僭王の返答の使者に

「おい、使いの者よ、還って踊子の息子に余の言葉を伝えよ、『戦備をととのえておけ、旬日を出でずして、余が行く。』とな。」

と語りました。このように使者に語って、使者をかえした後、ビーマ・バタ王は遠征の準備をととのえました。

天に昇る月輪のようなビーマ・バタ王が、小山さながらの象に乗りますと、大海のごとき大軍はざわめきたち、鬨の声をあげました。四方は援軍に馳せ参じた藩侯や武士の率いる軍勢に満ち溢れました。大地は大挙急進撃する馬や象に踏みしだかれ、震動して、その重さに堪えかねて裂けるのを怖れるかのように唸き声をたてました。このように、ビーマ・バタは大軍の捲きおこす塵埃のために天日の光をくらくしながら進撃して、ラーダーの近くに到着しました。

さて、サマラ・バタはというと、ビーマ・バタの大軍が来襲したことを知ると大いに怒って、みずから武装をととのえ、大軍を率いてその先頭に立って進撃しました。そして、東西の大海のごとき大軍が衝突し、大勢の勇士たちが生命を隕しました。刀剣の激しい衝突から生じた火花は、

憤怒した死の神の歯ぎしりから生じたかのように、空を蔽うたのでした。長い睫毛にも似た鋭い穂先の槍がとび、勇士を見つける天女のまなざしさながらであった。戦場はあたかも塵埃を天蓋とし、軍勢の鬨の声を音楽とし、踊子は象の鼻という舞台のように見えました。

弓の名手ビーマ・バタは、シャンカダッタ、アクシャ・クシャパナカ、チャンダ・ブジャンガなどの白兵戦に長じた、猛象さながらの大勇士たちに援けられて、敵の軍勢を潰滅させました。味方の軍勢が敗走すると、サマラ・バタは憤怒の形相もすさまじく、戦車に乗って戦場を駈けめぐり、戦争の大海を攪拌しはじめました。すると、ビーマ・バタは象に乗ってサマラ・バタを襲い、矢でサマラ・バタの弓を折り、また彼の戦車をひく四頭の馬を射殺しました。サマラ・バタは戦車を捨て、走り寄って、ビーマ・バタの乗る大象の顳顬を槍で突きました。大象も槍で突かれて地上に倒れました。こうして、ビーマ・バタとサマラ・バタの二人は乗御するものがなくなり、徒歩で戦わねばならなくなりました。憤激した二人の王は楯と剣とで一騎打ちで戦いました。ビーマ・バタは呪文の力で自分の姿をかくしてサマラ・バタを殺すことができましたが、彼は正々堂々と戦うために、そのようなことをして敵を殺すことはしませんでした。勝れた剣士でありましたビーマ・バタはサマラ・バタと剣で闘い、この踊子の息子を打負かして、その頭を刎ねました。

サマラ・バタが殺され、その軍隊も完全に滅ぼされて、戦争は終り、ビーマ・バタは吟遊詩人や楽隊の讃美する中を、友人たちを連れてラーダーの都城に入城しました。敵を殺して長期間の

留守から故国に帰ってきました彼は、彼を待ち焦れていた母后を悦こばせました。市民の歓迎を受けてビーマ・バタは父王の獅子座に坐し、彼の徳を敬慕する父の大臣たちから夥しい贈物を受けました。そして、彼は祝典を催し、臣下の者すべてに恩賞を与えました。吉日を選んで、シャンカダッタにラータ王国を与え、その土地生れの兵士に扈従させて、ラータ国へシャンカダッタを赴かせました。そして、アクシャ・クシャパナカたちには村落と財宝とを与え、彼等の輔弼をえて、ラータ王の王女ハンサーヴァリーとともにラーダーにとどまって父祖伝来の王国を統治しました。

さて、あるとき、ウッタンカ仙が王に会おうとしてやって来ました。聖仙が門に到着したとき、侍衛官が王に告げたにもかかわらず、情欲と酒と権力とに自惚れて盲目となっていました王は、聖仙の来たことを耳にとめませんでした。聖仙は怒って、王に対し、

「酒のため盲となった者よ、汝は王位より追放されて、野象となれ。」

と、呪詛をかけました。王はその言葉を聴いて酔も醒め、聖仙の足許にひれ伏して、謙遜した言葉で聖仙の心を和げました。そこで、怒の解けた聖仙が王に語りました。

「王よ、そなたは象となるであろう。それは今となっては如何ともなしがたい。しかし、ムリガーンカダッタ王子の侍臣のプラチャンダ・シャクティなる者が、竜の呪詛のため盲人となって諸方を流浪し、そなたの許に客人として来たとき、その者をいたわって、自分の身上を話せば、そなたは呪詛から解放されるであろう。そのとき、そなたはガンダルヴァの身分を得るであろう。

また、客人も眼が開くであろう。」
と言うやいなや、ウッタンカ仙はそのまま立去り、ビーマ・バタは王位から追放されて象になったのです。

君、このわたしが象となったビーマ・バタです。そして、あなたがプラチャンダ・シャクティで、あなたにかけられた呪詛が終ったのです。」
と、このように語って、ビーマ・バタは象の姿を捨て、忽ちに天上の威光をもつガンダルヴァ*となりました。プラチャンダ・シャクティもその瞬間に眼があき、眼の饗宴を享け、ガンダルヴァに感謝のまなざしを注ぎました。話かわって、蔓草の茂みに他の侍臣たちとかくれていましたムリガーンカダッタは、二人の話を聴いて、はっきりとプラチャンダ・シャクティであることを知ると、好機をみはからって大急ぎで飛び出して行って、自分の侍臣のプラチャンダ・シャクティの頭に抱きつきました。プラチャンダ・シャクティも王子を見て、突然に降り出した甘露の雨に身体が濡れそぼったかのように感じ、王子の両足に縋りつきました。

こうして、ムリガーンカダッタ王子はプラチャンダ・シャクティと再会をして、元気をとりもどし、他の侍臣たちと一緒に、その森の中で、その日を過しました。

こうして、その夜を過したムリガーンカダッタ王子は、翌朝になると、プラチャンダ・シャクティをはじめ他の侍臣たちと一緒に、他の侍臣たちを探しながら、シャシャーンカヴァティー姫

のいるウッジャイニーに向って出発しました。

彼等の一行が道を歩いて行っていますと、侍臣のひとりのヴィクラマ・ケーシャリンが非常に醜い男の背に乗って、空中を飛んでくるのを見ました。王子が悦こんで他の侍臣たちに指ざして教えている間に、ヴィクラマ・ケーシャリンは空から王子の傍に下りてきました。そして、その男の背から急いで降りると、ムリガーンカダッタに近づいて、眼に涙を浮べて王子の両足に縋りつきました。悦こんだ王子は彼を抱きしめ、また他の侍臣たちとも互いに抱き合って再会を悦こびました。ヴィクラマ・ケーシャリンは
「わたしがおまえを心に念じたなら、直ぐ来てもらいたい。」
と言って、その男をかえしました。不思議に思ったムリガーンカダッタが尋ねますと、ヴィクラマ・ケーシャリンは森の中に腰をおろして、自分の身上話をしました。

「あのとき、竜の呪詛であなたがたから離ればなれになりましたわたしは、幾日もあなたを探して歩きまわりましたが、考えました。『とにかく、ウッジャイニーへ行こう。みんなは必ず其処へ行く筈になっているのだから。』と決心して、ウッジャイニーの都へ向って行きました。漸くにして、その都の近くのブラフマ・スタラという村に着きました。わたくしは池の岸の樹の根元に腰をおろしました。すると、そこへ、蛇に噛まれて苦しんでいる老婆羅門がやってきて、わたくしに

『伜よ、此処から立上っておくれ。わたしの行く道を塞がないでほしい。此処に大きな蛇がい

て、それに噛まれて、わたしはその傷に苦しんでいるのだ。そのため、わたしはこの大きな池に身を投げようとしているのだ。』

と言うのです。このように言いました年老いた婆羅門が可哀そうになり、自殺することを思いとどまらせ、わたくしは自分の毒物に関する知識で解毒の治療をしてやりました。

すると、その婆羅門は熱心に、しかも叮重に、わたくしに一部始終を尋ね、仔細を知りますと、親切にもわたくしに

『あなたはわたしの生命を救うてくださった。わたしが父から教わったヴェーターラ操縦の呪文を、どうか受取ってください。この呪文はあなたのように不思議な力をもつ方にふさわしいものであれ、わたしのような臆病者に何の役に立ちましょう。』

と申しました。しかし、わたくしは答えたのです。

『ムリガーンカダッタ王子と離ればなれになった現在、ヴェーターラが何の役にたとう。』

と申しますと、婆羅門は笑って、再びわたくしに言いました。

『ヴェーターラからあなたの欲するものは何でも得られることを知らないのですか。トリ・ヴィクラマセーナ王*はむかしヴェーターラの恩寵によって、ヴィディヤーダラの覇王となったではありませんか。だから、あなたも、わたしから呪文の伝授を受けて、ヴェーターラの大将に言うことをきかせ、ムリガーンカダッタと再会を遂げなさい。忍耐をする人に到達されないことは何もないのです。忍耐の心を挫けさせるときには、如何なることも失敗するでしょう。だから、わ

たしがお勧めするように、なさるがよい。蛇に噛まれて苦しんでいるわたしを助けてくださったあなたは、わたしの身内も同然だし、わたしは愛情からこう申上げるのだから。」

と言いましたので、わたくしは婆羅門から呪文と、それを唱えるときに行う祭式との伝授を受け、別れを告げてウッジャイニーへ行きました。其の地の焼屍場で、わたくしは夜中に死体を盗み出し、死体を洗うなど必要な祭式を行い、呪文を唱えてヴェーターラを呼び、正しく礼拝しました。そして、ヴェーターラを満足させるために、わたくしは人間の肉を与えました。ヴェーターラはそれを素早く食べ、なおも人間の肉を食べたがり、

『まだ腹一杯にならぬ。もっと持ってきてくれ。』

と、わたくしにねだりました。そして、待ってくれませんでしたので、わたくしはヴェーターラを悦こばせるために自分の肉を少しばかり切りとって与えますと、あの呪法の王も非常に喜こび、

『君、わたしは君のこの豪胆な勇気に感心した。だから、君の身体をもと通りにしてあげよう。それに、君の望んでいる褒美を何でもかなえてあげよう。』

と言いました。そこで、わたくしは直ぐさまヴェーターラに

『神よ、わたしを主人ムリガーンカダッタさまのいられるところへ連れていってくれ。そのほかに如何なる褒美もほしくはない。』

と答えました。すると、ヴェーターラ王は

『わたしの背に乗れ。おまえを直ぐ主人の傍へ連れていってやろう。』

と言いましたので、わたくしは一生懸命にその背に乗りました。すると、死体にのりうつりましたヴェーターラは、空を飛んでわたくしを運んでくれました。そして、此処まで連れてきて、あなたさまを路上に見つけますと、わたくしを天から下ろしてくれたのです。王子さま、わたくしはこのヴェーターラのお蔭で、あなたさまのお足許に来ることができました。竜の呪詛であなたとお別れして以来のわたくしの大冒険は、以上の通りであります。」

と、ヴィクラマ・ケーシャリンから聴きまして、ムリガーンカダッタ王子は、恋人と結婚するためにウッジャイニーへ赴く途中で、パーラーヴァタ竜の呪詛によって離ればなれになったにもかかわらず、侍臣たちの数人と再会することができましたし、自分の希望の成就にとって万事まことに縁起がよいと、非常に喜こびました

七

こうして、話が終りますと、悦こんだムリガーンカダッタ王子は道の真中から立上り、ヴィクラマ・ケーサリン、グナーカラ、ヴィマラ・ブッディ、ヴィチトラ・カタ、ビーマ・パラークラマ、プラチャンダ・シャクティと婆羅門シュルタ・ディを連れ、一行八名は竜の呪詛で離ればなれになった他の侍臣たちを探しながら、シャシャーンカヴァティー姫に会うために、再びウッジャイニーに向って出発しました。

その途中、樹が一本も生えていない沙漠に着きました。物凄い暑熱のために水はすべて干上り、砂は灼熱の太陽に熱せられていました。其処を通りながら、王子が侍臣たちに話しかけました。

「ごらんよ、この沙漠はなんと凄いところだろう。これを越えて行くのは容易ではない。道はないし、人の子ひとり見えず、憩うに木蔭さえない。そして、苦悩の火の焔のごとくに蜃気楼が立ちのぼり、ひからびた草は振り乱した髪のごとく、いばらは獅子や虎などを怖れて逆立った毛さながらだ、聞えるのは暑熱に苦しみ水をもとめて鳴く鹿の声のみだ。だから、われわれは急いで、この沙漠を通り越さねばならぬ。」

と言って、ムリガーンカダッタ王子は飢と喉の渇きに苦しんでいる侍臣たちと一緒に、急いで沙漠を通過しました。そして、沙漠を越えると、前方に清らかに澄んだ冷い水を湛えた大きな湖水が見えました。あたかも月が太陽の暑熱に溶けて滴り落ちた流れのように見えました。その湖水は広く、地平線のかなたまで拡がっており、三界の幸運の女神が自分の水鏡を見るために作った宝玉の鏡さながらでした。その水は爽かで、旨い味をしていましたし、蓮華の花が一面に咲いていました。

そして、この湖の西の岸に、王子と侍臣たちは一本の神々しい大樹を見ました。広くひろがった多くの枝は風に揺がされて腕のようでしたし、その梢にかかる雲の流れは踊っているシヴァ神のごとく、天に摩する頂はナンダナ園の美しさを見たい好奇心から高くそびえ立っているかのようでした。枝には天上の香りのする実が枝もたわむほどになっており、神が甘露の壷を結びつけ

た如意樹さながらでした。その若芽は指先のように揺れ動き、枝にむらがる小鳥の囀る声で、

「決して決してわたしに触るではない。」

と、繰り返して言っているかのようでありました。

ムリガーンカダッタ王子がこの樹を見上げていますと、飢と渇きに苦しんでいた侍臣たちはその樹に走りより、果実を食べようとして、よじ登った途端に、六人の者は忽ちに果実になってしまいました。ムリガーンカダッタは六人の侍臣が見えなくなったので驚きあわて、彼等の名を一人ずつ呼びました。彼等が答えず、彼等の姿が何処にも見えないので、王子は

「わたしは、もう駄目だ。」

と、絶望と悲しみにうちひしがれて叫び、気を失って地上に倒れてしまいました。そのとき、樹に登らなかった婆羅門シュルタ・ディだけが王子の側にいました。

婆羅門シュルタ・ディはすぐさま王子を慰めて、

「王子さま、あなたは智慧を会得されているにも拘わらず、どうして弱い心を起して、落胆なさるのですか。不幸の際に心を迷わさぬ者こそ、幸運を獲得するのです。竜の呪詛で離ればなれになった人々を、あなたは見出されたではありませんか。そのように、あの侍臣たちも、他の者たちも、あなたは必ず再び見出されましょうし、あなたがシャシャーンカヴァティー姫にお会いになるのも、間もなくです。」

と言いますと、王子が言いました。

「どうして、そんなことがありえよう。このことは、運命の神がわれわれを滅すために、しくまれたことだ。そうでないとしたら、どうしてヴェーターラが夜間にあらわれたり、ビーマ・パラークラマの話したことや、彼とヴェーターラとの会話からシャシャーンカヴァティー姫のことを知ったことや、そして彼女を得るために、われわれがアヨーディヤーから出て来たことなど、ありえようか。また、ヴィンドヤ山中の森林で竜の呪詛のために離ればなれになったり、しかもその後われわれの数人の者が出会い、そして今はまた離ればなれになる、君、希望がまたも挫折したではないか。彼等は樹木の中でブータに呑まれてしまった。彼等がいなければ、シャシャーンカヴァティーはどうなるのだ。また、わたしの生命はどうなるのだ。愚図愚図するのは、もう結構だ。」

と言って、ムリガーンカダッタは立上って、悲しみのために湖水に投身しようとしましたが、シュルタ・ディは一生懸命に思いとどまらせようとしました。

そのとき、空中から姿の見えない声がきこえてきました。

「息子よ、はやまるではない。そなたにとって、万事よい結果となるであろう。この樹には、ガネーシャ神が住んでいられる。知らないこととは言え、今日そなたの侍臣たちはかの神を冒瀆したのだ。というのは、そなたの侍臣たちは飢に苦しんで、口も漱がず、手足も洗わずに、不浄のままで実をとろうとして、神さまの住処によじ登ったからだ。そこで、果実に触れた途端に、果実となってしまったのだ。『彼等の心がほしがるものになれ。』と、ガネーシャ神が呪詛された

からだ。それに、そなたの他の四人の侍臣も、この道をやってきて、同じように此の樹によじ登って果実となってしまったのだ。されば、そなたは苦行によってガネーシャ神を宥慰せよ。かの神の恩寵により、そなたの一切の希望が成就するであろう。」
と、甘露の雨のような天上からの声を聴いて、ムリガーンカダッタは希望が湧き、自殺を思いとどまりました。そして、湖水で水浴をし、断食をし、合掌して、ガネーシャ神を祀った後、讃嘆しました。

こうして、ムリガーンカダッタは、その樹の根もとにクシャ草の莚をしいて、十一日の間、ガネーシャ神の宥慰に専念して断食をしました。シュルタ・ディも、その間、王子の側に侍っていました。そして、十二日目の夜、ガネーシャ神が夢の中で王子に語りました。

「愛児よ、余はそなたに満足じゃ。そなたの侍臣たちへの呪詛は解かれ、そなたは彼等と再会するであろう。そして、そなたは彼等と一緒にウッジャイニーに赴いて、遂にシャシャーンカヴァティー姫を得て自分の都城に還り、大地の統治を行うであろう。」

このようにガネーシャから夢の中で告げられたムリガーンカダッタは朝になって眼が覚めました。そして、夜中に見た夢をシュルタ・ディに話しました。シュルタ・ディは王子にお祝いの言葉を述べました。王子は水浴をした後、ガネーシャを祀り、その住処の樹木を右遶していますと、呪詛から解放された十人の侍臣が、その樹から彼の足許に落ちてきました。嚮に述べた六人のほかに、ヴィヤーグラ・セーナ、ストゥーラ・バーフ、メーガ・バラ、そしてドリダ・ムシュティの四人もいました。

こうして、幸運にも、ムリガーンカダッタ王子はすべての侍臣と一瞬に再会することができましたが、互いにじっとみつめ、激しく抱きあい、感情が高ぶったために口ごもりながら、一人一人と繰返し挨拶を交しました。侍臣たちもまた苦行をしたために新月のように痩せた主人を見て涙を流し、シュルタ・ディから事情を聴き、お互いに勝れた主人を持ったことを祝福しました。かくて、自分の計画の達成を確信したムリガーンカダッタは、湖水で水浴などの潔斎をした侍臣たちと一緒に、楽しく断食行を終えた食事をしました。

八

こうして、食事をして元気を恢復しましたムリガーンカダッタは、侍臣たちと湖水の岸に腰をおろしていましたが、その日に再会した四人の侍臣たちに、離ればなれになった時からの一部始終を尋ねました。すると、彼等の中のヴィヤーグラ・セーナという男が王子に語りました。

「王子さま、わたくしどもの身上話をお聴きください。お話し申上げましょう。

あの竜のパーラーヴァタークシャの呪詛によって、わたくしは意識を失ったまま、あなたから遠くへ離れてしまいました。意識を回復した後、わたくしは長いこと荒野の中をさまよい歩きましたが、夜の闇につつまれて方角も道も判りませんでした。悲しみのために長く感じられた夜も

漸く終りまして、世に尊き太陽が次第に四方を照しはじめましたとき、わたくしは考えました。

『ああ、われわれの主人は何処に行かれたのか。われわれと離ればなれになって独りになられて、どうなさるだろうか。また、どのようにして再会をしようか。どの道を通って、何処で探そうか。むしろウッジャイニーへ行こう。其処へ行けば、必ず会えよう。王子さまはシャシャーンカヴァティー姫に会うために其処へ行こうと決心していられるのだから。』

と考えまして、あたかも火の粉を降りそそぐかのような太陽の光線に灼熱された、不幸さながらの荒野をとぼとぼとウッジャイニーへ向って歩きました。

暫く歩いて行きますと、見わたすかぎり蓮の花の咲き乱れた湖水に着きました。湖水に遊ぶ白鳥などの鳴声は、あたかもわたくしに話しかけてくるかのようでありました。湖面にたつ波は手まねくかのようでしたし、清く澄んで広々とした水面を見ると、すべての悲しみを拭ってくれまして、まこと勝れた人物のようでありました。わたくしは其処で水浴をし、蓮の根や茎を食べ、水を飲みました。そして、わたくしが湖水の岸で休んでいますと、ドリダ・ムシュティとストゥーラ・バーフとメーガ・バラの三人がやって来るのを見つけました。そして、わたくしたちは集まりますと、あなたのことについて互いに尋ねあいましたが、誰も王子さまの消息を知っていませんでしたので、最悪の事態を考え、あなたと別れて生きる気にならず、四人とも自殺を決心しました。

そのとき、ディールガ・タパス仙の息子のマハー・タパスという聖仙の息子が湖水で水浴をし

にやって来ました。この人は頭髪をつかね、黒鹿の皮をまとい、左手には水瓶を持ち、右腕にはアクシャの種の数珠を巻きつけていました。同じ服装をした数名の聖仙の息子を連れていましたが、わたくしどもが湖水に投身しようとしているのを見ますと、わたくしどもに近づいてきました。すべての者に慈しみの心を持つ方は、理由なくともすべての者の友人であるからです。そして、わたくしどもに

『あなたがたは臆病者にふさわしい悪行をしてはなりません。なぜなら、臆病者は悲しみのために盲目となり、不幸の陥穽に墜ちこむのです。しかし、決断力のある人や判断力のある人は判断による清浄な眼を持って正道を歩み、孔に墜ちこむことなく、必ず目的を達成するのです。あなたがたは瑞祥ある姿の持主ですから、必ずや好運を得られるでしょう。あなたがたは何を悲んでいられるのですか。あなたがたを見ると、わたしの心は傷むのです。』

と言いましたので、わたしは聖仙の息子に自分の身上を初めから話しました。すると、その方は未来を達観された数々の言葉で、連れの人達たちと一緒に、わたくしどもを励まされ、自殺を思いとどまらされました。それから、水浴をなさった後、わたしどもを其処から余り遠くない父御の庵に案内して、客人としてもてなしてくれました。

聖仙の息子は庵の一隅にわたくしどものために座を設けた後、隠棲処に生えている樹の一本一本のところへ行って、果実を乞いました。すると、鉢は自然に落ちた果実で忽ちに一杯になりました。そして、わたくしどものところへ近づいて、天上の香りのする果実をわたくしどもにくれ

ました。わたくしどもがその実を食べますと、まるで甘露を飲んだような満足した気持になりました。

　太陽が湖水の果に沈み、その日が暮れて、空には星がばらまかれたように一面に光り、月が白く光る月光の樹皮の衣を着て東方の山の頂にある苦行林を照しはじめましたとき、わたくしどもは、その日の行事を終えて隠棲処のひとところに集まった聖仙たちに、挨拶をしに出かけました。わたくしどもが恭々しく挨拶をしまして座につきますと、聖仙たちは親切な言葉で応対され、すぐ

『何処から来られたか。』

と尋ねられました。そこで、聖仙の息子がわたくしどもの隠棲処に来るまでの身上話をしました。すると、カンヴァという智慧のある聖仙が、わたくしどもに語りました。

『このように勇気のある丈夫でも、どうして落胆などするのであろうか。不幸に際して剛毅の心を失わぬこと、成功しても慢心せぬこと、そして堅忍不抜であること、これは実に勝れた丈夫の本分である。偉大な人は剛毅さによって非常な困難を切りぬけ、偉大なことがらを完遂して、偉大という名声を得る。その証拠にスンダラセーナ王子の物語をお話ししよう。彼がマンダーラヴァティー姫のために、如何なる困苦に耐えたかを聴きなさい。』

と言って、カンヴァ仙はすべての聖仙たちとわたくしどもが耳を傾けているところで、この物語をしました。

〔スンダラセーナ王子とマンダーラヴァティー姫の物語〕

　北方の顔を飾るニシャダ*という土地があるが、その地にむかしアラカー*という都城があった。そこでは、人々は常にあらゆるものに恵まれて幸福であったが、宝玉燈だけには休息はなかった。この都にマハーセーナ（「大軍」の意）という王がいたが、このような名をもつのも理由のないことではなかった。彼の敵勢は軍神にも似た彼の激しい勇猛さの火焔に慴伏していた。彼の宰相にグナ・パーリタという者がいたが、この宰相も勇気の鉱脈で、大地の重みを支える第二のシェーシャ（全世界を支えるという七つの頭のある蛇）さながらであった。王は敵を征服すると、国家統治の大任を宰相に委ねて、快楽に耽った。

　シャシ・プラバーという王妃に王子が生れた。王子はスンダラセーナといったが、子供のときに既に諸々の徳を具えていて、子供ではなく、勇気と美の女神がみずから選んだ夫であった。この王子に、チャンダ・プラバ、ビーマ・ブジャ、ヴィヤーグラ・パラークラマ、勇士のヴィクラマ・シャクティおよびドリダ・ブッディという五人の勇気ある侍臣がいたが、彼等は年齢の点でも徳を具えている点でも、互いに遜色はなかった。彼等はみな力と智慧を具えた大勇士で、良家の生れで主人に忠誠をつくしたが、鳥の鳴声にも通暁していた。王子は逞ましい青年となったが、ふさわしい妻がないままに、結婚をしないで、父の家に住んでいた。

「不撓の勇気、自己の腕により獲得した富、そして容姿の点でふさわしい妻のあるとき、丈夫

はこの世に於いて尊敬される。さもなければ、この三者は何の役にたとうぞ。」

と、勇士スンダラセーナは侍臣たちと一緒に考えた。

あるとき、王子は五人の侍臣を連れ、軍勢を率いて、城外へ狩猟に出かけた。王子が出て行くのを、丁度他国から帰ってきたカートヤーヤニーという厚顔無恥な尼僧が見た。王子の人間ばなれをした美しい容姿を見て、この尼僧は

「あの方はローヒニー（月神の愛妻の名）のいない月であろうか。それとも、ラティー（愛の神カーマの妃の名）のいない愛の神であろうか。」

と考えた。侍者たちに尋ねて、彼が王子であると知り、尼僧は愕き、創造主の創造の絶妙なことを讃嘆した。そこで、彼女は遠くから甲高い声を長くひっぱって、

「おうーじーさーまー、ばーんざーい。」

と叫びながら、王子にお辞儀をした。そのとき、スンダラセーナ王子は自分の侍臣たちと話をはじめていて、それに心を奪われていたので、尼僧の声を聞かないで通り過ぎていった。すると、尼僧は怒って、王子に聞こえるように大声で、

「王子よ、妾の挨拶するのを、何故に聞こうとしないのだ。この地上で、王にせよ、王子にせよ、妾を敬わぬ者は一人としてない。おまえが若さなどを誇って、高慢なのなら、それでもよいさ。おまえがハンサ・ドヴィーパ王の王女で世界と装飾となっているマンダーラヴァティーを妻に迎えたときには、必ずや狂気じみた傲慢さのためにインドラ神の言葉をさえ聴こうとしないだろうな。ましてや卑しい人間の言葉など、耳を傾けないだろう。だが、その時になって、天罰を思い知るがよい。」

と言った。スンダラセーナ王子はその言葉を耳にして、好奇心を起し、尼僧を呼んで、平伏して謝罪し宥めた。そして、訳をたずねたかったが、尼僧を家臣たちの手に委ねて、自分の侍臣のヴィクラマ・シャクティの家に連れて行かせ、やすませた。王子はそれから出かけて狩猟をし、帰って来ると、日常の行事を果した後、食事の饗応を受けた尼僧を召して尋ねた。

「尊母よ、おっしゃってください。今日、あなたがお話しになったマンダーラヴァティーという娘は、誰なのですか。わたしたちはその娘のことを知りたいのです。」

と、王子が言うのを聴いて、尼僧が語った。

「お話ししましょう、お聴きください。妾は霊場などを巡拝して、国中はもちろん島々さえ歩きまわります。歩きまわっている途中、たまたまハンサ・ドヴィーパを訪れ、マンダーラ・デーヴァ王の王女を見ました。不徳の行を行う者どもの見るにふさわしからぬ、まことに天神の子が娶るにふさわしい姫で、マンダーラヴァティーといい、天上の楽園を主宰する吉祥の女神さながらでした。牝鹿のような容姿をして、彼女をひとめ見ただけで恋心を煽られ、創造主が甘露でつくりあげた第二の月輪さながらでした。この地上の何処にも、あの姫の容姿にかなう者はいません。あなただけが、あの姫の麗容にふさわしい方だと、妾は思います。姫を見たことのない人々にとっては、眼も、この世に生れたことも、無駄というものです。」

と、尼僧の口から聴いて、王子は語った。

「母上、その姫のそのような姿を、どうしたらわれわれは見ることができますか。」

尼僧は王子のこの言葉を聴くと、言った。

「妾は趣味で画布に姫の姿を描きました。それを荷物箱の中に持ってきています。御覧になりたいのなら、見てください。」

と、尼僧は語って、荷物箱から姫の絵を取りだして、悦こんだ王子に見せた。スンダラセーナは、絵に描かれてはいるが素晴らしい姿をして、見る者に悦こびを与える少女を見て、恋の神の絶え間ない箭矢に貫かれたかのように、そのとき身中がぞくぞくし、暫くの間は動かず、何も聞かず、何も言わず、何も見ずにいた。そして、心を奪われてしまって、長い間あたかも絵像のようであった。

王子の侍臣たちがそれを見て、尼僧に語った。

「尊尼よ、スンダラセーナ王子を画布に描いてください。あなたが絵姿を巧みに似せて描くことができるのを、わたしどもはよく知っています。」

と、侍臣たちの言うのを聴くと、尼僧は直ちに王子を画布に描いた。その絵が王子に非常によく似ているのを見て、その場にいあわせた人々はみな

「尊尼が描いた絵は本人に瓜二つだ。この絵を見れば、誰もこれがスンダラセーナ王子だと思う。だから、マンダーラヴァティー姫の姿も瓜二つに相違ない。」

と言った。スンダラセーナ王子は二枚の絵を得て非常に喜こび、尼僧に厚く褒賞を与えた。そして、王子は叮重に尼僧を宿に送らせた後、愛人の絵姿をもって、部屋に這入った。

「これが顔だろうか、それとも愛情によって洗い清められた月であろうか。また、この胸の両つの隆起はカーマの神の灌頂式の二つの水壺であろうか。この蔓草のような三条の皺*は美の大海の波であろうか。この腰はラティの戯れの床であろうか。」

と、寝床にねて、絵に描かれたマンダーラヴァティーの身体の各部分を眺めていた。このようにして、毎日、食事などもせず、恋の焔にさいなまれて、日とともに痩せていった。

そのことを知って、王子の両親のマハーセーナ王とシャシ・プラバー妃は親しく王子の侍臣たちに王子の病気の原因を尋ねた。侍臣たちは、ハンサ・ドヴィーパの王女が原因であると、王と王妃に語った。そこで、マハーセーナ王がスンダラセーナに語った。

「王子よ、そなたは何故にそのように深く恋していることを匿すのだ。マンダーラヴァティーはなるほど珠玉の乙女だ。そなたにこそふさわしい娘なのだ。それに、姫の父マンダーラ・デーヴァは余の最も親しい友人だ。悩むのは、やめなさい。このようなことは、使節を派遣しさえすれば、まとまることだ。」

と、このように王子に語って、マハーセーナ王は諮問して、マンダーラ・デーヴァ王の王女をスンダラセーナ王子の妃に懇請するために、スラタ・デーヴァという使節をハンサ・ドヴィーパへ派遣した。そのとき、使節の手に、王子のすぐれた姿を尼僧が瓜二つに似せて描いた絵をゆだね

た。

使節は急いで旅行をつづけ、海岸にあるシャシャーンカ・プラ*という、マヘーンドラーディトヤ王の都城に達し、其処から船に乗り、幾日かの後に、ハンサ・ドヴィーパにあるマンダーラ・デーヴァ王の宮殿に到着した。門番を通して王に面会をもとめ、宮殿内に這入って王に謁見し、贈物を正式に贈った後、使節は語った。

「大王よ、マハーセーナ王よりの御伝言であります。『余の嗣子スンダラセーナに、御息女を賜わりたい。と申すのは、カートヤーヤニーという尼僧が姫を画布に描き、それを当地に持参して、宝珠の乙女であると言って、見せたからである。姫の容姿がまことスンダラセーナに相応わしいことから、われらは姫を王子の妃に迎えたいと望み、王子の姿を画布に描き、持参させた次第、御覧いただきたい。比類なき容姿の王子は自分は相応わしい娘でないかぎり娶ることを欲していない。御息女こそ、わが王子に似合う唯一の女性である。』と、マハーセーナ王は伝言せられ、わたくしの手に王子の絵姿を托されたのであります。陛下、なにとぞ御覧ください。春の蔓草は春に添わせるべきでございます。」

という使節の言葉を聴いて、マンダーラ・デーヴァ王は悦こび、マンダーラヴァティー姫と母后を呼びよせた。王は王妃と姫とと一緒に包みを解いて絵を見て、

「この地上に、余の娘に相応わしい男はいない。」

と自惚れていた心を捨てた。そして、

「この王子と結ばれるなら、姫の美しさも一段と増そうというもの。この王子あって、姫は真の美しさを輝かすのであり、姫あって、この王子も輝くのだ。白鳥のいない蓮池も、蓮池のない白鳥も、まこと考えられぬことだ。」

と、王が語ると、王妃も深く王の言葉に賛同したが、マンダーラヴァティーは突如として恋に心を奪われてしまった。姫は眼をみひらいてじっと絵をみつめ、あたかも物の怪に憑かれたかのように、睡っていないにもかかわらず睡っているかのように、そして絵姿さながらであった。そこで、マンダーラ・デーヴァ王は姫がこのような有様を見て、姫をスンダラセーナ王子に嫁がせることを承諾し、使節を厚くもてなした。

そして、次の日、マンダーラ・デーヴァ王はクマーラダッタという婆羅門を答礼の使節としてマハーセーナ王の許に派遣することにした。

「急いでアラカーの王マハーセーナの許に赴き、『わが友情によって、姫を嫁がせよう。ついては、あなたの嗣子が当方に来られるか、それとも余の娘を送り届けるか、仰言って頂きたい。』と、余の言葉を伝えよ。」

と、二人の使節に語った。マハーセーナ王の使節スラタ・デーヴァとマンダーラ・デーヴァ王の答礼の使節クマーラダッタの両人は、マンダーラ・デーヴァ王の口上を聴くと、一緒に急いで乗船し、海路シャシャーンカ・プラに到着し、其処からは陸路で、富の神(クベーラ)の都アラカーに似て栄えた都アラカーに到着した。両人は王城に赴き、城内に這入って、マハーセーナ王に謁見し、

王から叮重な歓迎を受けた。両人はマンダーラ・デーヴァ王の述べた口上をマハーセーナ王に伝えると、王は非常に悦こび、両人に厚く褒賞を与えた。王は姫の父の使節に姫の誕生した星宿をたずね、占星家たちに王子の結婚のための吉日を諮問した。彼等は

「花婿にも、花嫁にも、三ヵ月目のカールティカ月（十月から十一月にわたる月）の白分*の五日が吉日である。」

と語った。そこで、アラカーの王マハーセーナは、その日に結婚式を挙行すべきことと、王子をハンサ・ドヴィーパに赴かせることを、マンダーラ・デーヴァ王に伝えることにした。そして、このことを手紙に書き、マンダーラ・デーヴァ王の使節クマーラダッタと、チャンドラ・スヴァーミンという自分の別の使節の手に委ねた。こうして、二人の使節は出発して、ハンサ・ドヴィーパ王の面前に伺候して、手紙を渡して、すべてを話した。王は承諾して、マハーセーナ王の使節チャンドラ・スヴァーミンを厚くもてなして、その主人の許に送りかえした。チャンドラ・スヴァーミンはアラカーに還って、縁談のととのうたことを報告した。そこで、アラカーでも、ハンサ・ドヴィーパでも、双方のすべての人々は吉日を待ち望んでいた。

その間に、ハンサ・ドヴィーパでは、王子の絵姿を見て恋いわずらいに罹っていたマンダーラヴァティーは、結婚の吉日が遠いことを知って、恋人に恋い焦れて、その日まで待ちきれず、恋慕の炎に激しくさいなまれていた。そして、スンダラセーナにあこがれる心のあまり、身体に栴檀の油を塗ってさえ、熱い炭火の雨を降らせたかのように感じ、蓮華の葉の寝床も熱砂の敷物のように、月光さえも燃えさかる森から燃えあがる火焔のように思われた。一言ももの言わず、食

事もとらず、孤独の響をまもっていたが、心配した侍女が訳をたずねると、漸くのことにこのように語った。

「妾の結婚まで、長い月日があるんですもの。アラカー王の王子さまなしでは、それまで待てない。土地は離れているし、月日も長いし、それに運命はどのように変るか判らないでしょう。その間に、誰にどんなことが起るか、誰にも判らないじゃないの。だから、妾は死んでしまいたい。」

と、マンダーラヴァティーはスンダラセーナと離れていることを嘆き悲しんで、忽ちに見るも憐れな有様となった。そのことを侍女の口から知って、父王は母后と一緒に王女のそのような姿を見て、大臣たちに相談をした。

「アラカー王マハーセーナはわれわれの友である。それに、マンダーラヴァティーは此処では月日を待っておれない。されば、運命がどうであろうと、姫をかの地へ送ろう。恋する人の傍にいれば、結婚式までの月日をじっと待っていることもできよう。」

と、マンダーラ・デーヴァ王は考えて、王女マンダーラヴァティーを慰め、吉日を選んで、母后が掟の通りに航海安全を祈って、財宝と扈従の人々と一緒に船に乗せ、ヴィニータ・マティという自分の大臣をつけて、ハンサ・ドヴィーパから海路アラカーに向って出発させた。

こうして、数日の間、マンダーラヴァティー姫が船に乗って大海を渡っていると、突然に盗賊の襲いかかってくるように黒雲が湧きおこり、雨を矢のように降らせ、颪は物凄い音を立てて吹

きはじめた。忽ちに、力強い運命に流されるかのように船は風のために遠くに吹き流され、風にうたれて破壊してしまった。扈従の人々は大臣ヴィニータ・マティもろともに水に溺れ、王女の財宝もすべて海中に沈んでしまった。

しかし、そのとき海は波を腕にして王女を生きたまま海岸近くの森に打ち上げた。王女は海中に落ちた、しかも大きな波によって森に打ち上げられた、運命の神のなし能わざることの何一つないことを、御覧あれ。そこで、王女は人影ない森の中に自分ひとりしかいないことを知って、恐怖におびえ心乱れ、再び海に身を投じたが、死ねなかった。

「妾は何処へ向って出発したのか。何処へ到着したのか。扈従の者たちは何処へ行ったのか。ヴィニータ・マティは何処へ行ったのか。どうして、妾は突然にこんなことになったのか。運の悪い妾は何処へ行こうか。もう駄目だ、どうしよう。意地の悪い運命の神さま、あなたは何故に妾を海から救われたのですか。ああ、お父さま。ああ、お母さま。ああ、あなた、アラカー王の王子さま。あなたのところへ参りませぬ前に、妾は死にます。見てください、あなたはどうして妾を救ってくださらないの。」

などと、マンダーラヴァティーは激しく嘆き悲んだが、流す涙は紐が切れて飛び散る真珠の玉さながらであった。

すると、そこへ、近くにある隠棲処からマタンガという聖仙が海水で水浴をしようとして、やって来た。この聖仙は幼少の頃から梵行を守ってきたヤムナーという娘をつれていたが、王女の

泣声を聞いた。可哀そうに思って、娘をつれて王女に近づいて見ると、群から離れた牝鹿のように、悲しげな眼であたりを見まわしている王女の姿を見た。そこで、聖仙は愛情のこもった声で、

「そなたは誰なのじゃ。どうして、この森に来たのじゃ。何故、泣くのじゃ。」

と、王女に尋ねた。マンダーラヴァティーは情深い聖仙を見て、次第に心やわらぎ、羞じらって顔を伏せたまま自分の身上を聖仙に語った。すると、聖仙マータンガは瞑想した後に王女に語った。

「王女よ、絶望してはならぬ。しっかりするのだ。シリーシャの花のように傷つきやすい、そなたの身体を災難の苦悩がさいなむ。不幸は、そなたがかよわいか、かよわくないかを試しているのだ。それに、そなたは間もなく待ち望んでいる夫に会える。だから、此処から余り遠くない余の隠棲処に来るがよい。そして、余の娘と一緒に、自分の家にいるようにしているがよい。」

と、王女を慰めて、聖仙は水浴をした後、自分の娘と一緒にマンダーラヴァティーを自分の隠棲処に連れて帰った。彼女は其処で聖仙の娘と一緒に聖仙に甲斐甲斐しく侍づき、夫と会うことをこいねがいながら、静かな生活を送っていた。

話かわって、アラカーでは、マンダーラヴァティーとの結婚の日を待ち望んで、スンダラセーナも長い間の恋慕のために痩せてしまったが、侍臣のチャンダ・プラバたちから慰められて、毎日を指折り数えて、時を過ごしていた。漸くにして結婚の吉日が近づくと、父王は王子のためにハンサ・ドヴィーパへの旅行の準備をととのえた。こうして、吉日を選んで、旅行の安全を祈っ

て祈禱を行った後、スンダラセーナは大軍を率いて大地を轟かせながら出発した。王子は悦こびいさんで侍臣たちをつれて次第に旅行をつづけ、海岸の装飾である都城シャシャーンカ・プラに到着した。其の地に着くと、王子の到着を聴いて恭々しく出迎えたマヘーンドラーディトヤ王の歓迎を受け、王子は従者を連れて都城に這入った。象に乗って王子が王宮に向うと、王子の輝くばかりの威容は風が蓮華の林を揺り動かすように都城の婦女子の心を揺さぶった。王宮では、王子に随行することを約束したマヘーンドラーディトヤ王の歓待を受けて、その日は其処に逗留して休息した。

「海を渡りさえすれば、愛する女(ひと)と結ばれよう。新婚の歓びを羞じらい怖れがちな姫を抱きしめることもできよう。抱かれながら、『いや、いや』と泣く声も聴けよう。」

などと、王子は心を馳せながら、その夜を過した。

その翌朝、王子は自分の軍隊をその都城にとどまらせて、マヘーンドラーディトヤ王を伴なうて海岸に行き、この王と侍臣たちと一緒に、食糧と水とを満載した大きな船に乗りこんだ。王子は、一緒に乗船することのできなかった少数の扈従の者を、第二の船に乗せた。こうして、二隻の船は纜(ともづな)を解き、旗を風にはためかせて、南西の方向に進路をとった。

航海をつづけて、三、四日過ぎたとき、突然に大颶風が起った。

「ああ、未曾有の大暴風雨だ。」

と、驚愕のあまり狼狽して右往左往するかのように、海岸にある樹木は激しく揺れうごいた。海

水は風に煽られて大波が立ち、水塊が上下に反転を繰返して、あたかも時が経つ間に人間の気持が反覆を繰返すさまに似ていた。悲痛な叫び声とともに、宝玉を供物として海に捧げたし、船頭は非常な苦労をして帆をはずした。乗船している人々はみな狼狽しながらも、非常に重い石を鎖につないで船の周囲に釣りさげたが、振り飛ばされて、生きる望も同時に飛ばされてしまった。二隻の船は波にもまれて海上をあちらこちらに狂奔し、あたかも戦争の混乱の中を手綱であちらこちらと引廻わされる象さながらであった。かくて、この有様を見たスンダラセーナは決然と立上って、マヘーンドラーディトヤ王に語った。

「この破局が突然にあなたがたに襲いかかってきたのは、わたくしの前生の罪過のためです。わたくしはその果実を見るに耐えません。わたくしは海水に身を投げます。」

と言って、急いで上衣を腰のまわりにくくりつけ、王子はその場で水中に身を投げた。それを見て、王子の侍臣たちはチャンダ・プラバを先頭に、マヘーンドラーディトヤ王も一緒に、水中に投身した。彼等はみな一時は気を失ったが、正気にかえると両手で逆まく波を掻きわけて泳いだが、波の力のために離ればなれとなり、方々に散らばってしまった。間もなく風は収まり、海は静かで穏かになり、憤怒の鎮まった善人と全く同じ有様となった。とかくする間に、スンダラセーナはドリダ・ブッディと一緒になり、風のために何処からか流されてきた船を見つけた。彼は自分の侍臣のひとりだけと一緒にその船に乗ったが、生存と破滅の間を揺れ動く第二の鞦韆(ぶらんこ)に乗ったかのようであった。こうして、二人は元気もなく、方角も判らず、水でつくられたかのよう

な周囲を見ながら、ただ神の庇護のみをたよりに漂流しつづけた。すると、三日の間に、穏やかな順風の吹くままに漂うていた船が海岸に着いた。そこで、船が海岸に乗り上げると、王子とドリダ・ブッディの二人は海岸に飛び上ったが、それと同時に生命の希望に飛び乗ったのであった。其処にとどまって、王子は健康を回復すると、ドリダ・ブッディに言った。

「わたしは海から脱出したし、パーターラ(地下界)から下に行ったが、それも脱出した。だが、あのヴィクラマ・シャクティやヴィヤーグラ・パラークラマ、チャンダ・プラバやビーマ・ブジャの、あの申分のない仲間と、特別の理由もないのに親友となったマヘーンドラーディトヤ王とを殺してしまって、今となって生命を永らえて、何のよいことがあろうか。」

と語った王子に、侍臣のドリダ・ブッディが言った。

「王子さま、元気を出してください。われわれに幸運のあることを、わたくしは確信しています。わたくしたちが海から脱出したように、あの人たちも海から脱出したに相違ありません。運命がどのように向うか、あの知りがたい道を誰が見出しえましょう。」

などと、ドリダ・ブッディがあれこれを話していると、二人の苦行者が水浴をするために其処へやって来た。二人の苦行者は王子が悄気ているのを見て近づき、王子の身上をたずね、憐れんで言った。

「この世に於ける苦楽を与える前世の業の力強い働きを、神々さえ変えることはできないのです。苦を払おうと欲する決断ある人は善行を行うべきです。なぜならば、後悔することも、身体

の痩せることも、苦を払うための療法ではないからです。ですから、落胆することは止め、あなたは決然とあなたの肉体を護りなさい。肉体さえあれば、丈夫の目的で成就しないものはないでありましょう。それに、あなたは福運を示す人相を具えています。あなたは必ずや将来の幸運を得られましょう。」

と言って、二人の聖仙は王子を慰めて、自分の隠棲処に連れて帰った。スンダラセーナ王子はドリダ・ブッディと一緒に其処にとどまって、他の人々を待ちながら数日を過した。

話かわって、王子の侍臣のビーマ・ブジャとヴィクラマ・シャクティの二人は海を泳ぎ、別の海岸に着いた。二人は悲しみに茫然としながらも心を奮いたたせて、

「われわれと同じように、王子も海から脱出したに相違ない。」

と期待して、大森林に這入り、王子を探した。

他の二人の侍臣のチャンダ・プラバとヴィヤーグラ・パラークラマの二人と、マヘーンドラーディトヤ王も、同じように海を泳ぎ渡って、苦悩にさいなまれながらスンダラセーナを探したが、見つけることができず、悲んでいたが、傷んでいない船を手に入れたので、シャシャーンカ・プラに帰った。こうして、この地に逗留していた軍隊は一部始終を聴き、二人の侍臣と一緒に、自分たちの都城アラカーに泣きながら帰っていった。彼等が王子を連れないで悲しみながら到着すると、市民は嘆き悲しみ、号泣の声が都城をひと色に塗りつぶしてしまった。マハーセーナ王と王妃とは王子の消息を聴くと、寿命は尽きてはいなかったが、生命の燈火は消えんばかりであっ

た。そして、王妃と一緒に自殺しようとする王を、大臣たちは希望を起させるような言葉で、あれこれと慰めて、思いとどまらせた。こうして、王は侍臣たちと一緒に、城外にあるスヴァヤム・ブー（ヴィシュヌ神の異名）の神殿で苦行をしながら、息子の消息について絶えず心を配っていた。

さて、話かわって、ハンサ・ドヴィーパでは、マンダーラ・デーヴァ王も王女と婿が海上で難船したという消息を聞いた。そして、また、女婿の二人の侍臣がアラカーに帰ったこと、マハーセーナ王が王子の生存に希望を抱いて苦行していることを聞いた。王も自殺を考えたが大臣から慰められ励まされて思いとどまると、国政を大臣たちに委ねて、王妃カンダルパ・セーナーを連れて、アラカーの都城に赴き、同じ悲しみをもつマハーセーナ王を訪れた。そして、

「王子の消息がわかったとき、マハーセーナ王が決心してすることを、自分も一緒になってしよう。」

と決心した。マハーセーナ王に会見すると、マハーセーナ王はマンダーラヴァティー姫の身の上を聴いて激しく嘆き、お互いの不幸を慰め合った。こうして、ハンサ・ドヴィーパ王も、その地に留ってマハーセーナ王と一緒に、感官を制御し、食事を節し、ダルバ草の上に寝て、苦行を続けた。

このように、運命の神のために、あたかも風に吹き飛ばされた木の葉のように、みんなの者があちらこちらに散りぢりになっていたとき、たまたまスンダラセーナが自分の住んでいた隠棲処を出て、マンダーラヴァティーの逗留しているマタンガ仙の隠棲処の近くに行った。其処で、王

子は水の澄んだ池を見た。池の岸には種々の香りの熟した実が枝もたわわに夥しく生っている樹木が繁っていた。王子は疲れていたので、その池で水浴をし、旨い果実を食べた。それから、ドリダ・ブッディと一緒に歩いていると、森の溪流のところに来た。その岸を歩いていると、シヴァ神の神殿の傍で花を摘んでいる聖仙の娘たちを見た。娘たちの中に、世界一の美女ともいうべきひとりの乙女がいた。その乙女は、月光のように森全体を愛らしさで輝かし、そのまなざしで四方に満開の青蓮を咲きみだれさせ、その足痕で地上に蓮華のしげみを蒔き散らしていた。

「あの乙女は誰だろうか。千眼の神（インドラ）の凝視するにふさわしい天女であろうか。若芽のごとき指を花にからませている森の女神であろうか。必ずや創造主が、多くの天女を創造した後に、あの乙女のまことに美しく素晴らしい肢体を造ったに相違ない。おや、あの乙女は絵姿で見た愛しいマンダーラヴァティーに似ている。一体、あの女がいまここにいるのだろうか。あの女はハンサ・ドヴィーパにいるのだし、この森林の中とは余りにもかけはなれているではないか。あの女が誰か、わたしには判らぬ。あの美女は何処から来たのだろう。また、どうしてここに来ているのだろうか。」

と、王子はドリダ・ブッディに語った。ドリダ・ブッディはこの森の美女を見て、そのとき言った。

「王子さま、あの乙女は森の花でつくった飾りをつけてはいますが、あの飾りはマンダーラヴァティー姫がつけていた頸飾りや環帯や鈴のついた腰紐やその他の飾りに似ていますゆえ、あの

姫に相違ありません。それに、あの乙女の容姿や優雅さは森では生れません。ですから、あの神神しい乙女は、かの王女で、聖仙の娘ではありません。さあ、あちらへ行って、暫く様子を見ていましょう。」

と、ドリダ・ブッディが語ったので、二人は樹蔭にかくれていた。

すると、その間に花を摘み終った聖仙の娘たちは、美少女と一緒に川の中に這入って水浴をしようとした。川の中で彼女たちが水をかけあって戯れていると、たまたま鰐がでてきて、美少女に嚙みついた。それを見て、聖仙の娘たちは驚き、あわてふためき、悲んで

「助けてください、助けてください、森の神々さま。この方はマンダーラヴァティー姫なんです。川で水浴をしていると、突然に鰐がでてきて、急に嚙みつかれ、死にそうです。」

この言葉を聴くやいなや、スンダラセーナは

「あの美少女がどうして余の恋人でありえようか。」

と考えたが、急遽走りよって、剣で鰐を殺した。死神の口のような鰐の口からマンダーラヴァティーを救うと、岸に運び上げ、手篤く看護した。虎口を逃れた姫は、助けてくれた人々が惚々するほどの美男子であるのを見て、考えた。

「妾の幸運が妾を此処につれて来て、妾の生命を救うてくれた。この勇敢な方は誰であろうか。不思議なことに、この方は絵姿で見た妾の恋人、あのアラカー王の王子さまにそっくりだ。この人があの方だって。いえ、いえ、妙な考えはよしましょう。このような人は他国に流浪している

人だ。決して安心はできない。他の男の側にいることは、今の妾にとって、ふさわしくないことだ。だから、すぐ此処を立去ろう。この勇敢な人に、幸福がありますように。」

と考えて、マンダーラヴァティーは友だちに

「さあ、このお方にお礼を申上げて、わたくしたちは帰りましょう。」

と言った。この言葉を聴くと、前から疑惑が念頭を去らなかったスンダラセーナは、美少女の名を聞いただけで自信をもち、聖仙の娘たちの一人に尋ねた。

「清浄な方よ、お話しいただきたい。あの女（ひと）はどなたの娘御ですか。どうして、あなたがたの友人となっているのですか。是非、伺わせてください。」

と尋ねると、その聖仙の娘は王子にこのように語った。

「あの方はハンサ・ドヴィーパの王マンダーラ・デーヴァ王の息女で、マンダーラヴァティーと申される方です。スンダラセーナ王子に嫁ぐため、アラカーの都へつれてゆかれる途中、船が難船し海中に落ちたのですが、波のため岸に打ちよせられていました。マタンガ仙がそれを見つけて、この隠棲処におつれしたのです。」

と、聖仙の娘が語ると、喜びと気抜けとで心の乱れているスンダラセーナに、侍臣のドリダ・ブッディが雀躍りしながら語った。

「万歳、今日こそマンダーラヴァティーを得られて、お目出とう存じます。あの方こそ、われわれが望みあこがれていた女（ひと）ではありませんか。」

と言うと、聖仙の娘たちが彼に訳を尋ねたので、彼は一部始終を話して聴かせた。娘たちはそれを姫に告げて喜こばせた。マンダーラヴァティーは

「ああ、あなた。」

と、叫び声をあげて、スンダラセーナの足許に泣き伏した。王子も姫を抱きしめて涙を流した。二人が泣いていると、枯木や雑草さえも貰い泣きの涙を流した。

すると、其処へ、聖仙の娘たちから話を聴いて、マタンガ仙が娘ヤムナーをつれて、やって来た。マタンガ仙は足許にひれ伏したスンダラセーナを優しくいたわって、マンダーラヴァティーと一緒に、自分の隠棲処につれていった。その日は、聖仙は王子をもてなして元気を回復させた後、翌日になると、安堵した王子に

「伜よ、余は今日ある所用でシュヴェータ・ドヴィーパ*へ行かねばならぬ。されば、そなたはマンダーラヴァティーと一緒にアラカーに行け。アラカーでこの王女と結婚し、王女を大切にせよ。王女は余が養女としたのであるから、そなたに余は委ねるのじゃ。そして、末長く姫と睦じく国土を統治せよ。それに、そなたの侍臣たちも、みな無事で、間もなく帰ってくるであろう。」

と、王子と許嫁の王女に別れを告げて、自分と同じ神通力を具えた娘ヤムナーを伴うて、空を飛んで立去った。

そこで、スンダラセーナはマンダーラヴァティーと一緒にドリダ・ブッディを連れて、その隠棲処から出発した。海岸に出てみると、ひとりの若い商人の指揮する軽船が近づいてきた。一行

は旅行を安楽にしようと思い、その船の持主である若い商人に遠くからドリダ・ブッディの口を通して、船に乗せてくれるように頼んだ。性悪な商人はマンダーラヴァティーを見て、愛欲に盲目となり、承諾して船を岸につけた。そこで、スンダラセーナは岸に立って、まずマンダーラヴァティーを船に乗せ、自分も乗ろうとした途端に、他人の妻を横取りしようとする悪漢の商人は急に舵手に合図をして、船を岸から離れさせた。船は泣き叫ぶ王女を乗せたまま、驚きのあまり茫然と船を見送るスンダラセーナの視界から、忽ちに消えてしまった。

「ああ、盗人どもにだまされた。」

と叫んで、王子は地上に倒れて、長い間泣いていた。ドリダ・ブッディが

「さあ、起き上ってください。失望しないでください。そのように嘆き悲しむのは、勇士にふさわしくありません。さあ、行きましょう。盗人を探しに、こちらの道を行きましょう。賢明な人々は如何に甚だしい不運に際会しましても、挫けることはありません。」

と、ドリダ・ブッディに激励されて、スンダラセーナは海岸から起ち上り、出発した。

「おお、妃よ、マンダーラヴァティーよ。」

と、絶えず別離の火焔にさいなまれて、スンダラセーナは食事もとらずに、涙を流しながら附添うドリダ・ブッディひとりをお伴に、道を歩き続けた。そして、悲しみのために我を忘れて歩くうちに道を失い、大きな荒野にまぎれこんでしまった。其処には兇暴な犀がうろつきまわり、獅子が棲んで、危険で怖ろしい場所であったが、ゲリラ部隊のように蛮族群も出没していた。数々

の不運に会うことも多く、しかも避難所もない荒野の奥深くスンダラセーナとドリダ・ブッディが進んでゆくと、その地に住むプリンダ族*の王ヴィンドヤ・ケートゥの命令を受けて、ドゥルガー女神に捧げる犠牲の人間を探しに来たプリンダ族のものが、武器を振り上げて襲うてきた。王子は他国での流浪、別離の悲しみ、卑賤な者からの侮辱、食事を摂らず、しかも旅の疲労という五つの火に苦しめられていたにもかかわらず、さらに運命の神は王子の根気を消耗させることを望んでいるかのように、第六の大火として蛮族の襲撃を創造した。王子はドリダ・ブッディと力をあわせて、彼等を捕えようとして矢雨を降らしながら襲撃してきた多勢の蛮族を剣で切り殺した。そのことを知って、ヴィンドヤ・ケートゥ王は再び軍勢をさしむけてきたが、戦闘に巧みな王子はそのときも多勢の蛮賊をたおした。しかし、王子も、お伴のドリダ・ブッディも負傷のため気を失ってしまった。蛮族どもは彼等を縛って運んでゆき、土蔵の中に放りこんだ。其処には害虫が群がり、蜘蛛の巣が張りめぐらされており、壁の孔には蛇の脱皮がぶら下っていて、蛇の匐いまわることも明らかだった。埃は踝まで達し、鼠のあけた孔が蜂の巣のようだったし、その中には多勢の人が放りこまれて怖れおののいていた。地獄の生れた場所のごときこの土蔵の中で、王子とドリダ・ブッディはビーマ・ブジャとヴィクラマ・シャクティの二人の侍臣を見出した。二人とも海から脱出した後、王子を探して、かの荒野に迷いこみ、蛮賊に捕えられて連行されたのであった。二人は王子を見て、泣きながら王子の足許にひれ伏したが、王子もビーマ・ブジャとヴィクラマ・シャクティであることを知り、涙にくれながら二人を抱きしめた。

その月の十四日が来ると、王の命令で、供犠にするために彼等はドゥルガー女神の神殿に連行された。其処はまこと死の神の怖ろしい口のようで、燈火の焔は舌舐めずりする舌のごとく、鈴の列は歯なみさながら、それに人間の髑髏が結びつけられていた。スンダラセーナは女神を見て、礼拝をし、敬虔な心で讃嘆の文句をとなえた。

「傲れるダイトヤを制御せる、血のしたたれる三叉の戟もて、アスラの襲撃を排除せる女神よ、信依する者に不畏を与うる女神よ、甘露を注ぐまなざしもて、悲しみの劫火に焼かれたるわれを見て、われに恵みを垂れよ。女神よ、礼拝し奉る。」

と、王子が唱えたとき、プリンダ王ヴィンドヤ・ケートゥが女神を礼拝するためにやって来た。スンダラセーナは王を見て、王が誰であるかを知り、羞ずかしさに顔を伏せて、伴の人々に自分から話しかけた。

「ああ、あれはプリンダ王ヴィンドヤ・ケートゥだ。父上の許に来て服属を誓い、この大荒野を支配している王だ。だが、此処では、われわれは何も言ってはならぬ。名誉ある人間は、このように哀れむべき境遇の際に身を明かすよりも、寧ろ死を選ぶべきだ。」

と、王子が侍臣たちと語っていると、そのときヴィンドヤ・ケートゥ王が家来たちに

「おい、捕えられるときに余の大勢の兵士を殺したという勇士を見せろ。其奴は素晴らしい御供物だからな。」

と言った。その言葉を聴くやいなや、プリンダ王の家来たちは乾いた血で汚れ負傷のために肌の

色の変ったスンダラセーナを、プリンダ王の面前に連行した。プリンダ王は彼を見て、嘗て見たことがある人のように思い、半信半疑で
「言え、おまえは誰だ。何処から来た。」
と尋ねた。スンダラセーナはプリンダ王に
「俺が誰で、何処から来たか、おまえに何の関係があるんだ。やりはじめた通り、やれ。」
と答えた。すると、その声ではっきりと誰であるかを知ったヴィンドヤ・ケートゥは驚きあわてて、
「これは、これは。」
と言いながら、地上に平伏した。そして、
「ああ、マハーセーナ大王さま、本日、悪者のわたくしは、あなたさまの御恩寵に対し奉り、何ということをしでかしたのでございましょう。スンダラセーナ王子さまが何処からか此処へおいでになりましたのに、あなたさまの生命にひとしい御令息を、事もあろうに連行して、このような目にあわし奉るとは申訳もありませぬ。」
などと、ヴィンドヤ・ケートゥが王子を抱きしめて語ったので、その場にいた一同は涙を流して悦んだ。
ヴィンドヤ・ケートゥはスンダラセーナと侍臣たちを恭々しく自分の村に案内をし、傷に繃帯をしたり、薬を与えたりして世話をした。そして、

「どうして、王子さまは此処へ来られたのですか。わたくしはそのことを是非伺いたいのですが、お話しくださいませんか。」
と尋ねた。そこで、スンダラセーナがそれまでのことを話すと、プリンダ王は驚いてしまった。
ちょうど、そのとき、プリンダ王の将軍が大喜こびしながら急いで這入ってきて、王に告げた。
「王さま、沢山の財宝を持ち、素晴らしく美しい珠玉のような婦人をつれて、ある商人の一行が荒野に這入りました。わたくしはそのことを知り、軍勢を率いて行き、財宝と美人もろとも一行の者どもを捕え、此処に連行して、外においてあります。」
という言葉を聴いて、スンダラセーナ王子とヴィンドヤ・ケートゥは心の中で、
「その美女というのは、マンダーラヴァティーではないだろうか。その商人というのは、マンダーラヴァティーを連れ去った悪党の商人ではないだろうか。」
と考え、
「その男と婦人を此処へ連れてこい。」
と言うと、将軍は商人と婦人とを連れてきた。二人を見て、ドリダ・ブッディが語った。
「あの女(ひと)こそマンダーラヴァティー姫です。それに、あの男は悪党の商人です。ああ、姫、姫はどうして暑さに萎えた蔓草のようになられました。花なす装身具はなくなり、蕾のような唇の色もあせて、お可哀そうに。」
と、ドリダ・ブッディが叫ぶと、スンダラセーナは急いで走りよって愛人の頸に縋りついた。こ

うして、愛し合う二人は別離の汚穢を涙の雨で互いに洗い流すかのように長い間泣いていた。

ヴィンドヤ・ケートゥ王は二人を慰めた後、商人に尋ねた。

「おまえは王子から信頼されたにかかわらず、何故その人を裏切って、妻女を連れ去ったのだ。」

と言うと、商人は怖れおののいて、声を震わせながら、

「わたくしはまことに無駄なことをしでかして、身の破滅を招くことになりました。でも、この貞淑な婦人は何人も近づきがたい御自身の威光で、わが身を護られました。まるで火焰のようで、わたくしは触ることもできませんでした。そこで、わたくしの故国にお連れして、お慰さめしたのち、お怒りを解き、そして結婚したいと考えたのでございます。」

と言うと、王は即座に商人の処刑を命令じたが、スンダラセーナは商人を処刑から救うてやった。しかし、商人が生命より大切にしていた財宝を没収した。このように、スンダラセーナが商人を放免すると、この哀れむべき男は生命の助かったことを喜こんで、何処ともなく姿を消した。

ヴィンドヤ・ケートゥ王はマンダーラヴァティーを連れて、スンダラセーナと一緒に自分の妃の宮殿に行った。そして、妃に命じて、マンダーラヴァティーに水浴をさせ、衣服と化粧品を贈った。そして、同じようにスンダラセーナにもみずから水浴をさせ着飾らせた後、壮麗な王座に坐らせ、真珠や麝香や酒などを持ってこさせて、王子を歓待した。そして、プリンダ王は夫婦の再会を祝して大饗宴を催したが、そのときプリンダ族の女どもはのこらず踊って寿いだ。

さて、その翌朝、スンダラセーナがヴィンドヤ・ケートゥ王に語った。

「わたしの傷も癒ったし、望みも適えられた。だから、今日、此処を出発して、故国の都に帰りたいと思う。ついては、直ちに飛脚を父王の許に送り、わたしのこれまでの一部始終と、わたしの帰ることを伝えさせてほしい。」

と、王子が言うと、プリンダ王は言われた通りに指示を与えて、飛脚を派遣した。飛脚がちょうどアラカーの都に到着したとき、たまたまマハーセーナ王は王妃と一緒に、スンダラセーナ王子の消息の判らないのを悲しんで、シヴァ神の神殿の前で火に這入ろうとしていた。そして、その周囲には、市民のすべてが集って、嘆き悲んでいた。飛脚はマハーセーナ王を見ると、自分の身分を明らかにして、王に走り寄った。見れば、プリンダ王の飛脚は埃にまみれ、手に弓を持ち、頭髪を蔓でたばね、全身黒く、ビルヴァの葉でつくった腰帯をしていた。飛脚は

「王さま、今日はまことにおめでとう存じます。御令息スンダラセーナさまが海から脱出されて、マンダーラヴァティーさまと御一緒に、わたくしどもの主人ヴィンドヤ・ケートゥの宮廷に来られました。そして、わたくしを先に出発させて、王さまと同道して、此処へ来られています。」

と、大声をあげて、プリンダ王の飛脚は手紙を王の足許に差しだし、その場にいあわせたすべての人々の愁眉を開かせた。すべての人々は歓呼の声をあげた。そして、手紙が読み上げられ、非常に不可思議な一部始終が知らされた。悲しみを一掃したマハーセーナ王は飛脚を厚く犒らい、

祝賀の宴を催して、扈従の者たちと一緒に王宮に還った。こうして、その次の日、待ちきれなくなった王は帰途についている王子を迎えるために、ハンサ・ドヴィーパ王マンダーラ・デーヴァと一緒に出かけた。

話かわって、スンダラセーナはマンダーラヴァティーを連れ、監獄で再会した侍臣のヴィクラマ・シャクティとビーマ・ブジャを伴い、ドリダ・ブッディと一緒に、プリンダ族の村から自分の家に向って出発した。風のように速い駿馬にまたがり、ヴィンドヤ・ケートゥ王と、大地を埋めつくすようなプリンダ族の軍隊を率いて、スンダラセーナは道を進んだ。そして、数日行軍すると、扈従者たちと親族の人々と一緒に途中まで出迎えている父を見た。王子は馬から下り、悦び迎えた人々の見まもる中を、侍臣たちと一緒に近づき、父の足下にひれ伏した。父王もまた王子を見て、喜悦と幸福に胸をふくらませ、波立つ海が天空に昇る満月を仰ぐ思いであった。また、足許にひれ伏している嫁のマンダーラヴァティーを見て、自分自身も家族も繁栄すると思い、非常に悦こんだ。また、平伏しているドリダ・ブッディなど王子の三人の侍臣の労苦を犒い、さらにヴィンドヤ・ケートゥを一層叮重に歓迎した。

スンダラセーナは父王にひきあわされて舅のマンダーラ・デーヴァ王に挨拶をし、殊のほか嬉しかった。また、以前に帰ってきていたチャンダ・プラバとヴィヤーグラ・パラークラマの二人の侍臣が、足に縋りついて再会を悦こんでいるのを見て、王子は自分の希望は達せられたと考えた。そして、そのとき、マヘーンドラーディトヤ王もスンダラセーナの帰還することを聴いて、

喜こび勇んでシャシャーンカ・プラからやって来た。

さて、スンダラセーナ王子は、ナダ・クーバラがランバー*を連れて帰るように、愛人マンダーラヴァティーを同伴して、駿馬にまたがり、すべての人々と一緒に、一切の繁栄の住む土地であり、数多くの福徳ある人々が住む自分の故郷アラカーの都に帰った。そして、窓辺に集って眼の青蓮を撒き散らす都城の女たちの見まもる中を、王子は愛人を伴うて父王の宮殿に這入った。喜こびの涙を眼に浮べた母后の足許にひれ伏し、王子は親族や臣下の者たち一同が参集した大饗宴に出席して、その日を送った。そして、その翌日、占星師の指定した黄道吉日に、スンダラセーナ王子は長い間待ち焦れていた婚約者マンダーラヴァティー姫との結婚式を挙げた。そして、舅のマンダーラ・デーヴァ王は、男の子がなかったので、婿をえたことを喜こび、非常に高価な宝玉を数多く王子に贈り、また自分の死後に於ける王国の継承権を与えた。父王マハーセーナは自分の希望と栄光にふさわしい大祝典を挙行し、恩赦を行い、国民に黄金と衣服の雨を降らせた。

そして、マンダーラ・デーヴァ王は、スンダラセーナ王子がマンダーラヴァティー姫と結婚したことによって幸福となったことを見て、また都城の女がのこらず参加して歌い踊った結婚式の祝宴に出席した後、マハーセーナ王から叮重な見送りを受けて、自分の領土へ帰っていった。シャシャーンカ・プラの王マヘーンドラーディトヤも、大荒野の王ヴィンドヤ・ケートゥも、その領地に帰還した。

こうして、幾日かが過ぎてマハーセーナ王はスンダラセーナ王子が徳すぐれ、国民に愛好され

ていることを考えて、王子を王座につけて、みずからは森に赴いた。かくて、スンダラセーナ王は王国を得た後、自分の腕の力で敵勢を征服し、侍臣たちを大臣として、全土を統治した。」

　侍臣のヴィヤーグラ・セーナは湖水の岸でムリガーンカダッタに物語をした後、さらに言葉を続けました。

「王子さま、この素晴らしい物語をカンヴァ仙がわれわれを慰めるために隠棲処で話してくださったのですが、その話の終りに慈悲深い聖仙はわれわれに、このように申されました。

『されば、伜たちよ、脱出しがたい怖ろしい苦難を堅固な心をもって耐え忍ぶ者は、このように最も冀求する目的を達成するのであり、勇気を失って心の砕ける者は失敗するのである。従って、失望落胆することを止めよ。そなたたちの主人ムリガーンカダッタもすべての侍臣たちと再会し、シャシャーンカヴァティーと結ばれて、永く統治をするであろう。』

と、偉大な仙からこのように言われましたわたくしどもは、元気を出し、その夜を其処で過しました。そして、翌朝隠棲処を出発し、旅に疲れ果てて漸くこの森に到着しました。非常に喉がかわき、空腹に苦しんでいましたので、果実をとろうとして、ガネーシャの棲処であるこの樹に登り、到頭果実になってしまいました。王子さま、あなたさまの苦行のお蔭で、わたくしどもは救われました。以上が、竜の呪詛で、あなたと離ればなれになりましたわたくしども四人の運命でございます。今では呪詛は終りましたし、一同が再会したのですから、あなたの目的達成のためにウッジャイニーへ参りましょう。」

と、侍臣のヴィヤーグラ・セーナから聴きまして、ムリガーンカダッタはシャシャーンカヴァティーと結ばれることを確信して、その夜を其処で過しました。

九

　こうして、その翌朝になりますと、ムリガーンカダッタ王子はこの美しい湖水の岸から立上り、ガネーシャ神の住む樹木を礼拝した後、再会した侍臣たちと一緒に、またシュルタ・ディを連れて、シャシャーンカヴァティーと会うためにウッジャイニーに向って出発しました。それから、一行は再び、夥多の湖水がありタマーラ樹が黒く生い繁って雨期に於ける夜のように暗い森を横ぎり、また徘徊する狂象のために葦や竹が踏みしだかれてアルジュナ樹のみが著しく目につく林を通り、また水清く花の咲き乱れた溪谷を渡って、遂にウッジャイニーの近くに到着しました。そこでガンダヴァティー河に行き、水浴をして疲れをいやした後、河を渡って王子は侍臣たちと一緒にマハーカーラ焼屍場を通り抜けて、ウッジャイニーに着きました。この都は太古以来栄え、カルマセーナ王が統治していました。都城の大通には、種々の武器を携えた警備官が、数多くの素姓すぐれた勇気ある武士に身辺を警護されて、警備していましたし、都の周囲には山頂に似た城壁をめぐらして、象、馬、戦車が道に溢れて、地理に詳しくない者は到底城内に這入れそうも

ありませんでした。このように何処からも近づきがたいウッジャイニーを見て、ムリガーンカダッタは失望して、自分の侍臣たちに語りました。

「何という不運なことだろう。この都に着くまで幾百の労苦を重ねたにもかかわらず、この都に這入ることができない。愛人をうるために、どんな手段があるだろうか。」

と、王子が語るのを聴いて、侍臣たちは

「王子さま、何か手段を考えねばなりません。必ずある筈です。」

と答えました。侍臣たちの言葉を聴いたムリガーンカダッタは数日の間城外に留って歩きまわりました。ヴィクラマ・ケーシャリンは以前に籠絡しましたヴェーターラを思い出し、王女を住居から拉致させようとしました。色が黒く、背が高く、駱駝のような頸をもち、象の顔をし、牡牛のような脚、梟のような眼、驢馬の耳をもつヴェーターラがやって来ましたが、ウッジャイニーの城内に這入ることはできず、帰ってしまいました。シヴァ神の恩寵はこのような輩が都城に這入るのをふせいでいるのでした。

さて、ムリガーンカダッタが都に這入ることを念願して侍臣たちに取巻かれて悄気ていますと、政略に通じた婆羅門シュルタ・ディがムリガーンカダッタに言いました。

「王子さま、あなたは政略の原理を御存じであるにも拘わらず、何も知らない人のように心を迷わされるのですか。自他の差を見極めない者に、どうして勝利がありえましょう。この都城の四つの門の各々に、二千頭の象、二万五千頭の馬、一万輛の戦車と十万名の歩兵が警護のために

配置されています。ですから、われわれのごとき少人数で強いて這入ろうとすることは、飛んで火に入る夏の虫の喩に洩れず、成巧を齎らす所以ではありません。また、この都は少数の軍隊をもってしても、陥落させることはできません。圧倒的な大軍と戦うことは、徒歩で象と立向うというものです。ですから、あなたがナルマダー河の怖ろしい水の怪物から救ってやられた友人のプリンダ族の王マーヤーバトゥ、その友人で、その関係からあなたに好意をもつマータンガ族の強大な王ドゥルガ・ピシャーチャ、そして幼少の時から梵行を守り勇名高いキラータ王シャクティ・ラクシタと結び、これら諸王の全軍を糾合しましょう。こうして、この大軍で四方を埋め、王子さまの所期の目的を達成しましょう。それに、キラータ王はあなたから使者の来ることを知って、それを待っていることを、どうしてお忘れになったのですか。また、マーヤーバトゥはあなたとの約束を守って、あなたがマータンガ王の領土に来られるのを待っています。ですから、ヴィンドヤ山の南側の斜面にあるカラバ・グリーヴァというマータンガ王の城寨へ参りましょう。其処へキラータ王シャクティ・ラクシタを呼びましょう。こうして、彼等と一緒になって、目的達成のために努力しましょう。」

というシュルタ・ディの言葉を聴いて、実現の可能性があり賢者も同意すると考え、ムリガーンカダッタは侍臣たちと一緒に、その意見に賛成しました。

そして、その翌日、空の休みなき旅行者であり有徳の人の友である太陽が登り、世界を照しはじめると、太陽を礼拝して、マータンガ王ドゥルガ・ピシャーチャの住居のあるヴィンドヤ山の

南側の斜面に向って出発しました。十人の侍臣と婆羅門シュルタ・ディを連れ、王子は自分の意図のように広大の荒野を横断し、自分の計画のように深い森林地帯を通り抜け、湖水の岸にある樹の根元に夜は寝て、自分の意志のように高いヴィンドヤ山を登りました。山の頂から南側を下りて行くと、遠くにビッラ族の村落が見えましたが、其処には象牙や鹿皮が積み重ねられていました。そして、遂にマータンガ王の城寨カラバ・グリーヴァの近くに来ました。あたりには、ビッラ族の村落が群がっています。村落に這入ると、シャバラ族の群衆が到る処にいます。彼等は孔雀の羽や象牙を身に飾り、虎の皮を着て、鹿の肉を食べています。王子の一行がカラバ・グリーヴァ城寨への道を探していますと、その地に既に到着していましたシャバラ王マーヤーバトゥの偵察兵たちが以前に会ったことのある王子を見つけました。彼等は直ちにマーヤーバトゥ王のところへ行き、王子の到着したことを告げましたので、王は軍勢を率いて王子を出むかえました。そして、王子の頸に抱きついて、健康をたずねた後、侍臣たちも一緒に馬に乗せ、自分の幕舎に案内しました。そして、シャバラ王は侍衛官を派遣して、マータンガ王に王子の到着を報らせました。すると、マータンガ王ドゥルガ・ピシャーチャも急遽自分の居城から駈けつけてきました。彼の身体は岩石の頂のごとく、皮膚の色はタマーラ樹のごとく、あたかも第二のヴィンドヤ山さながらでありました。このマータンガ族の首長はムリガーンカダッタ王子に近づくと、既に遠くから頭を地面に下げ、恭々しくお辞儀をして

「本日、王子さまのごとき高貴のお方が、わたくしの住居に御来臨を賜わりますとは、まことヴィンドヤ山に住みたまうドゥルガー女神がわたくしに恩寵を授けられたのでございます。まこと、光栄至極に存じ、わたくしは幸せ者にございます。」

と言って、真珠や麝香などの贈物を奉ったのでした。王子は非常に悦こび、それを嘉納しました。そして、すべての人々は其処に宿営しました。杭につながれた象、馬小屋に入れられた馬、そして幕舎を作った歩兵などで、大森林は蔽われてしまいました。

こうして、森の中で水浴をし祝禱を終えたムリガーンカダッタ王子が食事を終えた後、侍臣たちと一緒に、マーヤーバトゥも侍坐して、ゆっくりと話していましたとき、ドゥルガ・ピシャーチャが敬愛の情をこめて王子に語りました。

「このマーヤーバトゥ王はずっと以前から此処に来ておりまして、わたくしと一緒に、あなたのお指図をお待ち申しておりました。それなのに、王子さま、このように長い間、あなたさまは何処にいられました。何をなさっていられたのですか。また、どのような御用なのか、いま、お知らせくださいませ。」

この言葉を聴いて、ムリガーンカダッタが一部始終を話しますと、ドゥルガ・ピシャーチャはマーヤーバトゥと一緒に

「御安心なさいませ。そのようなことは、われわれにとって雑作もないこと。カルマセーナ王を捕縛して、此処へしょっぴいて来ましょう。そして、王女シャシャーンカヴァティーを強引に拐かして参りましょう。」

と言いました。ムリガーンカダッタは非常に悦こびましたが、叮重に

「よく考えて、適当に計って貰いたい。」

と言いました。

その翌朝、ムリガーンカダッタはグナーカラを友人のキラータ王シャクティ・ラクシタの許へ派遣しました。グナーカラはキラータ王のところへ行き、事情を話しましたので、日ならずしてキラータ王は大軍を率いて来ました。百万の歩兵、二十万頭の馬、大勇士の乗った狂象一万頭、そして八万八千輛の戦車がキラータ王に従って来ましたので、旗や傘蓋で天を蔽うほどでありました。ムリガーンカダッタは悦こんで、友人や侍臣たちと一緒に出迎え、歓迎して、キラータ王を幕営に請じ入れました。その間に、マータンガ王およびマーヤーバトゥの友人・親族の人々も、使者を受けて、みな集ってきました。陣営は、波濤のさかまくように怒号し、河の注ぎこむように軍勢が続々と到着し、海さながらに膨れあがっていきました。同時に、ムリガーンカダッタの心の悦こびも大きく脹らみました。ドゥルガピシャーチャは諸王に真珠、麝香、衣服、果実からとった酒などを贈り、またシャバラ王マーヤーバトゥも彼等に水浴、膏薬、飲食物および寝床などを贈りました。ムリガーンカダッタはこれらの諸王と一堂に会合して食事をともにしましたが、彼等王たちは身分に応じて、それぞれの席につきました。マータンガ王でさえ、離れたところではありましたが、王子の面前で食事をしました。

こうして、その翌日、新来のキラータ族などの兵士も休息すると、ムリガーンカダッタは象牙

造りの王座に着き、列座の諸王から王子にふさわしい挨拶を受けました。そこで、王子は侍衛の兵士を遠ざけた後、マータンガ王などの友人に

「今となって、何故に逡巡するのだ。この全軍を率いて、何故に急遽ウッジャイニーへ行かないのか。」

と言いました。その言葉を聴いて、婆羅門シュルタ・ディが王子に言いました。

「王子さま、お聴きください。政略に通暁した人々の意見に従って、わたくしが申しあげましょう。勝利をえようとする人は、実行しえられることと実行しえられないことの区別を十分に察知すべきであります。手段を用いても成就されないことは、実行しえられないこととして捨てるべきであります。手段を用いて成就しうること、それは実行すべきことであります。この場合、手段は四種あります。すなわち、談判、贈与、離間と襲撃の四つであります。この四者の先のものほどよく、後のものほど悪いのであります。従って、王子さま、この場合、まず談判をなさるべきです。カルマセーナ王は貪慾ではありませぬ故、贈与は役立ちません。また、かの王の臣下の者たちは王から不当な待遇を受けておらず、怒ってもいませんし、貪慾でもありませぬ故、君臣の間を離間することもできません。襲撃も危険です。かの王は要害の土地に拠り、極めて強大な軍勢を擁していまして、未だ曾て他王から征服されたことがありません。それに、有力な者でさえ、戦争に常に勝利の栄冠を得るとは限りません。まして、娘の求婚者がその親族を殺すことは、不穏当であります。ですから、ともかく談判することにして、使者を派遣しましょう。もし

それが失敗したならば、攻撃を加えるのも致しかたないでしょう。」

と、シュルタ・ディが語るのを聴いて、その場にいた人々はみな

「その通りだ。」

と賛成をし、彼の読みの深いことを賞讃しました。そこで、ムリガーンカダッタは一座の諸王と相談をし、キラータ王に随行してきたス・ヴィグラハという外交手腕を具えた有名な婆羅門をカルマセーナ王の許に派遣し、書翰と口上を伝えさせることにしました。この使節はウッジャイニーに赴き、侍衛官に案内されて王宮に這入り、大臣を周囲に従えて獅子座に坐っているカルマセーナ王に会見しました。使者は王に一礼して席に着き、王から歓迎の言葉を受け、挨拶が終りますと、ムリガーンカダッタ王子の書翰を王に差出しました。プラジュニャー・コーシャという大臣がそれを受取り、封印を破って手紙を出し、大声で読み上げました。

「拝啓、カラバ・グリーヴァ城塞の麓にある森林の傾斜地より、大王にして覇王なるアヨーディヤー都城の主アマラダッタ王の息子にして、諸王の服属を受けて武威赫々たるムリガーンカダッタは、ウッジャイニーの大王にして家系の大海の月なるカルマセーナ王に、公けに御挨拶申上げる。貴下に息女あり、いずれ他に嫁がされると存ずる。貴下の息女を、われに賜わりたい。姫は余にふさわしき妻と、神の定めたまえるところ。かくて、われらは親族となって、嘗ての敵意は消滅すべし、もし御同意なき場合は、わが腕に訴えて、所期の目的を達成する用意あり。」

と、手紙が読みあげられますと、カルマセーナ王は怒って、大臣たちに言いました。

「奴等はいつも身のほどを弁まえず、われわれに敵対する。見よ、このように、今日愚かにもわれわれに書翰をよこしたのだ。自分の名を先に書き、われわれを蔑しんで後に書いている。そして、自惚れおごって、最後のところに、腕の力を自慢している。返答は無用じゃ。娘のことは話にならん。さぁ、使者よ、立去れ。おまえの主人のしたいようにするがよい。」

と、カルマセーナ王が言いますと、気魄のある婆羅門ス・ヴィグラハは、その場にふさわしい言葉を言いました。

「かの王子を見ずに、あなたは法螺を吹く、愚か者が。用意なされよ。王子が来られたならば、自分と相手の差がおわかりになろう。」

と、使者が言いますと、一座はどよめきました。王は

「立去れ、おまえを殺すわけにはいかぬ。われわれは、どうすればよいか。」

と言いました。一座の他の者は唇を噛んで、自分の手を揉み搾り、

「どうして、今、追いかけて、あ奴を殺してはいけないんだ。」

と、互いに話しあいました。他の者は己をおさえて、

「この男は帰らせろ。こんなへらず口を叩く奴に、どうして怒るのだ。われわれのすることを見るがいい。」

と言いました。また、ある者は眉をしかめて、弓に矢をつがえて引くような様子をし、顔を真赤にして黙って立っていました。

このように満座の者が怒っているのを尻目に、使者のス・ヴィグラハは退出して、ムリガーンカダッタの幕舎に帰ってきました。カルマセーナの言葉を王子と友人たちに復命しますと、王子は軍勢に進軍を命令しました。

こうして、大海のごとき大軍は、激しく吹きつのる風に波のたちさわぐがごとく、司令官の命令によって行動を起しましたが、進撃する人も馬も象も海の怪物さながらでした。味方の王たちの心には満足を与え、臆病者どもには恐怖と混乱を惹き起させたのでした。そして、ムリガーンカダッタは大地を勇みたつ馬の泡と象の前額部からの分泌液で泥濘と化せしめ、太鼓の音で有情を聾にしながら、勝利のためにウッジャイニーに向って、ゆっくりと軍を進めました。

一〇

こうして、ムリガーンカダッタは友人たちを伴ない、戦備をととのえた軍勢を率いて、ヴィンドヤ山脈を越えて、ウッジャイニーの国境に殺到しました。そのことを知って、カルマセーナ王も邀撃するための戦備をととのえ、軍勢を率いて決然と都城から出撃しました。両軍が接近し、互いに指呼の間に対峙すると、やがて勇士の悦こぶ戦闘がおこりました。戦場は人獅子（人頭獅子身の怪物、ヴィシュヌ神の第四権化）の咆哮に怖れおののく臆病なアスラたちが逃げまどうヒラニヤ・カシプ*の住居さながらでした。矢雨は激しく絶え間なく空を飛びかい、折れて飛び散り、あたかも稲に群がる蝗虫のように勇士の上に落ちました。象の額にかけられた真珠の飾りは刀で紐を切られて飛散し、この戦争に臨んだシュリー女神の頸飾が切れて飛散するのもさこそと思わせました。戦場は死の神の口さながらで、鋭い槍はその牙のごとく、人や馬や象を呑みつくすのでした。蕪矢で切りおとされた勇士の首は空に高く飛び上り、あたかも天女に接吻しようとしているかのようでしたし、勇士の首のない胴体は将軍の華々しい活躍を喜こんでよたよたと踊っているかのようでした。このようにして、戦は五日間続き、勇士の戦死するもの数知れず、流れる血は河をなし、死屍累々として山をなしました。

五日目の夕方、ムリガーンカダッタが侍臣たちと密議を凝らしていますと、婆羅門シュルタ・ディが秘かに近づいてきて、

「あなたがたは戦争をしていられた間に、わたくしは乞食僧の姿をして、ウッジャイニーに忍びこみましたが、城門には警護の者はいませんでした。城内でわたくしが見てきたことをお話し申しましょう。カルマセーナ王が戦争に出撃しますと、シャシャーンカヴァティーは母の許しをえて、王宮を出て、父の戦勝を祈願するために、城内にあるガウリー女神*の神殿に赴き、其処に参籠しておりました。王女は腹心の侍女からあなたのことを聴き、王女の心はあなたに引きつけられました。そして、同時に、愛の神の箭でシャシャーンカヴァティーはあなたに釘づけにされてしまいました。そのとき以後、王女はあなたと父王の無事を祈りつづけ、苦行とあなたから離れていることとで、痩せていられます。ですから、今夜秘かに忍んで行って、人影のないガウリ

ー女神の神殿から姫を人知れず連れ出しましょう。そして、姫をマーヤーバトゥの居城へ連れて行かれたら、味方の諸王が敵の憤激に対して背後をまもり、わたくしも一緒に其処へ参りましょう。もう戦争は終りにしましょう。兵士をこれ以上殺したくはありません。あなた御自身と舅となられるカルマセーナ王の身の安泰を考えましょう。実に戦争というものは人命を害い、不適当な策であります。戦争は政略の中で最も悪いものと、賢者は申しております。」

と、シュルタ・ディが申しますと、ムリガーンカダッタは侍臣たちと一緒に馬に乗って、秘かに夜にまぎれて出かけました。城門には少数の番人がいましたが、寝こんでいましたので、一行は家に残った女も子供も睡りこんでいるウッジャイニーに忍びこみました。それから、シュルタ・ディの教えてくれた道順で、プシュパ・カランダ遊園の中にある有名なガウリー女神の神殿に行きました。月はちょうど東方の顔を飾り、その光は皓々と照って、神殿を照らしだしていました。

話かわって、シャシャーンカヴァティーは、侍女たちが姫の身の廻りの世話などで疲れて寝こんでいるにもかかわらず、睡らないで思案していました。

「妾のために、両軍の勇敢な王さまたち、王子さまたちが毎日毎日死んでしまわれる。それに、妾のために戦争に訴えてまで妾を望んでいられるあの王子さまは、ガウリー女神が嘗て夢の中で妾の夫になる方だと、お告げになられた。的を射てあやまつことのない恋の神の矢は絶えず妾の心を引き裂いて、それを持ち去っては、王子さまに贈っている。それにもかかわらず、父はこのように哀れな妾を、昔からの敵意と自分の自尊心のために、王子さまに与えようとなさらない。

運命が逆であるとき、夢の中で女神さまのお告げとて、何になろう。妾にはどんなにしても愛しい方に会える機会はない。だから、あの王子さまや父上に戦場で不幸が起ったことを聴かない間に、希望のなくなった妾は自分の生命を捨てよう。」

と、王女は悲しみながら立上り、ガウリー女神の像の前に行き、自分の上衣を裂いて作った紐をアショーカ樹にかけました。

ちょうどそのとき、ムリガーンカダッタは侍臣たちと一緒に、その遊園に這入って、馬を樹につなぎ、ガウリーの神殿へ行きました。侍人の一人ヴィマラ・ブッディが近くに王女を見て、自分から言いました。

「王子さま、御覧なさいませ。誰か知りませんが、美しい娘が縊れて死のうとしています。一体、あの娘は誰でしょう。」

と言うのを聴いて、王子はその娘を見て言いました。

「ああ、あの娘は誰だろうか。恋の神カーマの妃ラティだろうか。それとも幸運の女神シュリーが権化したのだろうか。とにかく、樹蔭にかくれて、暫く様子を見よう。そうすれば、あの娘が誰か、何とか判るだろう。」

と言って、王子は侍臣たちと一緒にかくれていました。シャシャーンカヴァティーは女神に祈りを捧げました。

「苦悩する者を若しみより救いたまうガウリー女神よ、妾の前生の罪業のために、今生に於い

てムリガーンカダッタ王子さまが妾の夫にならずとも、恩寵を頂きまして来世には必ず妾の夫としてくださいませ。」

と唱えて、王女は女神を拝み、眼に涙を浮べて頸に紐を結びつけました。そのとき、侍女たちが眼を覚まし、王女の姿が見えないので狼狽し、探しまわって急いで王女の傍に近づき、

「ああ、ああ、王女さま、何をなされます。早まったことを、何故あなたは。」

と言って、王女の頸から紐を解きました。こうして、乙女が羞じらってうなだれていますと、ガウリー女神の神殿の中から声が聞こえてきました。

「娘よ、望みを失うではない。シャシャーンカヴァティーよ、夢の中でそなたに告げた言葉はいつわりではない。そなたの前生の夫ムリガーンカダッタは、今そなたの傍に来ているではないか。さあ、行くがよい。そして、一緒に全土を享受せよ。」

という言葉を突然に聴いて、王女はいくらか心を動揺させて、ゆっくりとあたりを見まわしました。すると、ムリガーンカダッタの侍臣のヴィクラマ・ケーシャリンが王女の傍に歩みよって、指先で王子を指ざしながら言いました。

「姫、ガウリー女神のお告げは本当であります。あなたの夫となられます王子さまは愛情の絆に引きずられて、あなたの前にいられます。」

この言葉を聴きますと、王女は横目で愛する人が侍臣たちの真中に立っているのを見ました。王子の姿は諸星宿に取囲まれて天から下りてきた月輪さながらに、他人と比べるときの美しい容

姿の標準もさこそと、王女の眼に甘露を注ぎこみました。一瞬、王女は柱のように動かず、喜こびのあまり身体の毛髪は立ち、*あたかも恋の矢雨に射られて矢尻の翅で蔽われているかのようでした。ムリガーンカダッタは王女に近づき、愛情のこもった蜜の滴った声で、王女の羞じらいをのぞくにふさわしい言葉を言いました。

「姫よ、生れ故郷も、王国も、そして身内の者さえも捨てさせて、あなたはわたしを美徳の鎖につなぎ、わたしを奴隷にして、遠くから惹きつけられました。森林の中に住み、大地に寝て、果実を食べ、太陽の激しい暑熱に苦しめられ、そして苦行のための憔悴も、姫よ、あなたの美しい姿を見て、わたしの眼に甘露の雨を降らしてくれるという、このような果実を得たことで酬われました。あなたがわたしを愛して、わたしの望みを適えてくださるのならば、わたしの国の都城の女たちに眼の饗宴をさしてやってください。戦争はもうやめましょう。両軍に平和をもたらしましょう。」

このようにムリガーンカダッタが言いますと、そのときシャシャーンカヴァティーは顔をうつむけたままで、ゆっくりと言いました。

「妾こそ、あなたのお徳に購われた奴隷です。あなた、わたしたちの幸わせのために、あなたが善いとお考えになるように、なさってくださいませ。」

と、甘露の言葉を聴いて、ムリガーンカダッタは元気を取戻し、満足して、ガウリー女神を拝み、お礼の言葉をのべた後、王女を自分の馬の後にのせ、また王女の侍女たちと侍臣たちの馬にのせ

て、一同剣を抜きはなって夜にまぎれて城外へ出ました。警護兵は十一人の姿を見ましたけれども、憤怒の形相ものすごいルドラ神のように手強いと見て、とめることはできませんでした。そして、ウッジャイニーを出ると、シュルタ・ディの忠言に従って、マーヤーバトゥの居城へシャシャーンカヴァティーを伴って行きました。

「あの人たちは誰だ。何処へ行ったんだ。」

と、城門警護の者たちが騒いでいる間に、ウッジャイニーの城内では、王女の連れ去られたことが次第に判りました。そのことを報告するために、王妃は都城長官をカルマセーナ王の陣営に急遽派遣しました。都城長官はカルマセーナ王の許へ行き、事の顛末を報告しました。王がそれを聴いて、王女の救出の不可能なことを考え、敵軍を襲撃することなく、夜中沈黙を守っていました。一方、ムリガーンカダッタの陣営では、マーヤーバトゥをはじめ諸王たちは、シュルタ・ディの意見に従い、不意の襲撃に備えて武装したまま、その夜を過しました。

翌朝になって、賢明なカルマセーナ王は実際のことが判りましたので、ムリガーンカダッタの陣営に使者を派遣しました。

「ムリガーンカダッタは余の娘を策略で連れ去った。それは、それでよい。余の娘にふさわしい夫は、ムリガーンカダッタを措いて、他にないのであるから、されば、王子は卿等と一緒に余の宮殿に来て頂きたい。余は娘の結婚式を掟通りに執行したい。」

このように、カルマセーナ王の使者は王の口上を伝えましたので、シュルタ・ディをはじめ諸

王たちはこの提案に賛成しました。そして、使者に、

「カルマセーナ王は都に帰還されたい。さすれば、われわれは王子を案内して参上いたしましょう。」

と言いました。この言葉を聴いて、使者は帰って、王にその通り復命しますと、カルマセーナ王はそれを承諾し、軍隊を引きつれてウッジャイニーへ帰りました。それを見て、諸王たちはマーヤーバトゥを先頭に、シュルタ・ディと一緒に、ムリガーンカダッタの許へ行きました。

話かわって、ムリガーンカダッタはシャシャーンカヴァティーを伴うて、マーヤーバトゥの都城カーンチャナ・プラ*へ到着しました。其処では、後宮の妃妾たちが王子の一行を手厚く迎えました。王子は目的を達して愛人とともに休息しました。その翌日、諸王たちがシュルタ・ディと一緒に集ってきました。キラータ王の勇士シャクティ・ラクシタも軍勢を率いて到着し、シャバラ王の膂力すぐれたマーヤーバトゥも、マータンガ王の猛勇ドゥルガ・ピシャーチャも、夜咲く白蓮のようなシャシャーンカヴァティーのより添うムリガーンカダッタの姿を見て喜こび、慶祝の言葉を述べました。一同が王女に挨拶を終りますと、彼等は王子にカルマセーナ王の口上を伝え、また王がウッジャイニーの自分の宮殿に退いたことを話しました。

かくて、ムリガーンカダッタは移動する都城ともいうべき本陣を其処に構えた後、諸王を一堂に集めて協議しました。王子は諸王たちや侍臣たちに

「余は結婚式のためにウッジャイニーに行くべきか否か、意見を聴かして貰いたい。」

と尋ねました。諸王や侍臣たちは
「あの王は悪党である。あの王の王宮に行って、何処によいことがありましょう。あそこでは、何もすることはありません。姫は此処に来ているのですから。」
と、異口同音に言いました。ムリガーンカダッタは婆羅門シュルタ・ディに尋ねました。
「婆羅門よ、そなたはまるで無関心であるかのように黙ったままでいるが、そなたは今の意見に賛成なのか、それとも不賛成なのか、言え。」
すると、シュルタ・ディが申しました。
「お聴きくださるならば、申しあげましょう。王子さまはカルマセーナ王の宮殿に行かるべきだと、わたくしは思います。何故ならば、かの王がこの口上を伝えてきましたのは、悪意あってのことではありません。もしそうでないなら、王女が連れ去られたとき、十分な兵力をもっていたカルマセーナ王が、どうして戦争をやめて、引揚げるでしょうか。王子さまは軍勢を引きつれて行かれるのですから、王子さまがかの王の宮殿に行かれたとて、どうすることができましょう。王子さまが行かれるならば、かの王は必ずや悦こびましょうし、娘に対する愛情から、かの王はわれわれの有力な味方となりましょう。かの王がこのように申すのは、正式に結婚式を挙げたいという正当な理由からです。ですから、王子さまがウッジャイニーへ行かれることが適当と存じます。」
と、シュルタ・ディが言いますと、一同は彼の言葉に賛同し、

「如何にもそうだ、その通りだ。」
と言いました。
そこで、ムリガーンカダッタが彼等に言いました。
「余も賛成だ。だが、余は父母の列席なく結婚式を挙げることを好まぬ。されば、父母を呼びに、誰かを迎えに行かせよう。父母の意向を聴いて、適当な処置をしよう。」
と語って、王子は相談をし、侍臣のビーマ・パラークラマを両親の許へ派遣した。
話かわって、アヨーディヤーの都では、ムリガーンカダッタの父アマラダッタは、時日が経過する中に、王子の追放されたのはヴィニータ・マティが虚偽を讒言したためであることを人の口から知りました。そこで、王は怒って、悪い大臣を家族もろとも処刑しましたが、王子の追放を苦に病んで、見る影もなく悴れはててしまいました。そして、城外に出て、ナンディ・グラーマというシヴァ神の祠堂で妃妾たちと一緒に苦行をしていました。
王が長い間其処に参籠していますと、ビーマ・パラークラマが早馬を飛ばしてアヨーディヤーに到着しました。都城に到着してみると、王子が不在のために、市民は絶望に打ちひしがれていましたが、彼の到着が密偵によって予め伝えられていましたので、市民たちは彼を取囲んで王子の消息を尋ねました。ビーマ・パラークラマは一部始終を聴かせた後、父王のいるナンディ・グラーマへ赴きました。其処では、苦行のために痩せ衰えたアマラダッタ王が王妃とともに王子の消息を待ち焦れていました。ビーマ・パラークラマは王に近づき、王の足許に平伏しますと、王

は彼の頸を抱きしめて王子の消息を尋ねましたので、彼は涙ながらに話しました。

「陛下、王子ムリガーンカダッタさまは御自身の勇気でカルマセーナ王の女シャシャーンカヴァティーさまを得られました。でも、王子さまは孝心厚い方でございます故、御両親の列席なしに結婚式を挙げることは好しくないと存ぜられます。そのため、王子さまは大地に頭をつけられて、御両親さまにお出かけ賜わりますようにと、お迎え申しあげるためにわたくしを御派遣になりました。王子さまは今シャバラ王マーヤーバトゥの宮殿で御両親さまのおいでをお待ちになっていられます。」

と言った後、ムリガーンカダッタのそれまでの苦労の一部始終を王に話しました。アマラダッタ王はビーマ・パラークラマの話を聴いて、王子のために万事好都合に運ばれていることを確信し、嬉しさのあまり親しく出発することを宣示しました。こうして、王は王妃とともに象に乗り、藩侯・大臣を伴い、象および騎馬の軍勢を率いて、王子に会いたい一心で出発しました。日ならずして、途中障碍もなく、シャバラ王の領土にある王子の本陣に到着しました。そのことを知ると、長い間両親に会いたいと念じていたムリガーンカダッタは、諸王とともに出迎えに出ました。遠くから象に乗って来るのを見ると、王子は馬から下りて、両親の足許にひれ伏しました。そして、父に抱きしめられた王子は、身体で父王の腕を、満足で父の心を、そして涙で眼を満たしました。母后も王子をかなり長い間抱きしめて、しげしげと眺め、再び別れるのを怖れているかのように、長いこと離すことができませんでした。そして、ムリガーンカダッタに味方をした諸王は、王子

に紹介されて、盟主であるアマラダッタ王と王妃に敬意を表しました。王と王妃とは、また、二人の一人息子に対する友情から、万難を排して王子のために尽してくれた侍臣たちを犒いました。

アマラダッタ王はマーヤーバトゥの王宮に這入って、足許にひれ伏す嫁のシャシャーンカヴァティーと会いました。マーヤーバトゥから贈物を受けた王は、王妃と嫁をつれて王宮を出て、自分の本陣を設けました。そして、其処へすべての王を招き、王子も同席して食事をし、歌や音楽や踊りを楽しんで、その日を過しました。アマラダッタ王は、将来転輪聖王たるべきムリガーンカダッタが栄光をかちえたことによって、自分の目的は達せられたと考えました。

話かわって、英明なカルマセーナ王は大臣と協議して、使者をムリガーンカダッタの許に派遣しました。

「いずれにせよ、おんみはウッジャイニーに来られないであろう。されば、スシェーナという余の息子を派遣しよう。スシェーナは妹シャシャーンカヴァティーを掟に従って、おんみに委ねるであろう。われらの敬愛の情を重んじて頂けるのならば、無垢なる太子よ、掟を無視してシャシャーンカヴァティーと結婚式を挙げることをしないで頂きたい。」

という旨を、書翰と使者の口上とで王子に伝えさせました。

ムリガーンカダッタがこの口上を父王の本陣で聴いたとき、父王みずから使者に返事をしました。

「カルマセーナ王を措いて、このような勝れた御意見を述べられる方が、他に誰かいるであろ

うか。かの王は実にわれらに好意を寄せてくださっている。どうかスシェーナ王子を御派遣になっていただきたい。御息女の結婚式は御満足のいくようにとり行うでありましょう。」

と言って、使者を歓待して送り帰らせた後、アマラダッタ王は王子、シュルタ・ディおよび諸王に語りました。

「われわれは今アヨーディヤーに帰ろう。其処で結婚式を挙げれば、一層華やかであろうし、スシェーナ王の接待も贅を尽せるであろう。マーヤーバトゥ王は此処でスシェーナを待っていて頂きたい。スシェーナが来れば、御一緒に後からアヨーディヤーにおこし願いたい。われわれは結婚式の準備のため一足さきに帰還しよう。」

と、王の言葉を聴いて、一同は賛同しました。

こうして、その翌日、王は王妃とともに軍勢を引きつれ、ムリガーンカダッタはシャシャーンカヴァティーを伴い、諸王と侍臣たちを引きつれて出発し、マーヤーバトゥを後に残してスシェーナを待たせました。大軍の進む有様は深く不気味な海の荒れ狂うがごとく、騎馬軍の動きは幾百の波の逆まくに似て、見渡すかぎりの地平線には無数の進軍する兵士が洪水のごとくに溢れ、湧き起る騒音は他のすべての音を消してしまいました。父と息子は道を次第に進んで、キラータ王シャクティ・ラクシタの王宮に到着しました。一行はキラータ王から厚くもてなされ、宝玉、黄金、素晴らしい衣服などを贈られました。其処に一日逗留して、食事をし休息をとった後、軍勢を率いて出発し、遂に自分の都アヨーディヤーに到着しました。高台の窓に登ってあちらこちらに動く女の姿は美しい若芽をふくらませた満開の蓮が風に揺ぐさまに似ていましたし、長い間の不在から妃をつれて帰ってきた王子の姿を見んものと、女たちがきょろきょろとさす眼は踊る青蓮に似ていました。そして、旗が翩翻（へんぽん）とひるがえる都城に入る王子たちの姿は、風に吹かれて泣立つ池の面に群がる白鳥さながらでした。シャシャーンカヴァティーの素晴らしく美しい姿を見て、市民は驚き、

「カルマセーナ王の娘を見るならば、大海も二度と娘のラクシュミー（幸運と美の女神）の美しさを自慢しないだろうし、ヒマーラヤ山ももはやガウリー（シヴァ神妃パールヴァティーはヒマーラヤ山の娘）のことを鼻にかけないであろう。」

と話しあいました。

次の日、占星師たちが王子の結婚式のため黄道吉日を決定しますと、父のアマラダッタ王は結婚式の準備をととのえました。都城は諸方から集ってきた種々の宝玉で満され、富の神クベーラの都城も及ばぬほどでした。

そして、間もなく、マーヤーバトゥ王の使者が喜び勇んで到着し、侍衛官に案内されてきて、王に告げました。

「王さま、スシェーナ王子とマーヤーバトゥ王とが到着されて、お二人ともアヨーディヤーの国境に待機していられます。」

と聴くとすぐ、アマラダッタ王は将軍に命じて、軍隊を率いてスシェーナを迎えに行かせました。

ムリガーンカダッタも友情から将軍と一緒にアョーディヤーから王子を迎えに行きました。二人の王子は遠くから馬を下りて歩みより、互いに頸を抱き合って、挨拶をかわした後、仲好く同じ車に乗って都城に這入りましたが、二人の王子の姿は都の女たちの眼に饗宴でありました。

スシェーナ王はアマラダッタ王に謁見し、手厚く歓待されましてから、妹のシャシャーンカヴァティーの御殿に行きました。王子が御殿に這入ると、王女は座から立上って、兄王子に縋りつき涙を流しました。王子は席につくと、羞ずかしそうにしている王女に言いました。

「父上がそなたに『娘よ、そなたはそなたに相応わしいことをしたのだ。ムリガーンカダッタがガウリー女神によってそなたの夫に定められていることを、今わたしは夢の中で知ったのだ。夫に従うことは女の最高の義務だ』と話すよう仰せられた。」

と言いますと、顔をうつむけたまま羞じらっていました乙女は、自分の心に

「おまえの望みは達せられたのよ。」

と言いきかせたかのように、羞じらいの気持も薄らぎました。

スシェーナはアマラダッタ王の面前でシャシャーンカヴァティーに、二千バーラの黄金、五頭の駱駝に積んだ宝玉、その他黄金の装飾品など、王女自身の財産を渡しました。そして、

「これはシャシャーンカヴァティー自身の財産であります。外に、父上から贈られたものもあります。それは結婚式の際に祭壇の上で順次に渡します。」

と言いました。それから、一同はムリガーンカダッタや随従の人々もともどもに、王の前で飲食

をし、愉しく一日を過しました。

次の日、黄道吉日になりますと、アマラダッタ王は嬉しさのあまりそわそわしていましたが、ムリガーンカダッタは平常通り沐浴などの行事をすませました。シャシャーンカヴァティーの美しさはそのまま花嫁の飾りでしたが、宮女たちは古式に則って王女の化粧をし、着附をしました。花婿と花嫁はスシェーナが宰領した結婚式場を出て、聖火の燃えている祭壇に登りました。祭壇の上で、ムリガーンカダッタ王子はシャシャーンカヴァティー姫の手を把りましたが、姫の手は携えた蓮華の花の色で映えていました。二人が聖火の周りをまわったとき、シャシャーンカヴァティーの顔は、怒っているかのように見えましたが、熱と煙のために赤くなっていましたし、眼には涙を一杯ためていました。炒った米ひと握りが火中に投ぜられると、恋の神が努力の甲斐のあったことを喜こんで笑うかのような音がしました。最初のひと握りが投げこまれたとき、スシェーナは姫に父から贈られた五千頭の馬、百頭の象、黄金二百バーラ、勝れた衣服や宝石や真珠などの装飾品を積んだ九十頭の象を贈り、そのあと投げこまれる度に、贈与はその度ごとに二倍になりました。

結婚式が終ると、祭りの太鼓が轟きわたる中を、ムリガーンカダッタは新妻と一緒に自分の御殿に這入りました。そして、父王は臣下のものや市民たちに、上は藩侯の集りから下は鸚鵡やサーリカー*に至るまで、それぞれにふさわしく、象や馬や宝玉や装飾品、飲食物などを頒ち与えられました。王はそのとき余りにも惜し気なく頒地を与えられたために、庭の樹木さえ衣裳や装飾

品が結びつけられ、あたかも地上の如意樹のように見えました。

アマラダッタ王はまた王子の義兄となったスシェーナを聖水で浄め、頭に名誉のターバンを冠らせ、敬意を表して、封土、象、馬、多量の黄金、衣服、百人の美女を贈りました。また、シャバラ王マーヤーバトゥにも、キラータ王シャクティ・ラクシタにも、マータンガ族の首長ドゥルガ・ピシャーチャにも、その妻妾眷族に至るまで、またムリガーンカダッタ王子の侍臣たちにも、婆羅門シュルタ・ディにも、封地、牛、馬、黄金、衣服を贈り、その労を犒いました。こうして、キラータ王を始めとして、スシェーナ王子が帰国した後、アマラダッタ王は王子の勇気に援けられて、平和に王国を統治しました。ムリガーンカダッタ王子も、長い苦闘の末にえたシャシャーンカヴァティーとともに、ビーマ・パラークラマなどの侍臣たちと長く幸福に暮しました。

訳註

八 アヨーディヤー――サラユー河に臨む現在のオードに比定される。仏典に見えるコーサラ(憍薩羅)国の首都で、日種族の首都。

〃 ヴァジラ――インドラ神の武器、「金剛杵」と訳される。

九 ヴェーターラ――本書「解題」を見よ。

〃 ウッジャイニー――古代のマーラヴァ王国(現在のマールワー地方)の首都。西インドに於ける学芸と商業の中心地として栄えた。現在のウジェイン。

10 シヴァ神――ヒンドゥ教三大神の一。ヒマヴァット(ヒマーラヤ)山中に居を定め、四面、十臂、三眼、黒頸、額に半月を戴き、虎皮をまとい、妃ウマーとともに白牛に乗り、弓槍斧戟を武器とする破壊の神。

〃 髑髏――シヴァ神の装飾品の一つ。

一一 マガダ国――現在のビハール州南部とベンガル州西部を中心に、古く栄えた王国。

〃 ヴァーラーナシー――現在のベナーレス。

一四 タクシャシラー――現在パキスタンの首都ラーワルピンディの北西に遺跡がある。古代に於いて、北西インドの交通の要衝であり、学芸の中心地であった。

〃 ラクシュミー女神――幸運と美の女神。

一五 ヴィディヤーダラ――ヒマーラヤ山中に住み、シヴァ神に仕える、神通力(ヴィディヤー)を持つ(ダラ)

という神話上の種族。

一六　ジャンブ――蒲桃(ふともも)の樹。

一七　ドゥルガー女神――シヴァ神の妃ウマーの別名。

〃　ヴィーナー――絃楽器の一つ。わが「琵琶」の原形か。

一九　タームラリプティー――ガンジス河口に臨む海港。現在のタムルク。

〃　マーナサ湖――カイラーサ山上にある聖地で、白鳥の生地とされ、毎年雨期に白鳥が集まるとされる。

二一　シヴァ神の男根――シヴァ神はしばしば男根(リンガ)の形で礼拝される。これをシヴァ・リンガという。

二五　ガネーシャ神――智恵と障礙の神で、シヴァ神と妃パールヴァティー(すなわち、ウマー女神)の子とされる。ガネーシャは障礙をひき起すが、またそれを除去する。そのため、すべて事を起す際に祈念される。象頭、壺腹、一本の象牙をもっている。

〃　キラータ族――森林や山中に棲む蛮族で、主として東部ヒマーラヤ山地に棲む。

二八　クシャトリヤ――王侯貴族、武士階級の身分の者。「刹帝利」と音写される。

〃　ヴィンディヤ山――デカン高原の北辺に連る山脈。

〃　シッダ族――シヴァ神の従者の一、八種の神通力を持つといわれる半神。

三一　マーヤー――原義は「幻」。神格化され、ドゥルガー女神(シヴァ神妃パールヴァティー)と同一視され、アヌリタ(不正)またはアダルマ(不法)の娘とされ、ムリティユ(死)の母とされる。

〃　輪廻――古代インド人は、人間の生命は現世の一生に限られているとは考えず、前世の所行によって今生に果報を受け、今生の所行によって来世に果報を受けるとされた。このように、車輪が廻って果しない

ように、生れかわり死にかわりして生々流転すること。

三三　業――輪廻の思想に於いて、生々流転に際しての形態――すなわち、人間に生れかわるか、畜生に生れかわるかなど、の条件となる人間の所行。

三四　ヴィナーヤカ――ガネーシャ神の別名。

三五　アヴァンティ――古代のマーラヴァ地方の王国名。

〃　シャバラ――ヴィンドヤ山中に住む蛮族。

三六　マータンガ族――キラータ族の一種。

四二　コーシャラ――マハーナディー河上流地域を中心に栄えた国。

四三　ヴィディシャー――現在のビールサ。

四五　黒分――満月から後の半月。これに対し、新月から満月に至る期間を白分という。

四七　アンガ――現在のベンガル州北部バーガルプル地方の古名。

〃　アガスティヤ――太古の聖賢の名。アガスティヤ仙が海を呑みほす物語は『マハーバーラタ』三・九六―一〇九に見える。

四八　ヴィシュヌ神――ヒンドゥ教の三大神の一。

五三　クローシャ――距離の単位。原義は「叫び声」で、叫び声がとどく距離の意。正確な数字は不明である。

五六　マラヤ――西南インドのマラバール地方の山脈の名。現在の西ガッツ山脈の一部で、栴檀の産出で著名である。

六四　ビッラ――ヴィンディヤ山中に住む蛮族の一。シャバラと同一視されることが多い。

六九　アヒッチャトラー——現在のローヒルカンド(南部にあった古代の都市)。

七〇　ヴァースキ——三大竜王の一。

〃　シェーシャ——三大竜王の一。

〃　ヴァイシュラヴァナ——富の神クベーラの別名。

七五　ラグ王——古昔の偉大な王者で、『ラーマーヤナ』の主人公ラーマの祖先。

〃　比丘——出家して僧となった者をいい、原義は「食物を乞う者」の意。

〃　有情——この世に存在する者の意。

〃　ブッダ——「さとりをひらいた人」の意。「仏」と写され、「ほとけ」と読まれる。

〃　菩薩行——菩薩 bodhisattva とは、仏教の究極の目的であるさとりを求めて、衆生に恩恵を与え、宗教的な実践を修行して、未来に仏のさとりを開こうとする者の意で、この菩薩が修行する宗教的実践を菩薩行という。仏教では、菩薩行として六波羅密が説かれるのであり、本書八七頁以下の物語は、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の六篇に分れて説かれている。詳しくは、『カター・サリット・サーガラ』(三)二三三頁を見よ。

七七　本生物語——ジャータカのこと。ブッダが自らの述懐の形式で、ブッダが遠い過去世に於いて各種の動物、王など種々の生を受け、衆生のためにわが身を犠牲にして、苦行を修め、この苦しい菩薩行が因となって今生に於いてブッダとなったことを説くブッダの前生物語である。

八一　パータリプトラ——マガダ国の首都。現在のパトナの近郊に遺趾がある。

八三　如意樹——天上の楽園に生えていて、願いごとを何でもかなえてくれるという樹木。

八四　ナンダナ園——インドラ神の天上の楽園。

八六　パンチャーラ——ガンジス河中流地域にあった古代の地方名。

八七　波羅蜜——パーラミターの音写。「さとりの彼岸に到達した状態」の意で、菩薩がさとりをひらくために修行する六種の行をいう。

〃　クル・クシェートラ——現在のデリー近郊を中心に栄えた古代の王国。

九三　ケーダーラ山——ヒマーラヤ山脈の一部、現在のケダール山。

〃　マンダーキニー河——ガンジス河の支流の一。

九五　カルナータ地方——現在のマドラス州の南部一帯の地方。

九六　クムダ——白い水蓮の一種。

九八　阿羅漢——アルハットの音写。原義は「世の尊敬に値いする者」の意であるが、仏教では「最高のさとりを得た者」の意。

九九　シンハラ島——現在のセーロン島。

〃　チトラグプタ——ヤマ(閻魔)の侍臣の一人で、人間の善行・悪行の記録者である。

〃　ブラフマンとルドラ——ブラフマンはヒンドゥ教三大神の一であり、ルドラは元来暴風雨の神であり、後にシヴァ神として展開した。茲では、ブラフマンは人間の善行の記録者であり、ルドラは人間の悪行の記録者とされると解せられるが、その根拠は不明である。

一〇〇　シュヴェータ——古聖仙の名。この聖仙をめぐる本書の伝説の根拠を、訳者は寡聞にして知らない。

一〇四　ヨーガ——「瑜伽」と音写され、呼吸を調えるなどの方法で心を一点に集中して修行すること。

一〇四 アヒッチャトラ――現代のローヒルカンドにあった王国。首都がアヒッチャトラー。
一〇七 チャンディカー女神――シヴァ神妃パールヴァティー女神の恐怖面を示すドゥルガー女神の別名。
一一〇 トゥリガルター――現在パキスタンの域内にあるラホールの古名。
一一一 カイラーサ山――ヒマーラヤ山中にありとされ、シヴァ神の住居のあるところ。
一一三 五火――祭典の際に用いられる五つの神聖な火。
一一五 ヴェーダ――バラモン教の聖典で、インド最古の文献。詳しくは、辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』二五―三八頁を見よ。
〃 プラヤーガ――ガンジス河とヤムナー河の合流点に位するアッラーハバードの古名。
一一六 カシュミーラ――現在のカシミール。
〃 クリシュナ神――元来はバーガヴァタ派の神であるが、後にヴィシュヌ神の権化の一とされる。好色な牧童として表象され、インド文学に種々の伝説が伝えられている。
一一七 ダイトヤ――神話的種族の一。アスラ族と同一視される。
〃 パーターラ――地下界の名。
〃 ダークシナートヤ地方――デカン高原一帯をさす。
〃 シュリー・パルヴァタ――古伝説に著名な山の名であるが、比定不詳。
一一八 マヤ――古伝説にダイトヤ族の建築家として知られたアスラの名。
〃 バーナ――アスラの一人。
〃 ダーナヴァ族――ダイトヤ族の別名。

一二一 カーマの神――愛慾の神。
〃 アスラ――「神に非る者」と解釈され、悪魔の代表とされる。
一二五 マーラヴァ――現在の西インドのマールワー地方。
一二八 ハンサ・ドヴィーパ――「白鳥の島」の義であるが、位置不詳。
一二九 ラージャヴァルタ石――大理石の一種か。
一四〇 クムドヴァティーの花――クムダ(白い水蓮)のこと。
〃 ガーンダルヴァ式の結婚――親の許諾なしに恋人同志が自由に行う結婚。
一四三 スメール山――神話上の山で、この世界(ジャンブ・ドヴィーパ)の中心をなすといわれる。
一四六 ヌヤグローダ樹――榕樹のこと。
〃 プラティシュターナ――ゴーダーヴァリー河の上流に沿う現在のパイタン。
一四九 その名にふさわしい話――ヴィチトラ・カタとは「面白い(ヴィチトラ)物語(カター)をする男」の意。
一五三 ラーダー――現在のベンガル州西部の古名。
一五六 ラータの国――現在の西インドのグジャラート地方の古名。
一五八 大魚に呑まれて生きたまま助けられた話――詳しくは、『カター・サリット・サーガラ』㈡一六四頁を見よ。
一六三 身体には爪や歯の痕がのこり――『カーマ・スートラ』には、愛戯として愛人の身体につける爪痕や歯型が詳細に記述されている。
一六八 ガンダルヴァ――空界に住み、天上の医師あるいは楽士とされる半神的存在。

一七〇 トリ・ヴィクラマセーナ王とヴェーターラ――原典では、茲に『ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー』(ヴェーターラ二十五話)が挿入されている。この物語はインド文学に著名な物語で、数種の伝本があるが、『カターー・サリット・サーガラ』の所伝が最も美しい。

一八一 ニシャダ――『マハーバーラタ』に有名なナラ王の国であるが、位置不詳。

〃 アラカー――位置不詳。

一八五 三条の皺――トリ・ヴァリーといい、美女の特徴としての美点の一つに数えられている。臍の上部に横に連る「三条の皺」を意味し、文学作品に屢々見られるとともに、彫刻などにも現わされている。

一八六 シャシャーンカ・プラ――位置不詳。

一八八 白分――新月から満月に至る半ヵ月のこと。

二〇〇 シュヴェータ・ドヴィーパ――「白い島」の義。位置不詳。これを「白人の島」と解し、キリスト教徒の住居と見做す学説がある。

二〇三 プリンダ族――ヴィンドヤ山中に棲む蛮族の一。

二〇九 ナダ・クーバラとランバー――財宝の神クベーラの子、本書一一二頁を見よ。ナラ・クーバラともいう。ランバーは天女の一人で、インドラ神の楽園に於ける第一の美女であり、ナラ・クーバラの妻であったが、悪魔ラーヴァナに誘拐されたが、ナラ・クーバラに救出された。『ハリ・ヴァンシャ』に詳し。

二三〇 ヒラニヤ・カシプ――ダイトヤ(アスラ)王の名。慴慢で、遂にヴィシュヌ神がナラ・シンハの形で現われて、ヒラニヤ・カシプを引裂いたという。

二三一 ガウリー女神――シヴァ神の妃パールヴァティーの別名。

二三五 喜こびのあまり身体の毛髪は立ち――インドの古典文芸では、「身体の毛髪が立つ」とか「頭髪が逆立つ」という表現は、非常な喜こびを表現するときにのみ用いられる。

二三七 カーンチャナ・プラ――「黄金の都」の意。位置不詳。

二五五 サーリカー――つぐみ科に属する鳥。

解題

本書には『カター・サリット・サーガラ』第十二巻に収められる「ムリガーンカダッタ王子の物語」を選んだ。比較文学的には「大魚に呑まれて生きたまま助けられた話」のように、既に第二巻に述べられたモティーフがあり、また呪法に使用される芥子の実が記述されているなど、われわれの興味を惹かずにはおかないが、六波羅密に関する仏教の教義に則って物語が述べられ、またヒンドゥ教に於ける輪廻の教義が比喩的に述べられるとともに怪奇なヒンドゥ教祭式が記されていて、宗教史に関する貴重な資料をわれわれに提供してくれるとともに、シャバラ族の部落の様子が描写され、また食事の際の席次に言及されている点など、インド社会の姿をありのままに、われわれに提示するものとして、興味深いものがある。

特に、本巻に於いてわれわれの注意を惹くのは、醜悪な姿をした悪魔ヴェーターラの登場である。この死屍に憑くという悪魔がインド人の鬼霊説の中にどうして発生したか不明であり、また vetāla という語そのものの語源も未だ明らかにされていない。仏典では vetāḍa の形で見え、恐らくは『金光明経』Suvarṇabhāsottamasūtra に見えるのが最も早いかと考えられるが、『孔雀明王経』Mahāmāyūrī とか『文殊師利根本儀軌経』Mañjuśrīmūlakalpa のごとき密教経典では、他の諸々の悪魔と列挙されている。しかし、その特徴その他に関して、特別の説明は見られない。

ヒンドゥ教の聖典では、『ハリ・ヴァンシャ』に始めて見え、その後二三のサンスクリット文献にその名が散見するにとどまり、『カター・サリット・サーガラ』第十二巻に於いて最も活躍する。すなわち、本書に訳出した部分である。この記述によると、ヴェーターラは怪異な姿で表象され、「色が黒く、背が高く、駱駝のような頸をもち、象の顔をし、牡牛のような脚、梟のような眼、驢馬の耳を持つ」と記されている。常に死屍に憑いて、屍体を生命のあるもののように動かすのであり、その物凄さは想像に余りあろう。本書では省略したが、この「ムリガーンカダッタ王子の物語」に挿入される「トリ・ヴィクラマセーナ王とヴェーターラの物語」が、インド文学史上に有名な『ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー』（ヴェーターラ廿五物語）の一伝本で、他に二三の伝本もあるが、『カター・サリット・サーガラ』の所伝が最もすぐれている。この物語は、プラティシュターナの王トリ・ヴィクラマセーナが奸智に長けた呪師にたのまれて、屍体をとりに行くが、その屍体に憑いたヴェーターラが廿四篇の興味ある物語を王に聞かせ、遂に呪師の奸計を王に知らせて殺させるという物語である。本書の一三五頁以下に、ヴェーターラに関してヒンドゥ教の怪奇な祭式が述べられているが、『ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー』に於いても同じような描写が見られ、八世紀の劇作家バヴァ・ブーティの『マーラティー・マーダヴァ』に見られる呪師の姿とともに、古代末期ないしは中世初期に於けるインド社会の怪奇な様相を伝えるものであり、怖ろしさ、またはなまなましさの点で、シェイクスピアの『マクベス』に於ける魔女の舞台などに匹敵するもの、あるいは凌駕するものとも言いうるであろう。

附録　インド古典文学の大要

長い歴史と広い領域をもつインドが、その文化の面で複雑な様相を呈するであろうことは想像にかたくないが、特にインドの場合、永い期間に亘るインド・アリヤン人の優勢に続いて、中世にイスラム教徒の進出があり、また近代に於いてイギリスの支配を受けるなど、次元の異なる三つの文化の相互浸潤があり、しかもそれらが相克を続けた点に特色が認められるであろう。さらに、民族・言語の面から見ると、インド・アリヤン人とならんで先住民たるドラヴィダ族の文化の展開があった。殊に、タミル語のごとき、西暦紀元の頃から南インドに独自な文学作品を生み出して今日に至っている。しかし、インド文化の主流は飽迄もインド・アリヤン的であり、イスラム教権の支配下に於いても、事あるごとに頭を擡げてきた。従って、インドの文学を論ずるにあたっても、まずインド・アリヤン人の文学を過去四千年に亘って探るべきであることは言うまでもない。すなわち、インド・アリヤン人の文学こそインド文学の主流であったのである。この文学の主流は通常言語の上から古代、中期、近代の三期に分たれる。古代の文学はヴェーダ語を含めて所謂サンスクリット語を、中期の文学は中期インド・アリヤン語(パーリ語を含めてプラークリット語とアパブランシャ語)を、そして近代の文学は八、九世紀の頃から始まるヒンディー語とベンガル語を中心に、各地方の方言を用いた。このように、多くの言語を用いる文学作品を限られた紙数の中で論ずることは至難であり、また近代語は筆者の専攻外でもあるので、玆では古代の文学について簡単に作品を紹介することにし、中期の文学作品は必要あるときに言及する

にとどめることにする。

一、ヴェーダ文学

インド・アリヤン人が、いつ、どこから、パンジャーブ地方に進出してきたか、それを教えてくれる資料はない。しかし、彼等がインドの土地に定住するに至ったとき、彼等がみずからの司祭者を有しており、また種々な祭式とそれに関聯する神聖な伝承をもっていたことは事実である。彼等はこれをインドの土地に於いて、彼等に特有な宗教観と宗教的体験とでもって、さらに発展させた。これらが集大成されて厖大なヴェーダ文献となったのであるが、彼等が日常神々を讃えた讃歌の集録である『リグ・ヴェーダ』が、その最初に成立した。ヴェーダとは元来「知識」の意味で、特に宗教的な神聖な知識を意味し、そしてこの神聖な知識を集録した聖典の総称となった。

さて、ヴェーダ文献には、四種の別がある。『リグ・ヴェーダ』、『サーマ・ヴェーダ』、『ヤジュル・ヴェーダ』および『アタルヴァ・ヴェーダ』がこれであるが、玆に四ヴェーダというのは四部の書を意味するのではなく、多種多様な書巻を包含する文献の総称である。各ヴェーダは、サンヒター(本集)、ブラーフマナ(梵書)、アーラヌヤカ(森林書)およびウパニシャッド(奥義書)の四つの構成要素から成っているのであるが、この中で最も主要な部分はサンヒターで、マントラ(讃歌、祭詞、呪詞)の集録である。従って、一般に『リグ・ヴェーダ』とか『アタルヴァ・ヴェ

ーダ』とか言うときは、それぞれのサンヒターを指していう。『リグ・ヴェーダ』は讃歌の集録であり、『サーマ・ヴェーダ』は歌詞と旋律の集録であり、『ヤジュル・ヴェーダ』は祭詞の集録であり、『アタルヴァ・ヴェーダ』は攘災と調伏に関する呪頌の集録である。これらの各ヴェーダ本集に附属して祭祀の説明を主体とする散文の部分をブラーフマナと言うが、その中に含まれる神話、伝説の類はインド最古の散文文学として興味深いものがある。次に、アーラヌヤカは森林の中で伝授されるべき秘儀、秘法を載せた部分で、祭式の説明と同時に、それに関聯して哲学的思弁の進歩の跡を示している。ウパニシャッドは宇宙の森羅万象の一元を説く哲学的部分である。インド人の考えでは、これらの四部分は人間の著作とは見做されず、古代の聖賢が感得した啓示とされ、シュルティ(天啓文学)として総括されたのであるが、後にはヴェーダの伝承を任務とする婆羅門の間に所伝の相違が起り、遂に学派が生じた。その結果、サンヒターにも異本が生じ、さらに祭式に関する見解や規定の相違から多数のブラーフマナ以下の文献が成立した。かくして、ヴェーダ文献の構成は実に複雑となった。しかも、さらに、前述の「天啓文学」の補助文献として、幾種類かの聖伝文学(スムリティ)が存在する。これらも細目の差異によって幾多の学派に分れ、それぞれに所依の文献が存在したのであって、その全貌は今日到底窺うべくもない。学派の消長盛衰に従って散逸した文献も少くなく、現在に伝わるものは嘗て存在した大文学の一部に過ぎないのである。

ヴェーダはこうしてマントラを中心にして祭祀に関聯して展開した宗教文献の総称であり、史

実の記載とか、あるいは哲学・倫理を記述したものでもない。また、文学的価値も部分によって異なるのであって、到底現代人の文学鑑賞の標準で論ずることはできない。しかし、『リグ・ヴェーダ』の讃歌、『アタルヴァ・ヴェーダ』の呪頌、また各種のブラーフマナ文献に於ける神話・伝説・古譚の類など、種々の意味で、われわれの鑑賞に堪え、また注目に価する作品も少くない。

これらのヴェーダ文献の成立には極めて長い期間を要したことは言うまでもないが、天啓文学の主要なものの成立は大体に於いて西暦紀元前一五〇〇年頃から前五〇〇年頃に至る約一千年の間にわたると想定されている。その間に、バラモン教の中心はパンジャーブ地方からガンジス河中流地帯に移り、バラモン教権の確立、バラモン階級至上の社会制度が展開した。しかし、それと同時に、その反動としてウパニシャッド哲学が擡頭し、またクシャトリヤ階級を中心に仏教、ジャイナ教、バーガヴァタ教などの新興宗教が興るに至った。

二、『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』

インド・アリヤン人がパンジャーブ地方からガンジス河流域に進出した頃には、各部族の間に相当に激しい争覇の戦が繰返された。『リグ・ヴェーダ』に見られる「十王の戦」などその一例であるが、その最も大きなものがバラタ族の骨肉相食む大戦争であった。『マハーバーラタ』は実にこの大戦争を記述した大叙事詩である。

古代インドの英雄として著名なバラタ王の後裔に、ハスティナー・プラ(デリーの東北方)のカウラヴァ

王家と、インドラ・プラスタ(現在のデリー)のパーンダヴァ王家とがあり、それぞれに国を治めていた。しかし、パーンダヴァ王家の名声が高くあがり、国が繁栄したので、カウラヴァ王家のドゥルヨーダナはこれを妬み、叔父シャクニと計り、賭博の好きなパーンダヴァ王家のユディシュティラ王を誘い、散々に負かして、その王国、財宝、兄弟、妻を失わせた。ドゥルヨーダナの父ドリタラーシュトラは、ユディシュティラの叔父であった関係から、自分の息子たちの態度を面責し、パーンダヴァ王家の者を奴隷の境遇から免れさせた。しかし、十二年間は放浪の生活をし、十三年目も姓名を秘して過し、十四年目になって旧領土を回復してもよいという条件で釈放された。

さて、パーンダヴァ王家のユディシュティラ、アルジュナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァの五王子と、五王子の共通の妻ドラウパディーは十二年の間放浪の生活をし、十三年目にはマツヤ国王ヴィラータの許に召使として仕えていた。たまたま、カウラヴァ王家がマツヤの領土に侵入してきて、掠奪を擅にした。五王子はヴィラータ王を助けて、カウラヴァ王家の軍を破り、勝利を収めた。この戦闘が終って三日で、五王子たちの放浪十三年の期日が満了したので、彼等は身分を明かし、使者を派遣して、旧領土の返還を要求した。しかし、使者は何の返答も得られず、むなしく帰されたので、茲にパーンダヴァ王家とカウラヴァ王家とは各々同盟軍をあつめて、古来聖地とされたクル・クシェートラ(クル平原)に於いて、十八日間にわたる大会戦が行われるに至った。激戦の結果、カウラヴァ王家の軍は潰滅し、パーンダヴァ王家の勝利に終り、ユディシュティラがインドラ・プラスタに於いて王位に即いた。

その後、インドラ・プラスタでは、アルジュナの子孫が王位を継いだ。この王家は、インドの伝承では、月種族と呼ばれる。

現在に伝わる『マハーバーラタ』は本文十八篇および附篇『ハリ・ヴァンシャ』を合せて十万頌（一頌は十六音節二行から成る）を超えるのであるが、その中核をなす前述のバラタ族の大戦争の物語は全体の約五分の一に過ぎず、その間に多くの物語、史詩あるいは哲学詩が挿入されており、古代インドの宗教、神話、伝説、風俗、法制、社会制度等に関して重要な資料を含んでいる。これらの挿話の中には『ナラ王物語』をはじめインド文学史に、さらには比較文学の上から重要な説話が少くない。わが『一角仙人の物語』の祖型の一つである『リシュヤ・シュリンガ(羚角仙人)の物語』も、このように挿入された挿話の一つであり、またヒンドゥ教の聖典として今日もなお三億の教徒に無限の福音をもたらすという『バガヴァッド・ギーター』は元来バーガヴァタ派の経典であったと考えられるが、パーンダヴァ族の勇士アルジュナにバーガヴァタ派の教祖クリシュナが語る烈々の言葉として挿入されている。

インド・アリヤン人がガンジス河中流地域に勢力を占めた頃、コーサラ国の首都アヨーディヤーには日種族の王家が君臨していた。『ラーマーヤナ』はこの王家のラーマ王子の行状を讃えた大叙事詩で、七篇、約二万四千頌から成っている。

コーサラ国のダシャラタ王の王子ラーマは、ヴィデーハ国王ジャナカの娘シーターと結婚し、父王の寵愛と人民の信望を集めていた。ダシャラタ王がラーマ王子を太子としようとしたとき、王の寵妃カイケーイーが異議をとなえ、実子バラタの立太子とラーマを十四年間森林に放逐することを、ダシャラタ王に承諾させた。ラーマは妃シーターを連れて森林に退き、バラタが太子となった。ラーマはダンダカの森で森

の静寂を乱す悪魔を退治たので、ランカー島(現在のセイロン島)に本拠を持つ魔王ラーヴァナは大いに怒り、シーターをかどわかしてランカーに連れ去る。ラーマは事情を知り、シーター捜索の旅に出る。ラーマはパンパー湖のほとりで猿王スグリーヴァを援けたことから、シーターの捜索に猿軍の援助を受けることになる。賢明な猿ハヌマットはスグリーヴァ王の命によりシーターの捜索にむかい、その所在を確めた。単身ランカーに潜入し、ラーヴァナの宮殿を探るとともに、シーターに会ってラーマの救援の近いことを知らせる。猿軍は大挙してランカーに侵入し、猿軍と魔軍の戦闘、ラーマとラーヴァナの死闘がはじまり、ラーヴァナは遂にラーマに殺され、シーターは無事に救出された。しかし、シーター妃は身の潔白を疑われたので、それを証明するために火中に身を投じたが、火神アグニがこれを証明した。こうして、ラーマはシーター妃を伴うてアヨーディヤーの都に凱旋し、国民歓呼の裡に王位に即いた。そして、最後に、ラーマをヴィシュヌ神の権化たらしめるための物語が述べられている。

『ラーマーヤナ』のテーマは後世の文芸に大きな影響を及ぼし、サンスクリット語所伝ではカーリダーサ(四、五世紀)の『ラグ・ヴァンシャ』(ラグ王の王統)、プラークリット語所伝ではプラヴァラセーナ(五世紀か)の『ラーヴァナ・ヴァハ』(ラーヴァナの殺戮)のごとき叙事詩、八世紀のバヴァブーティの戯曲『ウッタラ・ラーマ・チャリタ』(続ラーマ王子行状記)などはその流れを汲むものである。後代になって、ラーマがヴィシュヌ神の権化として尊崇されるようになると、ラーマへの絶対帰依を説く『ラーム・チャリット・マーナス』(ラーマの行状の湖)がトゥルシー・ダース(一五三二―一六二三)によって書かれた。この作品はヒンディー語文学の最高の傑作とい

われ、ヒンドゥスタン一億の民衆の聖典とされている。

三、古典文学

前五世紀の頃に、偉大な文法家パーニニが出て、当時の学識ある者の言語を固定した。パーニニの文法はその後カーティヤーヤナ（前三世紀頃）およびパタンジャリ（前二世紀頃）によって補修されて完成し、ここに古典サンスクリット語が成立した。古典サンスクリット語はこの後インドの宗教・文学・学術の高級標準語として用いられ、今日に至るまでその位置を保ってきたのであるが、この言語は『リグ・ヴェーダ』などの言語すなわちヴェーダ語に比べて、単純化、貧弱化、規制化の傾向があったが、一面に於いて派生語および複合語に関する技巧的な方法が発達し、修辞と技巧を主とする美文体のカーヴヤ文学を生み出すに至った。特に、四世紀の初めにグプタ朝が興ると、文学者は宮廷の保護を受けて、詩文の妍を競うたのであるが、八世紀以後にラージプート族の諸王朝が興った後も、この趨勢は永く持続し、その宮廷は文学と芸術の中心であった。十一世紀になると、カシュミールが古典文芸の中心地として、クシェーメーンドラ、ソーマ・デーヴァなど数多くの文人詩人が輩出した。また、十二世紀には、ベンガル地方のラクシュマナ・セーナ王の宮廷が文芸の中心となり、ジャヤ・デーヴァなどの詩人が出た。

宮廷叙事文学――インド文学史に於いて、カーヴヤ文学の先駆は、西暦二世紀の前半頃クシャ

ン朝のカニシカ王の宮廷に仕えたといわれる仏教詩人アシュヴァ・ゴーシャ（馬鳴）の作品である。ブッダの生涯を讃美した『ブッダ・チャリタ』（ブッダの所行）、ブッダの異母弟ナンダのエピソードを謳った『サウンダラーナンダ』（ナンダとスンダリー妃）がその代表作で、洗練された文体の中に熱烈な信仰を昇華させている。

グプタ朝のチャンドラグプタ二世の宮廷に仕えたとされるカーリダーサはインド古典文芸の詞宗とされ、劇作家・詩人としてインド文学史に不朽の名をのこしている。『クマーラ・サンバヴァ』（軍神クマーラの誕生）と『ラグ・ヴァンシャ』の二篇の叙事詩があるが、前者はヒンドゥ教の神話をテーマとし、後者は嚮に述べたようにラーマ伝説をテーマとしている。

その後、六世紀の末に於けるバーラヴィの『キラータールジュニーヤ』（キラータとアルジュナの戦）、マーガ（年代不詳、八世紀か）の『シシュパーラ・ヴァダ』（シシュパーラの殺戮）、また、バッティ（年代不詳、七世紀か）の『ラーヴァナ・ヴァダ』（ラーヴァナの殺戮）、シュリー・ハルシャ（年代不詳）の『ナイシャダ・チャリタ』（ナイシャダ王の行状）などが現われた。いずれも『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』に見られる神話・伝説をテーマとしているが、修辞をこらし、詩学の教えるあらゆる技巧を弄していて、インド人はカーヴヤの傑作と賞讃する。

歴史文学――インドでは、歴史文学もまた宮廷文芸に属する。インド人の常として現実と理想ないしは空想とを判然と区別する批判力に欠け、それが深く、しかも長く、インド人の精神活動

を支配してきたために、インド人は歴史の記述に於いても史実を神話的扮飾と文芸的表現の中に包みこんでしまっている。こうして、インドの歴史文学は伝説的要素と史実とが混然一体をなした文芸作品なのである。このような作品の第一に挙ぐべきは、七世紀のバーナの『ハルシャ・チャリタ』(ハルシャ王行状記)である。この作品はハルシャ王(在位六〇六—六四七)の宮廷に仕えた詩人バーナが宮廷詩人として庇護者たる王の事蹟を讃美したもので、創作と真実とが巧みに交ぜ織りにされている。従って、史料としては限られた意味しか認められないが、ハルシャ王の宮廷に逗留した玄奘の『大唐西域記』の記事などとならんで、当時の宮廷生活、風俗習慣などを知る好資料である。

チャールキヤ朝のヴィクラマーディティヤ六世(在位一〇七六—一一二七)に仕えたカシュミールの詩人ビルハナの『ヴィクラマーンカ・デーヴァ・チャリタ』(ヴィクラマーンカ王行状記)も庇護者たる王の事蹟を讃美した作品であるが、阿諛追従の美辞麗句に満ち、史料的価値は殆んどない。

カシュミールの詩人カルハナの『ラージャ・タランギニー』(王統史)は、歴史文学として、インド文学史上に最も傑出した作品とされる。カルハナは、ひろく先人の著作、王朝の歴史、王の勅許状あるいは碑文などの史料を渉猟して、完全なカシュミール王統史を編述しようとし、一一四八年にこの書を完成したのであるが、その意図は極めて史学的であったにも拘わらず、史実と伝説とを区別せず、また年代に関しても批判力に欠けており、史料の取捨選択にあたっても深い考

察を加えていない。しかし、『ラージャ・タランギニー』は文化史の資料としては比肩するものもないほどに価値が多いとされ、特に最後の二章は十一・二世紀に於けるインド文化に関し比類なく内容豊富な資料である。

抒情詩、箴言詩——『リグ・ヴェーダ』の讃歌は既にある意味では抒情詩であったが、抒情詩としての最初の作品はプラークリット語で書かれた『サッタサイー』(七百詩頌)で、アンドラ王朝のハーラ王(二世紀)の作とされる。恋の喜こびと悲しみを美しく歌っており、特に村落に於ける男女の感情を描写して美しい詩境を表現している。サンスクリット語で書かれた抒情詩では、カーリダーサ(既述)の『メーガ・ドゥータ』(雲の使)と『リトゥ・サンハーラ』(季節のめぐり)が傑作とされる。前者では追放された男の雲に托する妻への思慕が美しく叙べられ、後者では季節のうつりかわりが自然と恋情に托して微妙に奏でられている。「君がまなこは青蓮に……」と、『海潮音』に美しく歌われている詩は『シュリンガーラ・ティラカ』(恋情の装飾)の中に見られるが、この詩集もカーリダーサの作品とされる。しかし、真偽さだかでない。

アマル(年代不詳、六世紀か)の『アマル・シャタカ』(アマル百頌集)は閨情を美しく悩ましく詠い、バルトリハリ(七世紀)の『シュリンガーラ・シャタカ』(恋情百頌集)、『ニーティ・シャタカ』(処世百頌集)および『ヴァイラーギヤ・シャタカ』(離欲百頌集)の三種の詩集は、古代インド人が人生の三目的としたカーマ(恋愛)、アルタ(実利)およびダルマ(宗教的義務の遂行)に則って人生

を詠じたものである。玆にシャタカというのは詩集の形式であって、大体に百頌から成る詩集であるが、七・八世紀の頃に流行した。上述のほかに著名なものとして、太陽神スールヤを讃美したマユーラ（七世紀）の『スールヤ・シャタカ』、チャンディー女神を讃美したバーナ（既述）の『チャンディー・シャタカ』などがあり、熱烈な信仰を詠っているが、カーリダーサの流麗さ、アマルの濃艶さには到底及ぶべくもない。サンスクリット語の抒情詩壇の最後を飾ったのはジャヤ・デーヴァで、彼の『ギータ・ゴーヴィンダ』は牧童に化身したクリシュナと牧女ラーダーの恋愛遊戯をテーマとした田園交響詩である。

箴言詩としては『チャーナキヤ・シャタカ』（チャーナキヤ箴言百頌）が著名であり、教訓詩としてはカシュミールの詩人ダーモーダラグプタ（八世紀末）の『クッタニー・マタ』（女将の訓え）、クシェーメーンドラの『サマヤ・マートリカー』（やりてばば）などの名が知られているが、この二作品は相当にエロティックである。

戯曲——戯曲は、ギリシア文学におけると同様に、サンスクリット文学においても重要な位置を占めているが、その起原は明確でない。今日に伝わる最古の作品は西暦二世紀に属するが、すでに演劇の理論の拘束を受けたことが認められ、その背後に相当に長い発達の歴史のあったことを想像させる。研究の初期の段階においては、彫刻・医学・天文・数学などの場合と同様に、インド劇におけるギリシア劇の影響を強調する学者も出たが、十分な論拠はなく、指摘された類似

点も決定的なものではなかった。インドにおいても、独立に戯曲の発達する要素が多く存在したことは明瞭であって、たとえば「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」の暗誦吟詠に身振りがともない、また会話の分担が伴ったことが知られている。また、戯曲を意味するナーティヤという語は「踊る」を意味する語根ナットに由来し、この語根は同じ意味のサンスクリット語根ヌリトの俗語形であることから（サンスクリット語で、「舞踊」はヌリッタ、「身振り」はヌリティヤ）、インド戯曲が舞踊、とくに民間信仰を中心にした民間娯楽ないしは宗教儀式に関係のあることも否定されない。おそらく、古来存在した原始的な演劇形式が、西暦前数世紀来、北西インドで活躍したギリシア人の影響によって組織化されるにいたったと考えられる。

インド古典劇の大きな特色をなすものに、言語の複雑さがある。一般に、身分の高い男性はサンスクリットを用い、婦女子や身分の低い男子は俗語（プラークリット）を用いた。プラークリットは使用者の身分・地位によって多数に分たれているが、重要なのはシャウラセーニー、マーハーラーシュトリーおよびマーガディーの三語で、いずれも地方の名に由来し、それぞれに中インド、南インド北部および東インドの方言を代表している。したがって、インド古典劇の理解鑑賞には、これらに通じている必要があったのである。インドの古典劇には、その他、登場人物、劇の構成などについて厳重な制約があり、しかもインド人特有のペダンチシズムで、極端に分類され定義づけられているのが常である。

戯曲の上演に際しては、常設の劇場はなく、祭典の際などに掛小屋で行なわれた。小屋は縦長

の長方形で、前半は観客席とし、後半の前面を舞台、その後に楽屋裏が置かれ、舞台と楽屋裏との間は幕で仕切られた。楽屋裏は俳優の扮装・休憩にあてられ、また舞台に上演できない事件の暗示（群衆の声などを含めて）に利用された。舞台装置は非常に簡単で、背景・書割もなく、大道具・小道具も発達していなかった。したがって、舞台の雰囲気は、舞台上の規約、とくに俳優の扮装・衣服・装身具の特色、科白による示唆、とくに身振りによって了解させたのであり、観客もそれら一定の規約を理解していなければ観賞することができなかった。

さて、インドの古典劇の作品で今日に伝わる最古の作品はアシュヴァゴーシャ（既述）の仏教劇の断片であるが、その全貌は明らかでない。三・四世紀には、バーサとシュードラカの作品がある。バーサは「スヴァプナ・ヴァーサヴァダッター」（夢にあらわれたヴァーサヴァダッター）の作者で、一九一〇年に南インドでそのサンスクリット原典が発見された（この作品については、「カター・サリット・サーガラ」(一)解題に簡単な紹介がある）。なお、このとき同時に、十三篇の劇作品が発見され、バーサの作品なりや否やについては論議があるが、いずれも佳作で、作者が凡筆でなかったことを示している。

シュードラカは『ムリッチャカティカー』（土の小車）の作者で、インド人の作家としては珍らしくシチュエイションの変化と登場人物の性格の描写にすぐれ、ユーモアに富んでいる。

嚮に、叙事詩人・抒情詩人として、インド古典文学の詞宗として述べたカーリダーサに「マーラヴィカー・アグニミトラ」（アグニミトラ王とマーラヴィカー姫）、「ヴィクラマ・ウルヴァシー

ヤ」（武勇によって得られた天女ウルヴァシー）、「アビジュニャーナ・シャークンタラ」（思出の品により再会しえたシャクンタラー）の三傑作がある。特に、最後の作品はゲーテをして嘆賞させた作品として有名である。なお、カーリダーサと前後して、ヴィシャーカダッタの政治劇「ムドラー・ラークシャサ」（ラークシャサと印璽）がある。インドの劇作品として珍らしく恋愛をテーマとせず、政略が中心のテーマとなっている。

七世紀の前半のハルシャ王（既述）に『ラトナーヴァリー』（ヒロインの名）、『プリヤダルシカー』（ヒロインの名）および『ナーガーナンダ』（竜王の喜び）の三篇の作品がある。前二者はヴァツァ王ウダヤナを主人公とし、われわれの『カター・サリット・サーガラ』(一)に含まれる「ウダヤナ王行状記」の一環に属する作品であるが、直接の関係はない。後者はわれわれの『カター・サリット・サーガラ』(三)に見られる「ジームータヴァーハナ（乗雲太子）の物語」を戯曲化したものである。

八世紀にはバヴァ・ブーティが出て、同じく三篇の戯曲をのこしている。就中、ラーマ王子を主人公とし、愛情と義務のディレンマを扱った「ウッタラ・ラーマ・チャリタ」（続ラーマ王子行状記）は傑作とされ、「マーラティー・マーダヴァ」（公子マーダヴァとマーラティー姫）は「インドのロメオとジュリエット」と称せられている。その後、いくつかの作品がインド戯曲史に名を留めているが、九世紀のラージャシェーカラの「カルプーラマンジャリー」（ヒロインの名）が注目されるに過ぎない。なお、笑劇など通俗劇に起原する演劇にも、七世紀の「マッタ・ヴィラーサ」（酔いどれの悪戯）など、佳趣の掬すべきものがある。

説話文学――嚮に述べたように、世界最大の叙事詩（マハーバーラタ）もあれば、ゲーテをして嘆賞させた戯曲（シャクンタラー）もあり、珠玉の抒情詩もあれば、寸鉄人を刺すような箴言も多いという、多彩をきわめるインド文学の中で、説話文学はとくにインド精神文化の華とまでいわれるほどに独自な発達を遂げ、インド文学史のみにとどまらず、世界の文学史にも大きな位置を占めていることが指摘されている。

しかも、世界の古代文学の中で、インドの説話文学ほどに大きな影響を及ぼしたものはほかにないのであって、わが中世における物語文学（『今昔物語』など）をはじめ東南アジアの諸文学（ジャヴァ文学など）において、そのモティーフなり、その構想なりを、インドの説話文学に負うものは実に多い。特にわが国においては、漢訳仏典を通してのインド説話文学の影響は、単に物語文学のみでなく謡曲、その他さらには小噺や落語にまで及んでいることが忘れられてはならない。

さらに、インドの説話は中世以前にペルシャ、アラビア、シリアなどを経てヨーロッパに伝わり、ヨーロッパの精神文化の中に大きな足跡を残した。ラ・フォンテーヌの「寓話」、グリムのいわゆる「童話」などの中に、インド説話は大きな素材を提供していることが知られている。

さて、インドの説話文学の作品としては、嚮に述べた『マハーバーラタ』などに於ける挿話、次節に述べる仏教徒あるいはジャイナ教徒などの宗教説話など注意すべき作品が多いが、中でも『パンチャ・タントラ』などの寓話文学と、『ブリハット・カター』の系列に属する娯楽文学とは、

単にインド文学史上に於ける傑作であるばかりでなく、比較文学的にも重要な意義のある作品が多い。

寓話文学は主として処世術の教訓のために編述されたもので、『パンチャ・タントラ』を代表的作品とし、収載された寓話・比喩譚は多彩を極める。現在、数種の伝本が知られ、『タントラ・アーキヤーイカ』がその最も古いものとされ、大体三、四世紀の成立であると考えられている。『パンチャ・タントラ』とは「五篇の教訓の物語」の意で、内容は（一）友人の離反、（二）友人の獲得、（三）戦争と平和、（四）所得の損失、（五）無思慮な行為の五篇に分たれ、収載された説話の数は伝本によって差異があり、流布本では六十二である。『パンチャ・タントラ』の伝訳の歴史は弘く、『聖書』につぐものとされ、現在インドの諸言語に訳されたもの十五、アジアの諸言語のもの十五、ヨーロッパの諸言語に伝訳されたもの二十二が数えられ、そしてアフリカの二言語にも伝播しているという。

なお、十世紀以後にベンガル地方で編述されたと考えられる『ヒトーパデーシャ』は『パンチャ・タントラ』の一伝本の改稿本である。

次に、娯楽文学では、西暦二世紀頃に、グナーディヤという者が俗語の一つパイシャーチー語で『ブリハット・カター』（大綺譚集）という物語集を書いたが、その原本は今日では亡失して、後代のサンスクリット語改稿本が三種知られている。その第一は、ネパールのブッダスヴァーミン（年次不詳）の作品『ブリハット・カター・シュローカサングラハ』（ブリハット・カタ詩形累編）

で、完本ではないが、原形に近いのではないかとされる。第二はクシェーメーンドラ(既述)の『ブリハット・カター・マンジャリー』(ブリハット・カターの花束)であり、第三はソーマ・デーヴァの『カター・サリット・サーガラ』である。両者いずれも十一世紀に属し、カシュミール所伝の『ブリハット・カター』に拠って改稿編述したものであるが、ソーマ・デーヴァは原本の内容を、クシェーメーンドラは原本の結構を忠実に再現したものであろうと言われる。しかし、文芸作品として見るとき、ソーマ・デーヴァは上品で美しい言葉を用い、誇張が少なく、技巧をてらわず、民俗文学の特色とインド古典文芸の特色とを巧みに結合させていて、インド文学史上に於ける説話文学の最高の傑作というも過言ではない。

この系列に属する物語集としては、『ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー』(ヴェーターラ鬼二十五話)、『シュカ・サプタティ』(鸚鵡七十話)、『シンハーサナ・ドヴァートリンシカー』(獅子王座三十二話)など興味深い作品がある。中でも、『シュカ・サプタティ』は妻女の姦通をとめるために鸚鵡が、あたかも『千一夜物語』に於けるシャーラザード姫のように、面白い物語をして六十九夜を過すという物語集で、『ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー』(本書「解題」を見よ)とならんで、比較文学的に極めて重要である。

なお、説話文学の一つの類型として、三篇の綺譚集がある。バーナ(既述)の『ヴァーサヴァダッター』と『カーダンバリー』(いずれも作品のヒロインの名)、ダンディン(七世紀)の『ダシャ・クマーラ・チャリタ』(十公子行状記)の三作品がこれに属する。これらは恋愛と冒険とをテーマとし、近代に於ける小

説の類型に属するが、いずれもインド古典文学に於ける貴重な散文作品で、華麗な文体と絢爛たる語彙で飾られている。特に、『ダシャ・クマーラ・チャリタ』はインド下層民の生活をも描いており、文化史の資料として興味深いものがある。

純文学以外の作品――以上に略述した純文学の作品のほかに、サンスクリット語で書かれた文献は哲学、宗教、文典、韻律、修辞、詩論、辞典など、また法律、経済、美術、音楽、天文学、数学、医学、さらには性愛など、学術あるいは実生活に関聯ある作品が相当に多い。インドではこれらも広義の文学作品とされるが、事実文学的な鑑賞に堪える作品も少くない。中でも有名なのが、『マヌ法典』、カウティルヤの『アルタ・シャーストラ』(実利論)、ヴァーツヤーヤナの『カーマ・スートラ』(性愛経)などである。

四、宗教文学

インド人ほど宗教的な国民はないと言われる。従って、文学も程度の差こそあれ、宗教的な雰囲気につつまれているのが常である。ヴェーダは既にバラモン教の聖典文学であり、その後に興ったヒンドゥ教にせよ、仏教にせよ、ジャイナ教にせよ、いずれも独自な厖大な文学作品を発達させ、多くのすぐれた作品をのこしている。

ヒンドゥ教文学――『マハーバーラタ』の附篇『ハリ・ヴァンシャ』は叙事詩というよりはヒンドゥ教の宗教文学であって、ハリとはヴィシュヌ神の別名であり、ヴィシュヌ神を讃仰する神話・伝説で満されている。また、ヴィシュヌ神の権化としてのクリシュナ伝説を詳細に記述し、クリシュナ伝説の最もよく纏った作品といって過言ではない。その後、ヒンドゥ教に於いてはプラーナと称する一聯の文学作品が発達したが、プラーナとは本来「古譚」の意味で、この意味よりすれば『マハーバーラタ』の大部分、そして『ハリ・ヴァンシャ』の殆んどすべてがプラーナであったと言いうる。既に古くヴェーダ文学の中にも、後世のプラーナ文学に包摂される古譚のいくつかが見られたのであるが、ヒンドゥ教のプラーナ文学に至って古来の神話・伝説の類は見事な展開を遂げ、それぞれの宗派に従って数多くのプラーナ文献が編述された。マハー・プラーナすなわち大プラーナと称する文献が十八篇あり、それらに附随するウパ・プラーナ(副プラーナ)の数をいれると、その数は殆んど知りがたい。十八マハー・プラーナの中では、『パトマ』、『ヴィシュヌ』、『バーガヴァタ』、『マールカンデーヤ』、『リンガ』、『マツヤ』、『クールマ』などの名が高い。

仏教文学――仏教の聖典もまた厖大な量にのぼる。使用される言語によって二大別されるが、いずれも原始教団に於いて成立した聖典から分れて、独自に展開したものである。まず、パーリ語を使用するセーロン島の南方上座部所伝の聖典は経・律・論の所謂「三蔵」のほかに、いくつ

かの蔵外の経典があって、仏教聖典として最もよく纏っている。三蔵の中で文学的香気の高い作品としては、仏教道徳を説いた『ダンマ・パダ』(法句経)、仏陀の言行を記した『スッタ・ニパータ』(経集『ブッダの言葉』)、教団の長老たる比丘・比丘尼が折にふれての心境を吐露した『テーラ・ガーター』(長老偈)と『テーリー・ガーター』(長老尼偈)などがある。説話文学としては、ブッダの前生物語の『ジャータカ』(本生譚)があり、現在の所伝は五四七話を集録して、宗教文学としてよりも、比較文学的に重要な意義を持っている。また、五世紀にブッダ・ゴーサが編述した『ダンマ・パダ・アッタカター』(ダンマ・パダ因縁譚)をはじめ、この頃に編述された各種の経典の註訳書も数多くの説話を引用しており、説話の比較研究上に欠くべからざる資料となっている。

次に、北方系の仏教は主としてサンスクリット語を用い、初期に於いては特にブッダの伝記あるいは仏教の伝説を取扱った作品に佳作が多い。ブッダの伝記にまつわる諸説話と本生譚とから成る『マハーヴァストゥ』、仏教説話の集録である『ディヴヤ・アヴァダーナ』と『アヴァダーナ・シャタカ』などがそれで、これらに収載される説話の多くは漢訳仏典の中にパラレルな所伝がいくつかあり、説話の展開を辿る好資料である。北方系の仏典の中で、サンスクリット原典の伝わるものも少くないが、その中でも『スヴァルナ・プラバーサ』(金光明経)、『ガンダ・ヴューハ』(華厳経)などは文学作品としても興味深いものがある。これらに対し、『サッダルマ・プンダリーカ』(法華経)、『スカーヴァティー・ヴューハ』(阿弥陀経)は宗教史的には重要な意義を持つ

経典であるが、文学的香気は乏しいといわねばならないであろう。ブッダを崇高な神的存在としてその伝記を記す『ラリタ・ヴィスタラ』(大乗荘厳経、普曜経)もブッダ伝文学の展開として興味深いものがある。アシュヴァ・ゴーシャ(既述)の出現は多くの継承者を輩出させたが、その中ではクマーラ・ラータ、アールヤ・シューラの名が高い。アールヤ・シューラの『ジャータカ・マーラー』(本生譚の華鬘)は三十五篇の本生譚を散文と韻文と交えてカーヴヤ体の美しいサンスクリット語で綴ったものである。

ジャイナ教文学——ジャイナ教もまた多くの聖典をもっている。これらは初期には若干のプラークリット語を用いたが、後にはサンスクリット語を用いるようになり、いくつかの傑作をのこしている。中でも、最高の傑作といわれるのはヘーマチャンドラ(十二世紀)の『トリシャスティ・シャラーカープルシャ・チャリタ』(六十三偉人伝)と、その附篇『パリシシュタ・パルヴァン』(補遺)で、ジャイナ教徒の神話・伝説を多く含んでいる。その他、説話文学にいくつかの注目すべき作品がある。

インド古典説話集 カター・サリット・サーガラ(四) 〔全4冊〕

1961年9月25日 第1刷発行 ©
1989年3月17日 第2刷発行

定価500円

訳者 岩本裕(いわもと ゆたか)

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan
ISBN 4-00-320664-9